



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	物質的インセンティブの限界 :フルシチョフ主義の挫折 (その一)
Author(s)	木村, 汎; Kimura, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 21, 83-156
Issue Date	1976
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5063
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113032.pdf



物質的インセンティブの限界

—フルシチョフ主義の挫折（その一）—

木 村 汎

目次			
はじめに	p. 83	のむつかしさ	p. 110
第一章 (総論) “新しい人間”の誕生?		② 労働の民族的価値づけ	p. 111
—「ロシア的」vs.「ソビエト的」		三 労働意欲少いソ連人	p. 114
エレメントの相剋—	p. 84	① 諸報告	p. 114
一 ソビエト革命と		② 新しい労働疎外	p. 116
“新しい人間”造り	p. 84	第二節 物質的関心	p. 120
① ソビエト革命の狙い	p. 84	一 ソ連型「社会主義」	
② 政治的社会化	p. 87	の基本的態度とその変遷	p. 120
③ 全体主義	p. 88	① レーニン期	p. 120
二 二つの“新しい人間”像	p. 90	② スターリン期	p. 122
① 理想的“共産主義的人間”	p. 90	③ フルシチョフ期	p. 123
② フルシチョフ的「実務人間」	p. 92	二 ロシア的価値体系	p. 125
三 現ソ連人の実像	p. 95	三 依然無欲なソビエト現代人	
① ソビエト側の主張	p. 96	一事態と新しい背景—	p. 128
② 西側の見解	p. 97	① 諸報告	p. 128
③ 「ロシア-ソビエト人間」	p. 100	② 新しい阻害要因	p. 130
第二章 (各論)「オブローモフ」		第三節 産業心理	
vs. homo economicus	p. 104	—経済人 (homo	
第一節 労働倫理	p. 105	economicus) の未発達—	p. 136
一 “労働にたいする新しい態度”		一 「企業家精神」の欠如	p. 136
—ソビエト側の主張—	p. 105	① 物質欲の充足手段の側面	p. 136
① 人間と労働	p. 105	二 “社会主義的産業人”	
② “共産主義的労働”		—そのイメージと	
概念の変遷	p. 105	創造の困難性—	p. 139
③ 新しい		三 「仕事」内容の充実	
労働倫理誕生の必然性	p. 108	—倫理の内面化—	p. 140
二 “オブローモフシナ”の重み		③ 労働の動機の側面	p. 140
—国民性と労働倫理—	p. 110	あとがき	
① 倫理「内面化」		—大衆 vs. エリート—	p. 146

はじめに

別稿ですでに詳述したごとく¹⁾、フルシチョフによる共産主義建設構想の要諦は、「(a) 物質的インセンティブをフルに利用することによって、(b)『人間労働』の生産性を高め、共産主義の物質的・技術的基盤をきずくこと」にあった。そして、このようなフルシチョフの手法は、(a)「物質的刺戟」により一層依存する点において、それぞれ「精神的刺戟」、「物理的強制」に頼ることの多かったレーニン、スターリンの各手法と異なり、また (b)あくまで「人間労働」を中心とする点において、「科学技術」を重視するブレジネフの方

1) 拙稿「移行期としてのフルシチョフ期——現実主義とユートピアニズムとの混淆——(1)」、『神戸学院大学法学』、第1巻、第1号、1970年3月、pp. 99-143。

法とも異なっていた。

ところで、一般に、いかなる政治・経済構想も、抽象的レベルにおける論理的整合性の優劣によってでなく、それらが現実の状況へ適用された結果収めた成績如何によって裁断される。したがって、各理論的構想が、歴史的、文化的、イデオロギー的、その他様々の諸要因の複雑に絡みあった特殊具体的な“場”にいかに適合したものであるか、ということが、重要問題となってくる。フルシチョフ構想に関していうならば、われわれは、フルシチョフ後半期（1950年代末～60年代初め）に、労働生産性が伸び悩み、ソビエト経済が停滞し、フルシチョフ自らの失脚を伴って、同構想が遂に挫折した歴史的経緯を既に知っている。それでは、同構想はなぜ失敗したのだろうか？ とくに上に述べた現実的適合性という視点からみて、フルシチョフ構想は、その適用の場たる当時のソ連社会のいかなる要因とフィットしなかったのか？——当然、この問に答える必要が生じてくる。この問題の解明は、一部フルシチョフ路線と断絶した反面、依然として同路線との連続面をも有するブレジネフ政権の諸問題（同政権の政策とその適否、ひいては政権の命運そのもの）を考えるうえからも、きわめて有意義な作業であろう。

さて、筆者の結論を先に述べるならば、物質的刺戟の集約的利用を通じ人間労働の生産性向上を計ろうとする、フルシチョフ構想は、少なくともつぎの四つの事情による制約を受けたに違いないと考える。一、怠惰なロシア人氣質、二、元来「平等」を目指すべきソビエト・イデオロギー、ならびに、1950年代末からソ連に現れたところの、三、人的資源の涸渇と、四、経済活動における「量から質へ」の転換の要請、である。このうち、前二者は（たとえフルシチョフでなくても）すべての時期のソビエト指導者が均しく制約される要因、すなわちロシア・ソビエト社会それ自体の中にア・プリオリにビルト・インされている「一般的」要因である。これにたいし、後二者は、とくにフルシチョフが制約された要因、すなわち1950年代末以後のソ連の時期がもつ「特殊的」要因である。

フルシチョフがこの四点に果して「どのていど十分な目配りをおこなったか」を、実証的に見究めることは非常にむづかしい。したがって、筆者は、まず、その前提として、「なぜ、これら四つの事項が、フルシチョフ構想の遂行にさいして十分考慮に入れられるべき要因であったのか？」という理由を説明することを、自らの当面の課題とし、そのことによって、上のより困難な問に本格的に取り組む準備作業ともしたい。きわめて残念なことには、紙数の制約ある本稿では、上の第一の要因のみを取扱い、残りの要因（二、三、四）の検討を別稿に譲らねばならない。

第一章（総論）“新しい人間”の誕生？

——「ロシア的」* vs. 「ソビエト的」エレメンツの相剋——

一 ソビエト革命と“新しい人間”造り

①ソビエト革命の狙い 1917年にロシアに開始されその後半世紀にわたって続行されて

* 文意から全く明らかで改めて断るまでもない事と思われるが、本稿全体において「ロシア的」ないし「ロシア人」という時、それは、現ソ連邦を構成するグルジャ人、カザク人、ラトビア人……などと対比した意味での（狭義の）大ロシア民族を指すのではない。それは、「ソビエト的」ないし「ソビエト人」と対比した意味での「社会主義」革命前の伝統的な国民性ないし国民を指している。

いるソビエト革命は、C. J. フリードリッヒ教授の「革命」の二分類中、まさしく「無制限革命」(unbegrenzte Revolution)¹⁾の典型例とみなされよう。なぜなら、ソビエト革命がめざす変革の範囲は、たんに国家形態のみ(——この場合は、「制限革命」である——)にとどまらず、「政治、経済、宗教、礼儀作法を含む、人間の全生活様式に及ぶ」²⁾からである。ソビエトにおける「革命」の理解も、本来そのようなものである。つまり、『ソビエト歴史百科辞典』によれば、「革命」とは、「たんなる一定領域のみに触れる、狭い、部分的な変革(=政治・国家的変革)とは異なり、経済、政治、イデオロギー、文化という社会の生活・活動の基本的側面に及ぶ変革」³⁾である。換言すれば、「革命」は、「政治的変革」や「社会・経済的改革」のみならず、新しい人間造りを主たる目的とする「文化革命」⁴⁾(——ないしは、西側の一専門家の表現によると、「心理革命」⁵⁾——)を、包含するのである(『コムニスト』誌上一論文)⁶⁾。改めて説明するまでもなく、「革命」(ないし「ソビエト革命」)をこのようにきわめて包括的に捉える考え方の根底には、ポリシェヴィキの目指す社会主義ないし共産主義の建設が、政治・経済システムの変革だけでは不十分であって、究極的には人間意識を含む人間社会のすべての側面の改造にまで突き進まねばならないという、レーニン主義的認識⁷⁾があるといえよう。レーニンは、次のように説いている。「社会主義への移行のためには、……完全な変革、全人民大衆の全域にわたる文化的

1) Carl J. Friedrich, *Der Verfassungsstaat der Neuzeit* (Berlin: Springer-Verlag, 1953), SS. 165-6; *Constitutional Government and Politics: Nature and Development* (New York and London: Harper and Brothers Publishers, 1937), pp. 125-126; *Constitutional Government and Democracy: Theory and Practice in Europe and America* (New York: Ginn and Company, 1950), pp. 145-146.

2) *Ibid.*

3) *Советская историческая энциклопедия* (Москва: Издательство «Советская энциклопедия», 1968), т. 11, стр. 926.

4) Л. Ф. Привалова, “Культурная революция как фактор развития социалистической демократии,” *Проблемы научного коммунизма* (выпуск 4) (Москва: Издательство «Мысль», 1970), стр. 222-264; *Научный коммунизм* (Москва: Политиздат, 1972), стр. 422-434; Alfred G. Meyer, *The Soviet Political System: An Interpretation* (New York: Random House, 1965), pp. 81-83.

5) E. Koutaissoff, “Soviet Education and the New Man,” *Soviet Studies* (Vol. 5, No. 2, Oct. 1953), p. 137 から再引用。

6) Э. Баллер, Н. Злобин, “Ленинская теория культурной революции и строительство коммунизма,” *Коммунист* (№ 13, сентябрь, 1970), стр. 84.

7) このように、革命がたんなる政治権力掌握や経済的改革に満足することなく、さらに人間性の変革にまで突き進まねばならないというレーニン主義的認識は、ポリシェヴィキ以前のロシア革命の伝統に由来している。(George S. Counts, “The Creation of the New Soviet Man,” *School and Society*, Vol. 95, No. 2297, Nov. 25, 1967, p. 443). すなわち、「レーニンの先駆者」(M. カルボービッチ。Michael Karpovich, “A Forerunner of Lenin: P. N. Tkachev,” *Review of Politics*, July, 1944) ないしは「最初のポリシェヴィキ」(A. L. ウィークス。Albert L. Weeks, *The First Bolshevik: A Political Biography of Peter Tkachev*, New York: New York University Press, 1968) と目される19世紀の急進的な革命思想家 П. Н. Ткачѳев (1844-85) は、すでに次のように述べていた:「われわれは、歴史的社會から、個人的所有權の伝統を絶滅し、交易の原則を根こそぎにし、家族関係を再構成し、人間を再教育する (перевоспитать людей)」(П. Н. Ткачѳев, *Избранные сочинения на социально-политические темы в четырех томах*, Москва: Издательство всесоюзного общества политкаторжан и ссыльно-поселенцев, 1933, т. 3, стр. 256). (強調点一木村)。

な発展が、必要不可欠である」⁸⁾。なぜならば、「人間の行動様式パターンや活動の動機が根本的に変革されることなしには、社会主義から共産主義への移行はありえない」⁹⁾からである。以上のごときソビエト革命の変革範囲とその究極的に行きつくところが人間意識の改造、即ち“新しい人間”の創造であることを、フルシチョフ期の一論文は、次の様に要約している。

「革命的实践そのものの範囲は、新しく物質的な生活条件を創りだすことよりも、広いのである。即ち、それは、同時に、新しい人間の創造である。というのは、共産主義の原則に沿っての社会改造は、共産主義的理想の精神に沿う人間意識の改造なしには、考えることができないからである。社会主義は、資本主義と比べて、より一層高度な労働生産性ならびに人民の生活水準ばかりでなく、資本主義の奴隷的習性、利己主義、個人主義から解放された、新しい人間を創り出すのである。」¹⁰⁾

さて、このような革命観は、当然のことながら、「人間性は、変えることができる」(Г. Н. Шахназаров)¹¹⁾という基本的人間観を前提としている。つまり、古来、人間性が可変か否かに関しては大いに論争のあるところであるが¹²⁾、ソビエト革命理論は、その拠って立つマルクス主義、より詳しくいうと、その中核をなす二つの理論、即ち、この世に存在する万物は絶えず変貌を遂げることを説く弁証法、そして、人間意識が「社会的に」下部構造によって規定されることを説く史的唯物論からいって、当然、「人間性の可塑性」(the plasticity of human nature)¹³⁾に与しているのである。たとえば、フルシチョフ期刊行のソビエト文献は、述べる：「人間、その精神的・道徳的資質は、不変なものではない (не неизменны)。……物質的な富の生産手段の変化は、必然的に、人間そのもの、人間の精神的プロフィール、世界観、心理、習慣の変化をも伴うのである。各々の社会体制は、それに適合した人間タイプを形成もする。一層発展した歴史的段階に対応するのは、より発達した人間個人である」¹⁴⁾。

8) В. И. Ленин, *Полное собрание сочинений* (Москва: Политиздат, 1964), т. 45, стр. 372.

9) V. I. Lenin, *Selected Works*, Vol. 7, pp. 81-2, 88-90.

10) Р. М. Самсонов. “Формирование и укрепление коллективизма и преодоление пережитков индивидуализма,” Академия общественных наук при ЦК КПСС, кафедра философии, *Проблемы коммунистического воспитания* (Москва: Издательство ВПШ и АОН при КПСС, 1960), стр. 196. ブレジネフも、第24回党大会の席上(1971. 3. 30), 「新しい人間の形成は共産主義建設における党の主要な課題のひとつである」として、つぎのように述べた：「偉大な任務—共産主義の建設は、人間そのものを全面的に発展させることなくして、前進しない。しかるべき物質的・技術的基盤なしには共産主義をきずくことが不可能であるのと同じように、人々の文化、教育、社会意識、内面的成熟の水準が高くなければ、共産主義を建設しない。」*Материалы XXIV съезда КПСС* (Москва: Политиздат, 1971), стр. 82-3.

11) G. H. Shakhnazarov (ソ連の学校教科書『社会科学』編集長), “You Can Change ‘Human Nature’,” in Harry G. Shaffer (ed.), *The Soviet System in Theory and Practice: Selected Western and Soviet Views* (New York: Aphleton-Century-Crofts, 1965), pp. 294-7.

12) たとえば、前出注(11)ならび Chap. I, “You can’t change human nature,” in James C. Davies, *Human Nature in Politics: the Dynamics of Political Behavior* (New York: John Wiley and Sons, Inc., 1963), pp. 1-30.

13) Raymond A. Bauer, *The New Man in Soviet Psychology* (Cambridge: Harvard University Press, 1968), p. 79 ff; Koutaissoff, *op. cit.*, p. 129.

14) А. И. Головнев, “Развитие социалистической культуры и формирование нового человека,” *От социализма к коммунизму* (Минск: Издательство академии наук БССР,

②政治的社会化 ところで注目すべきは、現代のソビエト理論が、このように下部構造の変化が人間意識のそれを必然的に促すことを説くと同時に、その変革プロセスを徒らに座して待つのではなく、それを人為的に早める努力をなさねばならぬと、力説することである。すなわち、フルシチョフ期の公式教科書『社会科学』(1961)は、この後者の作業の重要性を、つぎのように強調する。

「社会主義の経済的・政治的システムが個人の全面的な発展を促すという事実は、決して、意識革命がなにか自発的に起こりうるものであることを、意味するのではない。社会は、客観的要因だけに頼りっ放しで、客観的要因がその仕事を完了するのを待ちえない。意識改造のプロセスを、あらゆるイデオロギー的手段を用いて早める努力をなさねばならないのである。」¹⁾

そして、この人工的な努力による意識革命ないし人間改造の促進という作業に関し、ソビエト・システムは、他の体制にない圧倒的強さを誇るのである。なぜなら、ソビエト・システムは、「政治的社会化」(political socialization)²⁾機能を独占的にコントロール³⁾しているからである。つまり、ソビエト・システム下では、家庭、学校、政党、労働組合、マス・メディア⁴⁾、といった全ての政治的社会化の「エージェント」⁵⁾は、新しい「政治的文

1963), стр. 347.

- 1) Shakhnazarov, *op. cit.*, p. 296. プレジネフも、第24回党大会の席上(1971. 3. 30)、述べている:「ソビエトの人間の道徳的-政治的資質は、われわれの生活の全社会主義的ウクライド、社会における事態の全ての推移によって形成される」が、「とりわけ、党とその全組織の目的-志向的な、粘りつよい思想-教育作業によって形成される」(強調点-木村)。*Материалы XXIV съезда КПСС*, стр. 83.
- 2) 一般理論として、とくに Herbert H. Hyman, *Political Socialization: A Study in the Psychology of Political Behavior* (New York: The Free Press, 1959); Richard E. Dawson and Kenneth Prewitt, *Political Socialization* (Boston: Little, Brown and Company, 1969); Kenneth P. Langton, *Political Socialization* (New York: Oxford University Press, 1969) が参考になる。ソ連にかんしては、Alfred G. Meyer, *The Soviet Political System: An Interpretation* (New York: Random House, 1965), pp. 115-6; pp. 337-40; pp. 349-52 および Frederick C. Barghoon, *Politics in the USSR* (Boston: Little Brown and Company, 1966), pp. 84-111; Zbigniew Brzezinski and Samuel P. Huntington, *Political Power: USA/USSR* (New York: The Viking Press, 1963), pp. 76-90.
- 3) ソ連における政治的社会化は、「巨大で」(massive), 「独占的で」(monopolistic), 「包括的で」(comprehensive), そして「滲透する」(penetrating) メカニズムをもつ。F. Barghoon, "Soviet Russia: Orthodoxy and Adaptiveness," in *Political Culture and Political Development*, edited by Lucian W. Pye and Sidney Verba (Princeton University Press, 1965) p. 500.
- 4) 『ソ連共産党綱領』(1961)は、記している:「新しい人間の形成は、……党、国家、そして社会的組織体の教育的活動の全システムの影響下におこなわれ、そのさい新聞、ラジオ、映画、テレビに大きな役割が賦与されている。」*Программа КПСС*, стр. 117. また、シャハナザロフも同様に書いている:「すべての学校、文学、芸術、新聞、ラジオ、テレビ、そしてその他すべての他の人間の志操と感情に影響を与える手段が、倦むことなく用いられる」。Shakhnazarov, *op. cit.*, pp. 296-297. さらに新聞、ラジオ、TV の他、ロコミすなわち A. インケルスという「個人的な口頭による煽動」(personal oral agitation) も忘れてはならない (Alex Inkeles, *Public Opinion in Soviet Russia: A Study in Mass Persuasion*, Cambridge: Harvard University Press, 1950, p. 123; 辻村明訳『ソヴェートの世論』, 東京, 創元社, 1950, p. 114), とバグホーンは述べている。Barghoon, "Soviet Russia," p. 500.
- 5) Dawson and Prewitt, *op. cit.*, pp. 99-103.

化」(political culture)⁶⁾の創造という至上課題に、能率的に動員される。特に、ふつう政治的・社会化機能の主たる担い手と目される教育機関に期待される任務は大きい⁷⁾。つまり、ソビエト・システムにおいて「教育」とは、旧い社会の人間を破壊して新しい社会にふさわしいタイプの人間を創造・育成することの謂に他ならない。ソビエトにおける「子弟教育の狙いは」、——ソビエト教育学の父 A. C. マカレンコは、断言する——「ソビエト国家に必要なパーソナリティー……の形成である」⁸⁾、と。また、フルシチョフ期の『ソビエト教育学』誌上の一論文(1962. 1. 1)も、いわく：「新しい道徳をもつ、新しい人間の形成が、ソビエトの学校、家族、そして社会集団の最高の責務である」⁹⁾。かような任務からいって、当然ソビエト・システム下の教育の対象範囲は、包括的・網羅的、すなわち、「精神的生産の全システムの変形」(『コムニスト』)¹⁰⁾にまで及ぶ。この意味において、ソビエト初期の教育問題担当ボリシェヴィキ・M. N. カリーニンが、「教育者とは、人間の魂のエンジニア」(Педагог—это инженер человеческих душ)¹¹⁾と述べたのも、あながち誇張ではない。

③全体主義 ところで、他方、レッセ・フェールないし個人主義の伝統に拠ってたつ西側の視点からするならば、以上述べきたったときソビエト革命の無制約的包括性は、ボリシェヴィズムのもっとも恐るべき全体主義的特質を示していることになる¹²⁾。すなわち、西側のソ連研究家たちは、つぎのように糾弾する：ソビエト・システムは、「社会と人間の両方を完全に変形しようとする」¹³⁾全体主義である(L. ジャピーロ)。いな、より正確にいって、ソビエト革命の主たる狙いは、人間の操作条件でなく、むしろ人間それ自体の変革に求められるのではないか？ 然り。たとえば、故ハンナ・アーレント女史は、ボリシェヴィズム、ヒトラーリズム、イタリア・ファシズムを「全体主義」なる共通項で括った画期的な書物『全体主義の起源』(1951)のなかで、断言する。「全体主義イデオロギーの

6) Gabriel A. Almond, "Comparative Political Systems," *The Journal of Politics* (Vol. 18, August 1956), pp. 396-7; Dawson and Prewitt, *op. cit.*, p. 28.

7) E. フロムによれば、一般に、教育の社会的機能とは、「倫理的規範の威厳をよそおった社会的要求」を「個人的性質に変形させる手段」にはかならない。Erich Fromm, *Escape From Freedom* (New York: Rinehart and Company Inc., 1941) [未見]；日高六郎訳『自由からの逃走』(東京：創元社，1951)，p. 185, p. 315.

8) Barghoon, *Politics*..., p. 85 から再引用。

9) Н. И. Болдырев, "Моральный кодекс строителя коммунизма—основа нравственного воспитания молодого поколения," *Советская педагогика* (1, январь 1962), стр. 14.

10) Баллер, Злобин, *там же*, стр. 82.

11) М. И. Калинин, *О коммунистическом воспитании: избранные речи и статьи* (Минск: Издательство «Народная асвета», 1970), стр. 84.

12) Else Frenkel-Brunswik によれば、「全体主義は、殆んど定義からして、個人ないし集団生活のすべての領域に滲透、教化することを企てるものであることが明らかである」。Else Frenkel-Brunswik, "Environmental Controls and the Improvement of Thought," in *Comparative Politics*, edited by Harry Eckstein and David E. Apter (London: The Free Press of Glencoe, 1963), p. 483. A. L. ウンガーも、公権力が、ごく限られた少数者の手中に集中されて専制的に用いられる点と並んで、「全体的」(totalist), すなわち「全面に滲透する」(all-pervasive)ことを志向する点に、全体主義の特徴があるとしている。Aryen L. Unger, *The Totalitarian Party: Party and People in Nazi Germany and Soviet Russia* (London: Cambridge University Press, 1974), p. 1.

2) Leonard Schapiro, *Totalitarianism* (London: The Macmillan Press Ltd., 1972), p. 34.

本来の狙いは、外部世界の変形でも、社会の革命的变化でもなく、人間の本性 (human nature) そのものの変形である」³⁾、と。「ソ連の実験の根本目的は」——H. ラスキも、述べる——「一に『人間の造りかえ』 (remaking of man) にある。」⁴⁾人間ないし人間性の変形であるからして、それは、「人民の外面的行動のみでなく、思想」(H. マクロフスキーと J. E. ターナー)⁵⁾ や「プライベートな感情や情操 (R. バウアー, A. インケルス, C. クラックホーン)⁶⁾、さらに「態度や信条」(E. クタイソフ)⁷⁾といった内奥にまで到達する。かような局面に注目して、共産主義は、ナチズムやファシズム同様、「魂の工 作」(B. ウルフ)⁸⁾ないし「魂にたいして冒された暴力」(P. ジャネル)⁹⁾と看做されるに至るのである。

スターリンの死後、その後継者たちの手によって、スターリン的「全体主義」の行き過ぎが是正された結果、西側のソビエト観察者たちの間においても、ポスト・スターリン体制に対する「全体主義」概念の有効性が再検討されるに至っていること、改めて説くまでもない¹⁰⁾。たしかに、ソビエト・システムを「全体主義」体制と呼ぶとき、主として我々の念頭にあったのは、紛れもなくスターリンの体制すなわちスターリニズムのことであった。また、ワン・マン独裁者による恣意的専制やテロリズムの緩和といった視点（「権力行使の方法」）において、フルシチョフ期のソビエト社会が「全体主義」的色彩を著しく減少せしめた事実¹¹⁾に、疑いをさしはさむ余地はない。しかしながら、上に述べきいた如き我々の視点、すなわち、旧い人間性の根本的改革のうえにたって“新しい人間”を創造するというソビエト革命の究極目標（あるいは「権力行使の範囲」¹²⁾）にかんするかぎりにおいて、スターリンの死はなんらの変更を齎していないとみるべきである。ただ、わずかにその同一目標を達成する手段が、強制から説得ないし報償へとやや合理化されたというにすぎない。この意味において、フルシチョフ主義を、「啓蒙ないし合理化された全体主義」¹²⁾と規定した、故 M. フェインソッド教授の理解は、まったく正鵠をえている。いな、コト“新しい人間”造りなる究極ゴールに関するかぎり、フルシチョフ期は、つぎに引き続いて述べるように、スターリン時代よりも、さらに一步を進めたといつてさえ過言では

3) Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism* (Cleveland and New York: The World Publishing Company, 1964), p. 458; 大久保利郎/大島かおり訳『全体主義の起源』（東京：みすず書房、1974）、第3巻、p. 265.

4) Harold J. Laski, *Faith, Reason, and Civilization: An Essay in Historical Analysis* (New York: The Viking Press, 1944), pp. 157-8; 中野好夫訳『信仰・理性・文明』（東京：岩波書店、1951）、pp. 218-9.

5) Herbert McClosky and John E. Turner, *The Soviet Dictatorship* (New York: McGraw-Hill Book Company, Inc., 1960), p. 539.

6) Raymond A. Bauer, Alex Inkeles, and Clyde Kluckhohn, *How the Soviet System Works* (New York: Vintage Books, 1960), p. 22.

7) E. Koutaissoff, *op. cit.*, p. 129.

8) Bertram D. Wolf, *Communist Totalitarianism* (Boston: Beacon Press, 1961), p. 114, p. 124.

9) 丸山真男『現代政治の思想と行動』（東京：未来社、1957）、下巻、p. 478 から再引用。

10) さしあたって、Carl J. Friedrich, Michael Curtis, Benjamin R. Barber, *Totalitarianism in Perspective: Three Views* (New York: Praeger Publishers, 1969) 参照。

11) Unger, *op. cit.*, pp. 1-2; pp. 268-9. (強調点一木村)。

12) Merle Fainsod, "Rationalized Totalitarianism," in Howard R. Swearer and Richard Longaker (eds.), *Contemporary Communism* (Belmont, Calif.: Wadsworth, 1963), pp. 88-92.

ないのである¹³⁾。

二 二つの“新しい人間”像

①理想的“共産主義的人間” それでは、ソビエト革命が目指す“新しい人間”(новый человек)¹⁴⁾とは、いったい何なのか？ この問にたいして、甚だ残念なことに、マルクス主義の始祖たちは、その精確にして総合的な解答を遺していないのである。一般的にいて、マルクス・エンゲルスの理論体系中において、資本主義的旧社会にかんしては、その矛盾や欠陥が詳細な分析ならびに鋭い攻撃の対象とされる一方、革命によってこの旧社会が破壊された後到来するであろう肝心要の理想社会にかんしては、一向に具体性や説得性のある青写真が提示されないというアンバランスぶりが、指摘されている¹⁵⁾。未来人間像の提示も、この一般論の例外でなく、寧ろその正しさを裏書する好例とさえなっている¹⁶⁾。たしかに、マルクス、エンゲルスも、来たるべき未来社会の姿を少くとも推測しようとし、さらに「社会主義的人間について自分なりの観念をもっていたことは、疑いえない」(I. ドイツチャー)¹⁷⁾。事実、彼らは、「わずか二、三の断片的なヒントにすぎない」(同)¹⁸⁾とはいえ、未来社会の人間にかんする記述を遺しはしているのである。しかし、その「あちこちばらばらに残された」(同)¹⁹⁾彼らの推測をひとつひとつ検討してみると、それらは、つぎのような性質のもので、我々にとって大して役立つものでない事実が判明するのである。

まず第一に、マルクス・エンゲルスの未来社会の住人にたいする態度は、消極的²⁰⁾かつ楽天的²¹⁾であるといえよう。エンゲルスが、『家族、私有財産および国家の起源』の中で、未来世代の男女間関係にかんし、示している態度が、まさしく、その好例である：

「きたるべき資本主義的生産の一掃後において……今日我々が推測できることは、主として消極的な性質のものであって、おおむね、とりのぞかれる面だけにかぎられている。しかし、何がつけくわえられるであろうか？ それは、新しい世代……が成長した

13) J. アズラエルは、「“新しいソビエト的人間”を創るという究極の目標は、決して放棄されるどころか、事実上、新しい熱をもって、近年、最確認されてきている」と書いている。Jeremy R. Azrael, “Soviet Union,” in James S. Coleman (ed.), *Education and Political Development* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1965), p. 271.

14) Г. Л. Смирнов, *Советский человек: Формирование социалистического типа личности* (издание второе, дополненное), (Москва: Политиздат, 1973); С. М. Ковалев, *Формирование нового человека* (Москва: Издательство «Мысль», 1971).

2) たとえば, Hulicka 夫妻は、フルンチョフ期になってからも、未来共産主義社会の「青写真が、失望するほど模然として、ぼんやりして、断片的である (disappointingly vague, fuzzy and sketchy)」と、述べている。Karel Hulicka and Irene M. Hulicka, *Soviet Institutions, the Individual and Society* (Boston, Massachusetts: The Christopher Publishing House, 1967), p. 629.

3) このことは、ソビエト学者によっても承認されている。たとえば、Н. И. Болдуйриョフは、述べる：「マルクス主義の古典は、周知のごとく、共産主義的道德の諸原則の具体化、未来社会の人間の道德的プロフィルの解明といった課題を設定しなかった。」Болдырев, там же. стр. 18.

4) Isaac Deutscher, *Marxism in our Time* (San Francisco: The Ramparts Press, 1971), p. 228; 山西英一/鬼塚豊吉訳『レーニン伝への序章 その他一遺稿集一』(東京: 岩波書店, 1972), p. 118.

5) *Ibid.*, 同上。

6) *Ibid.*, 同上。

7) Karl Marx・Friedrich Engels, *Werke* (Berlin: Dietz Verlag, 1962), band 21, S. 83.

8) Deutscher, *op. cit.*, p. 231; 邦訳, pp. 122-3.

ときにおのずから決定されるであろう。」⁹⁾ (強調点—木村)。

ここには、未来世代にかんするきわめて「控え目な」(I. ドイツチャー)¹⁰⁾態度と、マルクス・エンゲルスが否定したはずの、「破壊的情熱は、創造的情熱である」¹¹⁾から、まず「旧世界を破壊する必要がある。旧世界の灰燼、廃墟の上に、より良い新世界が自然に萌え出るであろう」¹²⁾と説いたバクーニン流の革命的オプチミズムが、ないまぜとなっている。さらにいうならば、マルクス・エンゲルスは、未来の理想的人間に「否定的な」(negative)¹³⁾定義を与えようとしたといえよう。つまり彼らは、理想的人間とは何かということを積極的に論ずるよりも、彼がどういうものであってはならないかを論ずることによって、彼の間接的な枠組を与える手法をとったのである。たとえば、マルクスが『経済学・哲学手稿』の中で、未来共産主義を「人間の自己疎外としての私的所有の積極的な止揚」¹⁴⁾と定義したとき、彼は、(私的所有の止揚をもって共産主義が実現されるか否かの問題を別にして)共産主義の人間を自己疎外なき人間と規定したことは間違いないのである。

次に、マルクス・エンゲルスが珍らしく積極的に述べた未来社会の人間像はどうかというと、それは余りにもユートピア的と評さざるをえない。たとえば、マルクス『ドイツ・イデオロギー』中の、次の一節をみよ。

「共産主義社会では、各人が一定の専属の活動範囲をもたずにどんな任意の部門においても修業をつむことができ、社会が全般の生産を規制する。そしてまさにそれゆえにこそ私はまったく気のむくままに今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩りをし、午後には魚をとり、夕には家畜を飼い、食後には批判をすることができるようになり、しかも猟師や漁夫や牧人または批判家になることはない。」¹⁵⁾

この余りにも牧歌的で捉えどころのない叙述に比べ、『ゴータ綱領批判』のなかの、同じく人口に膾炙している一節は、まだしも分析的な概念提示ではある。すなわち、マルクスは、共産主義社会のより高次の段階に到達すると、人間は「個人の全面的発展」(die allseitige Entwicklung der Individuen)を遂げ、「生命の第一欲求にしたがって働き」、「“必要に応じて”の分配を受ける」……云々¹⁶⁾。ここで「個人の全面的発展」という重要な概念が提出されはしたが、ここでも亦、マルクスは、その段階では「知的労働と肉体労働との対立が消滅する……」¹⁷⁾云々といった、マルクス・エンゲルスの提唱する「科学的」社会主義が克服したはずの空想的、ユートピア的色彩を、依然として払拭し切れないことを

9) Marx・Engels, *Werke*, band 21, S. 83; 村井康男/村田陽一訳『家族、私有財産および国家の起源』(東京: 大月書店, 1966), p. 106.

10) Deutscher, *op. cit.*, p. 228; 同訳, p. 118.

11) 外川継男/左近毅編『バクーニン著作集』(東京: 白水社, 1973), 第1巻, p. 43.

12) N. Berdyaev, *The Russian Idea*, p. 148; 田口貞夫訳『ロシア思想史』, p. 176.

13) Deutscher, *op. cit.*, p. 228; 同訳, p. 119. Cf. Marx・Engels, *Werke*, band 21, S. 83; 邦訳, p. 106.

14) カール・マルクス著/藤野渉訳『経済学・哲学手稿』(東京: 大月書店, 1963), p. 145.

15) 同上。

16) Deutscher, *op. cit.*, p. 231; 同訳, pp. 122-3; Hulicka, *op. cit.*, p. 618, p. 624.

17) 古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』(東京: 岩波書店, 1970), p. 44.

18) Marx・Engels, *Werke*, band 19, S. 21; 邦訳『ゴータ綱領批判/エルフルト綱領批判』(東京: 大月書店, 1966), p. 45.

19) *Ibid.*

暴露しているのである。

しかし、改めて考えてみるに、そもそも未来社会論は、まさにその内容細目やタイムテーブルを具体的に提示しないところに、その最大の特徴（—したがってアppeールも亦—）が存在するのではないか。そのプロフィールが茫漠とした無定形なものであるからこそ、自己の願望を勝手気ままに投影し、各人各様のイメージを膨らませ、その夢に酔い痴れることができるのであろう。また、その実現が安易な時間表を峻拒するほど程遠い未来に設定されているからこそ、信奉者の無限のエネルギーを吸収しつづけることが可能となるのかもしれない。だとすると、未来イメージの具体的提示は、その最大アppeール源たるユートピア性を放棄するにも等しい自殺行為として、賢明な論者や治者の厳しく戒しめるべきタブーということになろう。それがあらぬか、レーニン、スターリン²⁰⁾、そして当然いやが上にも慎重居士のブレジネフら歴代のソビエト指導者たちは、このタブーを冒してまで、マルクス・エンゲルスの規定を超えてさらに未来社会の人間像を具体化する愚を犯さなかったのである²¹⁾。

②フルシチョフ的「実務人間」ところで、いうまでもなく、ソ連指導者の中で唯一人このタブーに敢然と挑戦した、あるいは挑戦せざるをえなかった、例外的存在が、フルシチョフであったといえよう。①スターリニズムのアンチ・テーゼとして登場したフルシチョフ政権には、当初より、スターリンによって「古代ギリシャ暦の朔日にまで引き延された」(P. ワイルズ)¹⁾完全共産主義のゴールをソビエト国民の比較的手の届きやすい視野に設定し直す任務を負わされていた。この課題は、②1958-9年、中国が、人民公社および「大躍進」運動をひっさげ共産主義への近道^{ジョートカット}を見出したとして共産主義への先頭走者たるべきソ連の地位を脅かすに及んで、現実化が緊急逃れえぬものとなった²⁾。しかも③1950年末の経済発展は、1958年の大豊作に象徴される如き、上昇気流にあると錯覚されるだけの根拠を備えていた³⁾。このような背景下(①②③)に、1961年、「近づきつつある共産

20) レーニン、スターリン期を通じ、「期待される人間像」としての共産主義の人間像を具体的に提出した者に、M. И. カリーニンがいる。しかし菊地昌典氏は、「1920年にあるいど垣間見られた没我的、献身的な世界革命家の姿」が、スターリン時代に入り「円満に発達した人間像」へと変貌をうけたと解釈されている。菊地昌典『人間変革の論理と実験』（東京：筑摩書房，1970），p. 33；Калинин, там же, стр. 49.

21) H. Rositzke も、書いている：「共産主義社会の青写真は、マルクスによって用意されなかった。マルクスは、この最終の展望にかんし、ふたことみことしか貢献しなかった。レーニンもスターリンも、この問題をあまり考えなかった。現在の高度に実務的なソビエト指導層（＝ブレジネフ、コスイギンらのこと—木村）も、この遙か将来のことについて投機的なことを言うのを厳しく回避してきている。ただ、性急で楽天的なフルシチョフの治下においてのみ、党イデオログは、完全共産主義とはどんなものであるについて真剣に考えることを勧めたのだ。」Harry Rositzke, *The USSR Today* (New York: The John Day Company, 1973), pp. 106-7.

1) P. J. D. Willes, *The Political Economy of Communism* (Oxford: Basil Blackwell and Mott, Ltd., 1962), p. 353; 堀江忠男監訳『社会主義の政治経済学』（東京：学文社，1971），p. 502.

2) J. ギルソンは、フルシチョフが『党綱領』で、ソ連社会の共産主義段階への到達の「明示的タイムテーブル」を与える決心をしたのは、中国の挑戦にたいして直接回答する必要とスターリン批判によって生じた心理的ショックを治療する必要にもとづく、と述べる。James M. Gilson, *The Soviet Image of Utopia* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1975), p. 5.

3) このような当時のソ連のオプチミステックな雰囲気ヴィヴィッドに伝えるものとして、Joseph S. Berliner, "Economic Reform in the USSR," in John W. Strong (ed.), *The Soviet Union*

主義社会の、近似的でなく完全に精確で科学的な、未来図を与える」(フルシチョフの忠実な代弁者^{マウスピース} Л. И. Ильичев 党煽動宣伝部長)⁴⁾ 青写真としての『共産党綱領』が、作製されたのである。この別名“フルシチョフ綱領”ないし“フルシチョフ憲法”と呼ばれる文書において、フルシチョフは、ソ連が「一世代内に共産主義へ到達する」⁵⁾という具体的なコミットメントをなすと同時に、マルクス主義の始祖たちも決して具体的には明らかにしなかった「共産主義社会の人間とは？」という問いに対して、歴史上「はじめて (впервые)」(『ソビエト教育学』)⁶⁾、「最高に充分な解答」(A. N. Голубнев, 他)⁷⁾を与えたのである。すなわち、「共産主義建設者の倫理規範」⁸⁾と題される部分が、それである。

しかし、この“新しい人間”の精神的特徴は、案の定さして新味のない失望的とさえいってよい代物であった⁹⁾。つまり、その12項目にわたる内容を、フルシチョフ自身の言葉で要約すると、“共産主義的人間”とは、つぎのような「新しい精神的特徴」の持主ということになるのである。「共産主義にたいする献身、その敵にたいする仮借ない態度、社会的任務の自覚、社会のためになる労働への積極的参加、人間の共同生活の基本的規範の自由意志による遵守、同志的な相互扶助、誠実と正義感、社会的秩序の破壊にたいする寛容、等々。」¹⁰⁾

否、新味がないどころか、むしろ逆にこのフルシチョフ版“新しい人間”が備えるべき諸価値のカタログを吟味して気づかざるをえないのは、それらが、本来ソビエト体制が糾弾して焉まないはずの西欧ブルジョア資本主義社会の倫理的諸価値に「おどろくべきほど似かよっている」(H. マルクーゼ)¹¹⁾事実である。もちろん、両社会の市民たちが夫々生活し忠誠を誓う社会体制が異なることは確かであるが、その点を度外視すれば、ここに列挙されているシンドロムのなかで、およそ西側世界の価値目録にない理念を見出すことは、まず不可能といえよう¹²⁾。しかも、この類似をたんなる偶然と片づけるわけにはいかないのである。というのは、これら個別的諸価値の類似・共通性は、当然、西欧資本主義、ソ連「社会主義」の両体制において、それらの諸価値が果す社会的機能、そしてその機能の総合的具現体としての人格の類似・共通性を、示唆せずにはおかないからである。つま

Under Brezhnev and Kosygin (New York: Van Nostrand Reinhold Company, 1971), pp. 50-51 参照。

4) Л. Ильичев, “Вопросы коммунистического воспитания трудящихся”, *Коммунист* (№ 14, сентябрь 1959), стр. 48.

5) *Программа коммунистической партии советского союза* (Москва: Политиздат, 1974), стр. 142.

6) Болдырев, *там же*, стр. 14.

7) А. И. Головнев, “Развитие социалистической культуры и формирование нового человека, *От социализма к коммунизму* (Минск: Издательство академии наук БССР, 1963), стр. 348.

8) *Программа КПСС*, стр. 119.

9) Hulicka 夫妻にいわせると、共産主義社会のための“新しい人間”を發展させるというゴールは、『党綱領』の全体の中で「最も弱い」(the weakest)。Hulicka, *op. cit.*, p. 618.

10) *Внеочередной XXI съезд коммунистической партии советского союза (стенографический отчет)* т. 1 (Москва: Госполитиздат, 1959), стр. 55.

11) Herbert Marcuse, *Soviet Marxism: A Critical Analysis* (New York: Vintage Books, 1961), p. 216; 片岡啓治訳『ソビエト・マルクス主義』(東京: サイマル出版会, 1969), p. 182.

12) *Ibid.*; 同上。

り、より具体的に換言すれば、つぎのようなことになる。上に列挙された各資質からソビエト式修飾語句^{ジャージョフ}を払い落すと、フルシチョフ版“新しい人間”とは、要するに、①ソビエト政治体制にたいする思想的忠誠心、②後述する（第二章、第一節、一；第三節、二、特に140ページ参照）“労働にたいする新しい態度”即ちソビエト経済発展に資する勤労モラル、という二大特徴を備えているべきこととなる¹³⁾。だとすると、これは、かつて、社会主義者たちによって正に一貫して侮蔑の対象とされてきた、資本家階級にとって都合のよい理想的労働者像、すなわち社会の規範^{ノルム}をよく守り、「うんと働き、少く食べる」（バブーフ）¹⁴⁾人間のイメージとびったり重なってくるのである。

したがって、一方において、このように解釈し提示されたフルシチョフ版“新しい人間”が、マルクス・エンゲルスが夢みた「全面的に発達を遂げた個人」としての“新しい人間”に比べ、功利的な使命を帯びた矮小な存在——米国の一社会学者によれば、“the eager-robot”¹⁵⁾——にまで貶められていることは、まず間違いない。この点を衝いて、つねにマルクス主義の原点に拠つ I. ドイツチャー、H. マルクーゼ、（毛沢東）中国が、この墮落したフルシチョフ版“新しい人間”を断乎として斥け、それを社会主義的人間の系譜に加えることを峻拒するのは、一理も二理もあろう。しかしながら、他方において、このフルシチョフ版“新しい人間”を、マルクスの余りにもユートピア的ヴィジョンをソ連の発展段階に見合うようにリアリスト的な修正を加えたものと看なすことも、まったく不可能ではないのである。否、そのように解釈することによってはじめて、フルシチョフが、「社会主義的人間についてのマルクス主義的イメージのみじめなパロディ」（I. ドイツチャー）¹⁶⁾と揶揄されながらも、この種のタイプの人間の育成を固執し続けた理由を、理解できるのである。生涯、革命の理論家ではあってもその実践家でなくましてや革命後の国家統治^{レギスラツ}に腐心する必要の全くなかったマルクス、エンゲルスと異なり、フルシチョフには、（前任者レーニン、スターリン同様）観念の実験室で純粋培養された高次元の価値理念に自己陶醉する余裕はさらさらなかった。フルシチョフとても、リップ・サービスながら、「我々は、すべての人を、全面的に発達した人間にしたいと思っている」¹⁷⁾と述べてはいる。しかし、その「全面的に発達した人間」を、いかにして造るか？ それは、マルクス自身も了知していたように、「物資のあり余る豊かさ」（изобилие материальных благ）によって始めて可能である。その「豊かさ」を準備するために、国の工業化を推進しつつける以外方途はない。ソビエト大衆をまずその一層の工業化の担い手に育て上げること——これが、フルシチョフに与えられた課題だったのである。かくして、フルシチョフには（前任者レーニン、スターリンと同様）、「強力な近代国家や経済国家の建設に欠くことのできない、

13) R. S. シャーレットは、“新しい人間”を、「法を守り、一生懸命働く」(a law-abiding, hard-working) 市民と定義する。Robert S. Sharlet, “Systematic Political Science and Communist Systems,” *Slavic Review* (Vol. 26, No. 7, March 1967), p. 24.

14) 豊田堯『バブーフとその時代』（東京：創文社、1958）、p. 414 ならびに Meyer, *op. cit.*, p. 362 から再引用。

15) Ralph T. Fisher, Jr., “The Soviet Model of the Ideal Youth,” in Cyril E. Black (ed.), *The Transformation of Russian Society* (Cambridge, Mass: Harvard U. P., 1961), p. 635.

16) Deutscher, *op. cit.*, p. 241; 前掲訳, p. 138.

17) XXII съезд коммунистической партии советского союза (стенографический отчет) (Москва: Госполитиздат, 1961), т. 1, стр. 220.

勤勉、鍛練、秩序、堅実、目的意識および自己抑制といった特性」(K. メーネルト)¹⁸⁾をもつ「新しい人間の主導像」(同)の設定が、必要不可欠と信じられたのであった。このように考えてくると、工業化の離陸ならびに展開期の担い手としての実務人間 (практик) の育成ならびに補充は、遅れて工業化を開始したロシアの指導者たち全てにとり不可避の要請であり¹⁹⁾、ただレーニン、スターリンが「羊頭狗肉」政策を執ったのに比し、フルシチョフは、「建て前」(マルクスの共産主義的人間)と「本音」(工業化の担い手たる実務人間)とのギャップを、敢えて縮小したにすぎないともいいうるのである。

三 現ソ連人の実像

以上で明らかとなったのは、(一) ソビエト革命が究極的には人間意識の改造をめざす運動であり、正にそれ故に西側によって蛇蝎のごとき嫌悪の対象として警戒されていること、さらに (二) “新しい人間” という場合、少なくとも二通りの人間のタイプ、すなわちマルクス、エンゲルスが夢みた極めてユートピア的な理想的人間像と、レーニン、スターリン、フルシチョフが公然ないしは心中秘かに想定していた西側近代社会の勤労者に非常に似かよった存在との区別をなすべきこと、であった。

ここで、(三) あくまで理論的レベルでの論争や考察にすぎなかったこれまでの議論を、現実との関わり合いへと移さなければならない。なぜなら、ソビエト・ロシアにおいて実際にいかなるタイプの“新しい人間” づくりがおこなわれているかの検討を抜きにして、いくら議論を重ねようと、それは徒らに実益のない机上の空論に終る危険があるからである。たとえば、もしも、革命後半世紀のソ連邦においてマルクスやフルシチョフの思惑どおりの“新しい人間” が誕生していると判断されるならば、それは、ソビエト側にとって革命の完成とみなされるべき輝かしいアチーブメントないし工業化の期待たがわぬ進捗ぶりを示す慶事であり、西側にとっては、自分の思い通りの人間を創造しうる G. オーウェルの世界が、1984 年を待たずして地上に出現したことを意味しよう。しかし、もし、逆にそのような“新しい人間” が現ソ連邦において誕生していないと判断されるならば、共産主義革命の理論家や実践家はたんにタテマエや「頑固な願望」²⁰⁾を語っているのみで、それを額面通りに信用した西側の危惧は取り越し苦労の杞憂として一応安堵の胸を撫でおろすことができるだろう。そこで、このような決定的な差異を導くことになる判断の基礎とな

18) Klaus Mehnert, *Der Sowjet-Mensch: Versuch eines Porträts nach dreizehn Reisen in die Sowjetunion, 1929-1959* (Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt GmbH, 1967), S. 42; 村田碩男訳『ソビエト人—その考え方と生き方—』(東京: 朝日新聞社, 1960), pp. 39-40.

19) *Ibid.*, S. 42; 同訳, p. 40.

1) 最初「奴等はあるに何でも——それこそ何でも——いわせることはできる。しかし、奴等だって、あんたにそれを信じさせることはできないの。奴等はあるの心の中までは入れないだから」と言う恋人ヂューリアにたいし、ウィンストンは「そうだ、全くその通りだ。奴等も人の心の中までは入れない」と合づちを打っていた。後に、彼らは、考えを変えねばならなかった。なぜなら、「しかし、奴等は、人の心の中まで入って来ることができた (But they could get inside you)」からである。George Orwell, *Nineteen Eighty-Four* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books Ltd., 1949), p. 136, p. 233 (強調点—原文); 吉田健一/竜口直太郎訳『一九八四年』, p. 211, p. 360.

2) フルシチョフ期の代表的な未来学者 Ц. ステパニャンは、彼らが述べている、共産主義社会にかんする提案や予言のすべてが、全く「頑固な願望」(благие пожелания) でも、「ユートピア的かつファンタステックな計画」でないことを断言する。Ц. Степанян, “Коммунизм и собственность,” *Октябрь* (№ 9, сентябрь 1960), стр. 10.

るのは、結局現ソ連人がいかなるタイプの人間であるか、という事実認識である。彼は、果して、マルクスが語った類いの“共産主義的人間”あるいはフルシチョフが自己の構想実現に必要とした人間像であろうか？ それとも、現ソ連人は、そのいずれの意味での“新しい人間”でなく、たとえば、我々が馴れ親しんでいるあの19世紀の文学作品中の主人公達とさして大差ないロシア的精神性の持主であろうか？あるいは又、以上のいずれのカテゴリーにも属さない第三の人間類型を形成しているのだろうか？極めて厄介なことには、これらの間にかんしても、それぞれ肯定、否定の回答が存在する。すなわち、この判断の基礎となる事実認識に関しても亦、論争が存在するのである。社会・人文科学の世界においては、純粋客観的な facts というものは存在せず、すべての事実が、あくまで認識の主体によって媒介された事実である原則を想起すれば、これは当然予期されることがらである。我々の任務は、さらにその各々の事実解釈の適否を検討することとなる。

①ソビエト側の主張 まず、革命後のソ連において人間意識の改造が実現し、マルクスの理想であれフルシチョフ的であるのを問わず、とにかく“新しい人間”が誕生していると見る説と、「人間性の可塑性」に疑問をもち、一般の現ソ連人が相も変わらず「ロシア的」人間にとどまっていると見る説との対立を紹介せねばならない。

ソ連の公式見解は、いうまでもなく、前者の立場を表明している。スターリンによって粛清されたとはいえソ連史上最大のイデオログとみなされる H. N. ブハーリンは、かつて「もし、我々が人種的・国民的性格というものは、それを変更するのに何千年もかかるほど大きなものであるという見解をとるならば、当然、我々のすべての仕事は、馬鹿げたものとなるだろう」¹⁾と述べたといわれるが、このように、ソ連の公式見解は、「人間性の可塑性」を信奉するのみならず、人間意識改革の実現、ならびにそれに要するタイムスパンのとり方に関し、きわめて「楽観的」立場を一貫して保持する。フルシチョフ政権の公式スポークスマン・Л. Ф. イリイチョフ党中央委煽動宣伝部長は、1959年、一部のブルジョア理論家の説く、「社会主義が人間の意識ならびに心理を変えることはなかったし、また変えうるものでもない」との主張に反駁し、「真実をいうと、社会主義革命の歳月の間にソビエト国民は、自分たちの国家の様相を一変させたばかりでなく、彼ら自身をも変えてしまった」²⁾と豪語したのである。また、フルシチョフ期の聖典のひとつ『マルクス・レーニン主義の基礎』(1961)も、同様の趣旨を、次のように述べる：

「ソ連邦や人民民主主義諸国において社会主義革命の過程でなしとげられた人間意識の改造、新しい精神的特徴の出現（たとえば、ブルジョア的個人主義に対立する集団主義）は、人間性の不変というブルジョア社会学の主張を確実にくつがえしている。」³⁾

フルシチョフ期の『ソビエト教育学』誌上の一論文(1962年1月)は、さらに一步を進めて、“新しい人間”の出現を、つぎのように主張するに至った：「我が国および社会主義

1) Bauer, *op. cit.*, p. 81 から再引用。

2) Ильичев, *там же*, стр. 48.

3) *Основы Марксизма-ленинизма* (Москва: Госполитиздат, 1962), стр. 145; マルクス・レーニン主義の基礎刊行会訳『マルクス・レーニン主義の基礎』(東京: 合同出版, 1965), 第1分冊, p. 232.

陣営における新しい人間の形成は、これらの見解（＝人間性の不変性を説くブルジョアの見解—木村）を完全に論駁する。新しい共産主義社会の人間が、今日、生れつつあるのだ。ソビエトの国土の上を、新しい人間が、自信をもって闊歩している。……共産主義の前夜の今日、未来の人間の道徳的プロファイルが、ますますはっきりと現われつつある。」⁴⁾

②西側の見解 しかしながら、西側のソビエト観測者の圧倒的大多数は、上と正反対の認識をもっている¹⁾。彼らは、まず、一元的な経済構造や独占的な政治権力ないし教育体系が、必ずしも「包括的一枚岩の、同質的な政治的カルチャー」²⁾を造り出してない (J. R. アズラエル) と見る。たとえば、E. クタイソフは、ソビエト・ロシアにおいて「経済的土台における変化が、自動的に上部構造および人間行動様式における変化をもたらすであろうという、初期の期待が失望に終わった」³⁾と見なす。I. シャピーロも、既述のごとく (88 ページ)、ソビエト・システムを「社会と人間の双方の完全な変革をめざす (aim)」(強調点—木村) 全体主義運動と規定するものの、他方においてそのめざす目標が必ずしも達成されていないことにも、決して注意を怠っていない。すなわち、

「支配権力は、教育ならびに国に入ってくるすべての情報にたいするコントロール、そして近代的・技術的な宣伝方法の広範な利用および独占によって、住民が、支配エリートに要求するものを自発的に信仰するように教え込み、条件づけることができる。……にもかかわらず、50 余年に及ぶ経験が示しているのは、これらの方法のどれ一つも、またそれら全部を合計しても、人間性を完全に支配することができないでいる事実である。」⁴⁾

西側のソ連社会観測者たちが以上のように判断する根拠としては、ソビエト側（フルシチョフ）も部分的に認める⁵⁾「複雑な人間性」と「歴史的な重み」という二つの理由の他、ソビエト側が決して認めない「抵抗の心理構造」とでも名づけるべき事由が挙げられる。

4) Болдырев, *там же*, стр. 17-18.

1) 西側オブザーバーの中にも、新しい“ソビエト的人間”の出現を説く者が、全くいないわけではない。たとえば、英国のソ連通故 A. ワース記者は、『フルシチョフ下のロシア』(1961)のなかで、「私は、“ソビエト的人間”が実在しており、過去3世代にわたって発展しつづけてきたことを全面的に信じている」と結論した。理由として、本稿, p. 101 参照。Alexander Werth, *Russia Under Khrushchev* (New York: Hills and Wang, 1962), p. 132; 湯浅正訳『変るソ連—フルシチョフが出てから—』(東京: 岩波書店, 1963), p. 137; また J. アズラエルも、フルシチョフ期にモスクワ大学に留学した体験をもとに、学生の大多数が、“新しいソビエト的人間”であるとしている。但し、アズラエルの“新しいソビエト的人間”なる用語は、「政治的アパシーであると同時に政治的に忠実である」現状満足型タイプの学生を主内容としており、我々の本文での用語法と随分異なる意味あいで使用されていることに、注意せねばならない。Tim Callaghan, “Studying the Students: Between Conformity and Dissent,” *Survey* (No. 33, July-Sept. 1960), p. 18; Jeremy R. Azrael, *Managerial Power and Soviet Politics* (Cambridge: Harvard University Press, 1966), p. 162; 安平哲二訳『ソ連における経営者の力』(東京: 時事通信社, 1969), 下巻, p. 99.

2) Jeremy R. Azrael, “Soviet Union,” in James S. Coleman, ed., *Education and Political Development* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1965), p. 248.

3) E. Koutaissoff, *op. cit.*, p. 137.

4) Schapiro, *op. cit.*, p. 36.

5) バグホーンは、「政治的社会化における自らの課題が恐ろしく困難なものであることを、ソビエト指導部が、暗示的ないしあるていどは明示的に、承認している」ことを指摘する。Barghoon, “Soviet Russia,” p. 496.

第一に、そもそも「人間の精神は、人間が考えつくいかない制度よりも一層複雑である」(B. ウルフ)⁶⁾から、「新しい人間」の創造は、工場の国有化、堰堤や発電所の建設、農業の集団化のような工合にはいかない。フルシチョフですら、このことに全く気づいていない訳ではなかった。いわく、

「新しい人間の教育には、大きな努力と賢明な態度が必要である。なにしろ、生きた人間が対象だからである。人間にあっては、すべてが、相互にうまく結びついている。しかし、これは、機械の部品のあいだにあるような相互関係ではない。この関係は、遙かにずっと複雑である」。(第22回ソ連邦共産党大会〔1961〕宛てフルシチョフ報告)⁷⁾。

第二に、一般に人間の心理や習性は、自然発生的に時間をかけて形成されるのであり、ロシア史が過去数十世紀の星霜を通じロシア人の精神形成に捺した刻印は、たとえいかに強力なインテンシブとはいえ、期間にして僅か50年のソビエトの人為的な営為によって、一挙に風化するような生易しい代物ではない。ソビエト側も、革命後徐々に、このことに気づくようになった。たとえば、「以前には、プロレタリアートが権力を自分の手に握りさえすれば、24時間で人間を変えることができるように思っていた」N. エレンブルグは、「万事そう簡単にはいかないことを悟り」⁸⁾、フルシチョフ自身も、人間意識の中に棲む「過去の遺物」の執拗さを、つぎのように自覚するにいたったのである：

「人間の意識のなかの資本主義の遺物との闘い、幾百万の人々の何世紀にもわたって形成されてきた習慣や風習の変更——それは、我が革命によって開始されたものである——は、長期にわたる困難なことからである。過去の遺物——それは、悪魔のように人間の理性を圧迫する恐ろしい力である。それは、それを生みだした経済的条件が消滅した後も、なお長い間にわたって、数百万人の人々の日常生活と意識の中に根をはっている。」(同)⁹⁾

このように、第一、第二の事由は、ソビエト側も(極めて渋々ながら)容認するところとなっているが、この二つの必然の系たる、「いかなる人工的制度に対しても抵抗なく服従するのは、人間の本性に適っていない」¹⁰⁾ (B. ウルフ) という第三の事由は、ソビエト側が意識的、無意識に看過しているものである。より詳しくいえば、ほんらい歳月をかけて自然発生的に形成されるべき筈の複雑・非合理的な人間心理がもし外からの人為的な力によって急激な変更を強制されるばあい、受け手は当然消化不良を起こすが、その折もっ

6) Wolf, *op. cit.*, p. 267.

7) *XXII съезд коммунистической партии советского союза*, т. 1, стр. 124.

8) Илья Эренбург, “Люди, годы, жизнь,” *Новый мир* (XXXVI, №. 8, август, 1960), стр. 54; 木村浩訳『わが回想—人間・歳月・生活』, I (東京: 朝日新聞社, 1968), p. 75; A. Солженицынも『ガン病棟』のなかで、登場人物のひとり(シュルービン)をして、つぎのように語らしている:「社会が急激に変ったとき、われわれは考えた。生産手段を変えるだけで充分だ、人間はすぐ変る、とね! そうは問屋が卸さなかった! 人間は少しも変らなかった。人間だって生物の一種だからね。変るには何千年もかかる!」A. Солженицын, *Собрание сочинений* (Frankfurt/Main: Possev-Verlag, 1969), т. 2 (*Раковый корпус*), стр. 488.; 小笠原豊樹訳(東京: 新潮社, 1969), 第二部, p. 148.

9) *XXII съезд ...*, т. 1, стр. 123.

10) Wolf, *op. cit.*, p. 267.

とも手っとり早く且つ無難な適応形態として、大部分の人間はソビエト的社会化に「外面的には同調」(outward conformity) (B. ムーア)¹¹⁾、その実「ロシア的」なものへの「内部的亡命」(internal emigration; inner exile)¹²⁾をはかるというテクニックに訴えるのである。この〈表向きはソビエト人、その魂はロシア人〉の二重人格ないし「偽装」(Verstellung) (K. メーネルト)¹³⁾テクニックは、実は、「圧倒的な外界からの力にもかかわらず内なる自由世界を構築する」(G. ファイファー、他)¹⁴⁾という従来ロシア人が必要に迫られて考案した伝統的な擬態の一応用にすぎないのであるが、彼らは、このような「生活の智慧」によってソビエト型「全体主義」の「二重思考」(オーウェル)に対抗しているといえるのである。ともかく、このような「同調の保護色」(the protective coloration of conformity) (H. スミス)¹⁵⁾を、ソ連からの亡命者の一人は、つぎのように説明している：

「ロシア人の基本的性格について、安易な当て推量を急いではならない。服装の画一性とか、行動の画一性とかは、……保護色の一形態にすぎないのである。彼は利口であるから、人の注目をひくような真似はしない。しかし、心の中では、前世紀のロシア文学にある、激しい情熱と抑圧されない感情をもった群像と、彼は同じ生き物なのだ。」¹⁶⁾そして、最後に付言すべきは、このような「ポリシェヴィキ化された無意識の中に長い夜を永らえた」(L. S. フォイヤー) 旧いロシアの諸価値はがたんに静かに眠っているだけでなく、「システムの隙間から間歇的に問題状況毎に噴出し、自己主張する」(同)¹⁷⁾ことなのである。

以上のような事由で西側のソ連専門家の多くはソビエト・システムが“新しい人間”創りという課題に「十分には成功していない」(F. バグホーン)¹⁸⁾と結論する。I. ドイツチャーも、この最終的結論には同意して述べる：「ソ連は……すばらしい業績をあげているにもかかわらず、いままで社会主義的人間を生み出していないし、また生み出すこともできなかった。」¹⁹⁾

では、西側は、現ソ連人を一体どういう種類の人間と考えるのか？ 大雑把にいて、二つの理解が存在する。一つは、革命前のロシア人との連続性を強調する見解である。つまり、彼らによれば、現ソ連人は、「未だロシア国民の太古からの特質を保持している」²⁰⁾

11) B. Moore, *Terror and Progress USSR* (Cambridge: Harvard U. P., 1954), passim.

12) R. B. Reddaway, "Aspects of Ideological Belief in the Soviet Union," *Soviet Studies* (Vol. 17, No. 4, April, 1966), p. 477; Tim Callaghan, "Studying the Students: Between Conformity and Dissent," *Survey* (No. 33, July-Sep., 1960), p. 13.

13) Mehnert, *op. cit.*, S. 42; 前掲訳, p. 42.

14) G. Feifer, *Justice in Moscow* (New York: Simon and Schuster, 1964), pp. 128-9; *Message From Moscow* (New York: Vintage Books, 1969), pp. 95-98; 霞ヶ関研究会訳『ロシア その光と影』(東京: 霞ヶ関出版, 1970), pp. 117-20 など。

15) Hedrick Smith, *The Russians* (N. Y.: Quadrangle, 1976), p. 10.

16) レオニード・ウラヂーミロフ著/菊地昌典訳『素顔のロシア人』(東京: タイム・ライフ・インターナショナル, 1969), p. 26.

17) Lewis S. Feuer, "The Socio-psychological Transformation", *Fifty Years of Communism in Russia*, ed. by Milorad M. Drachkovitch (University Park and London: The Pennsylvania State University Press, 1968), p. 120-121.

18) Barghoon, *op. cit.*, p. 33; p. 110.

19) Deutscher, *op. cit.*, p. 243; 邦訳, p. 141.

20) Michel Gordey, *Visa to Moscow* (New York: Alfred A. Knopf, 1952), p. 35. 福永英二/上

どころか、「その精神構造は、(ソビエト時代になってからも)依然としてロシアの農民のそれと同じ」(強調点—原文)²¹⁾、あるいは「前世紀のロシア文学にある群像と同じ生き物」²²⁾と断定する。ロシア生れの仏記者ミシェル・ゴルデーも、結論している：

「ソ連文学が“天才スターリン”の保護下に、新しいタイプの人間性の到来を説いても、無駄である。つまり、ソビエト体制は、34年かかっても、数世紀にわたって蓄積され固められたロシア的サイコロジューを、ペン先で抹消しえないでいる。」²³⁾

もう一つは、資本主義社会における人間との類似性を説く見解である。西側専門家のある者、I. ドイツチャーのようなトロツキスト、H. マルクーゼのごとき新左翼系学者などによって代表される見解であるが、なかでもその対立点ゆえに(毛沢東)中国ほどその尖鋒の鋭いものはない。つまり、中国的イメージによれば、現ソ連人は、「痩せて腹をすかした共産主義者よりも、肥えて安楽な共産主義者の方がベター」という基本的考えにもとづくフルシチョフ式「グリーン共産主義」体制下にかい駟られ墮落した存在である²⁴⁾。彼らは、精神主義情熱が全く欠如し、たんに物質的刺激に反応する束の総合体でしかなく、「アメリカ的生活様式」にあこがれるそのメンタリティーは、西欧資本主義諸国のプチ・ブルとなんら変るところがない²⁵⁾。

③ロシア—ソビエト人間 さて、それでは、このように両極端に対置される諸見解のどちらが、より実態に近いであろうか？ 筆者は、まず第一に、マルクス型の理想的“共産主義人間”が、現ソ連に誕生しているという判断は、それを証明する理論的かつ事実の根拠の薄弱な政治的主張として現在のところ一応排除してよかろうと考える。何度も繰り返すように、そもそもマルクスの“共産主義的人間”とは、「過去のいかなる時期においても、またいかなる場所においても決して存在したことの無い人間類型」(G. S. カウンツ)¹⁾であり、「^{ソレン}当為としてのソビエト市民 (Soviet-citizen-to-be) の肖像」(G. D. ホランダール)²⁾ないし「来たるべき世代の自我理想 (the Ego-ideal)」(E. クタイソフ)³⁾なのである。最終的結論としては、“ソビエト的人間”の存在を信ずると述べた A. ワースですら、部分的には次のような疑問を表明せずにはいられなかった：

「“ソビエト的人間”が、どの程度まで現実的というよりむしろ理論で考えたものか、

原和夫訳 (東京：岩波書店、1954), p. 39. 但し、訳文は一部変更した。殆んど同一文章として、*Message From Moscow*, p. 96; 邦訳, p. 117.

21) *Message From Moscow*, p. 103; 邦訳, p. 125.

22) 前掲菊地訳, pp. 25-6.

23) Gordey, *op. cit.*, p. 35; 前掲訳, p. 39.

24) См. Н. С. Хрущев, *Строительство коммунизма в СССР и развитие сельского хозяйства* (Москва: Госполитиздат, 1963), т. 6, стр. 336.

25) たとえば、「フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓」(1964. 7. 14), 『改訂 国際共産主義運動の総路線についての論戦—レーニン主義なのか それとも 社会帝国主義なのか?—』(東京：東方書店, 1975), pp. 355-6.

26) 同上。

1) George E. Counts, “The Creation of the New Soviet Man,” *School and Society* (Vol. 95, No. 2297, Nov. 25, 1967), p. 443.

2) Gayle Durham Hollander, *Soviet Political Indoctrination: Developments in Mass Media and Propaganda Since Stalin* (New York: Praeger Publishers, 1972), p. 9.

3) Koutaissoff, *op. cit.*, p. 130.

という疑問が持たれるであろう。生きた肖像というよりもむしろ将来のヴィジョンではないのか。⁴⁾

また、フルシチョフ期の未来学の権威 Л. ステパニャンは、「新しい人間の教育は、社会主義の建設とともに、完成するのではない。共産主義の発展的建設の条件が備ってはいじめ、共産主義的意識の完全なる勝利のための前提要件が創り出されるのだ」⁵⁾と述べ、また他のソ連の学者も、「社会のすべての成員の、全面的かつ調和ある発展は、共産主義の高次の段階でのみ達成される」(強調点—木村)⁶⁾ことを認めた。これらは、つまり要するに、共産主義が未だソ連邦に達成されていない以上、少なくとも社会のすべての人間が“共産主義的人間”となっていないことを認めているに外ならない。

筆者は、第二に、西側へ亡命したロシア生れの作家やコレスポンドントたちが往々にして極論しがちなように、現ソ連人を、たとえば、19世紀の伝統的なロシア人と「全く同じ生き物」(Л. ウラヂーミロフ)⁷⁾と断定してしまう見解にも、抵抗をおぼえる。それは、たとえば、あたかも戦後の日本人が、依然として幕末ないしは明治初期の日本人と全く同じ生き物と説くに等しいではないか。ロシア的遺産を強調する余り、現代における思想、機械、社会……等々の激動が人格形成に与える衝撃や影響を極度に過小評価する弊に陥っている。英国のソ連通故 A. ワースも、この意味で過去3世代にわたって“ソビエト的人間”が発展をつづけてきたことを強調したくだりで、述べている：

「たとえば、イギリス人やスコットランド人が、独自の習慣と多少なりとも他から尊敬されるような道徳作法のおきてとをもって、典型的な性格を作り上げたように、他の国々でも、長い訓練の過程を経てあるかなりはっきりした道徳的タイプを生み出すことができるのであれば、ソヴェトの場合も、40年もつづいた比較にならぬほどはげしい訓練制度の下で、かなりはっきりした道徳的タイプを生み出せるわけであり、どうしてそれを認めずにいられようか。」⁸⁾

また、「“新しいソビエト的人間”の神話が、依然、主として、実現されていない」と結論する M. ゴルデーですら、その一方において、「今日の若いソビエト市民、共産主義体制下で成長した男女が、ドストエーフスキーのえがく、不決断で、神秘的で、懊悩するキャラクターと、殆んど無関係であることは、確かである」⁹⁾と、観察しているのだ。

筆者は、第三に、中国などがやっきとなって主張するほどに、フルシチョフ治下のソビエト勤労者大衆が資本主義的物質人間に化していたとも考えないのである。もしもソ連に物質的報償が得られることを条件に嬉々として仕事に勤しむ労働者群が形成されていたならば、それは、フルシチョフはじめソビエト指導者たちが内心大いに喜びとするところであろう。ところが、本稿の筆者によれば、正にそのような人間類型が大量に生産されえな

4) Alexander Werth, *Russia Under Khrushchev* (New York: Hills and Wang, 1962), p. 132; 湯浅正訳『変るソ連—フルシチョフが出てから—』(東京: 岩波書店, 1963), p. 137.

5) Ц. Степанян, “Формирование коммунистического сознания масс,” *Коммунист* (№. 11, июль 1962), стр. 20.

6) Головнев, *там же*, стр. 349.

7) 前掲菊地訳, pp. 25-26.

8) Werth, *op. cit.*, p. 132; 前掲訳, pp. 137-8.

9) Gordey, *op. cit.*, pp. 37-8; 前掲訳, p. 42.

いところに、“フルシチョフ主義”即ち主として物質的刺激にたよって生産性の向上をはかろうとした構想の誤算と破綻の一因が潜んでいたと考えられるのである。では、ソ連邦において物質人間の形成を阻んでいるものは何か？ この間に、筆者は以下の本稿全体で答えるつもりなのであるが、ここでその骨子を予告篇的に要約しておこう。

まず第一は、イデオロギー的制的である。これについては別稿で詳述する予定であるが、ソ連邦が曲がりなりにも「社会主義」なる看板を掲げて国造りをしていることから逸脱することが許されない原理ならびに枠組をさす。(a) 第一に、ソ連は、不当な平等 (yравниловка) を峻拒することは無論であるとはいえ、「階級なき社会」を目指すと宣言しているタテマエから、そのファンクションにおいて資本主義原則となんら変わるところのない「働きに応じての分配」原則を活用するあまり、賃金格差をむやみに拡大するわけにはいかない。たえず、もう一つの原則、すなわち「必要に応じての分配」なる共産主義的原則を併せ用いることによって「働きに応じての分配」原則の利用の結果生れ広がる賃金格差が「合理的な」程度を超える消費生活上の不平等の源泉とならないようにチェックせねばならぬ。(b) 第二に、ソ連は、生産手段の私有ならびに市場における自由な取引活動を廃絶するという二点において「社会主義」の最低限度の体裁を維持せねばならぬから、この枠組のソビエト勤労大衆の物的関心の促進といっても、それはせいぜい国有・公有の企業内の夫々の職場においてノルマを（超過）達成することによって、他人よりも数パーセント上まわる報償プレミアムを与えるという程度の奨励にとどまざるをえない。換言すれば、その物的関心が、この範囲で満足せずに、さらに私企業、商業取引、投資、等々といった資本主義的な企業家精神 (entrepreneurship; entrepreneurism) にまで発展しては困るわけである。要するに、(a) も (b) も、片一方においてはその成長を煽っておきながら、同時に他方その肥大化を懸念して抑制策を構ずるという、甚だ中途半端な政策であり、このような身勝手な意図のもとに、丁度都合のよい物的関心が育成されることはきわめてむづかしいのである。

第二に、同じくフルシチョフならずとも歴代のソビエト指導者が制約される要因として、ロシア人の国民性がある。これについては、以下の本稿で詳述するので、ここでは一言するに止めるが、ロシア人が物質的インセンティブでもって引火するのに必ずしも最善の素材でないということさをさす。西欧文明圏に属しているロシア人は、たしかに、中国人、インド人など東洋民族と比べると、より物質主義的志向様式の持主ではあろう。しかし、その同じ西欧物質文明圏に属する諸国民の中では、ロシア人は、どちらかという物質的繁栄や立身出世よりも休息、享楽、安逸を嗜好する民族的性向をもつのである。いうまでもなく、このような民族的な嗜好や生活慣習は、革命すなわち生産手段の資本家・地主的所有から全人民的なそれへの移行という政治・経済的变化によっても、一朝一夕に変化するものではない。ここにおいて、物質的報償という挺子によってロシア人大衆（たんに一部の選良^{エリート}でなく）の勤労度を高めようとする構想は、重大なる障害に遭遇するのである。

では最後に、筆者自身は、フルシチョフ期のソ連人を如何なるタイプの人間と考えるか、と問われるであろう。この問に対し、はなはだ残念なことには、筆者は、自らの積極

的イメージを提供しえないのである。つまり、従来もっぱら〈制度〉論的アプローチを採っており、ごく最近（ブレジネフ期の）ソ連に滞在する機会を得てはじめて〈人間〉性の洞察を加味するソ連研究の必要性に目覚めたばかりの筆者としては、せいぜい他の諸家の提出しているイメージのうち直観的にどうしても同意できない部分を消去するのが、現在、関の山というところなのである。したがって、まず、一応暫定的に、筆者も亦、きわめて平凡かつ抽象的な結論、すなわち、現代ソ連人のなかに、「ロシア的」、「ソビエト的」両要因が混合した「ロシア-ソビエト人間」とも名づけるべき、第三の人間類型が形成されているという一般論¹⁰⁾に与する、と述べておきたい。次の問題は、当然、では「ロシア的」、「ソビエト的」両エレメンツの混り工合如何ということになろう。ところが、ソビエト教育ことに“新しいソビエト人間”造りにかんして恐らく西側随一の専門家と目される G. カウンツですら「ソビエト独裁が続くかぎり、ソビエト的人間が、実際、どの程度 (to what extent) 創り出されているか、知りえないのである」(強調点—木村)¹¹⁾と卒直に告白しているように、この混り工合を科学的・実証的に測定することは、現ソビエト・システムの提供・放出する情報の量と質からいって、ほぼ不可能に近いのである。しかも、『共産党綱領』(1961)が掲げた模範的「共産主義建設者」の要件が12項目にわたっているように、現ソ連人の関心と行動の領域も、政治、経済、哲学、宗教、倫理……の多岐に及んでおり、その各々についての「ロシア的」、「ソビエト的」要素を総計する作業は、ますますもって至難事となる。そこで、以下の本稿では、フルシチョフ治下のソビエト大衆の“労働”観のみに局面を限定して、その中における「ロシア的」、「ソビエト的」両エレメンツの相剋状況を一つのケース・スタディとして検討してみることにする。このような領域の設定は、もちろん人間労働に生産性向上の重要挺子を求めようとしたフルシチョフ構想の妥当性を検討しようとする筆者の個人的関心にもとづくものであるが、“労働”概念がマルクス主義者ならびにソビエト指導者の全てによって、人間活動のもっとも重要な側面とみなされている、換言すれば“新しい〈労働〉”に対する態度こそが“新しい〈人間〉”誕生を左右する中心ポイントとされていることからして、これまでの議論の十分とはいえないまでの一応の継続を主張しうると信ずるである。そして、この各論とも称すべき第二章において筆者が到達した結論めいたもの(仮説)を前以ってここで述べることが許されるならば、「ソビエト的」、「ロシア的」両エレメンツの混り工合は、ソビエト社会を構成する階層によって大きな違いを見せる、の一言に要約しうるだろう。すなわち、一方において、ソ連社会のエリート層においては、目的意識的な営為が比較的効を奏して、「ソビエト的」要因が、自然発生的な「ロシア的」エレメンツに打ち克っており、そしてそのかぎりにおいて“新しいソビエト人間”——但し、(スターリン-)フルシチョフ的概念における——が誕生していると看することも可能である。ところが、他方、これとは対照的に、大衆レベルにおいては、自然発生的力の方が目的意識的な努力にうち勝っているために、

10) 第4回ソ連・東欧学会(1975. 9. 9 於神戸大学)における辻村明(東大)教授の、本稿筆者の質問にたいする御回答も、この立場とみなされる。なお、R. A. Bauer, A. Inkeles, C. Kluckhohn らハーバード大のソ連亡命者研究グループが、「ソビエト・システムを、伝統的な制度、価値、行動様式とポリシェヴィキのそれらとの複合体」と捉えているのも、同趣旨の考え方と思われる。Bauer, Inkeles, and Kluckhohn, *op. cit.*, p. 23.

11) Counts, *op. cit.*, p. 443.

依然として「ロシア的」要素の強い残存がみられる、したがって亦、彼らをとうてい“新しいソビエト人間”と看しえないのである。あるいは、このことは、逆に、厳しい自律的・他律的な規制と訓練によって「ソビエト的」価値を内面化しえたごく少数の人間が「エリート」となり、意識的・無意識的にこのような精神的自己革命を積極的に試みず、また試みるものの結果的に成功しえず依然として「ロシア的」世界を温存した者が「大衆」にとどまっているとも、換言しうるであろう。

第二章 (各論)

「オブローモフ」vs. homo economicus

何度も繰り返すように、フルシチョフ構想は、(a)「物質的関心」を刺戟されることによって、(b)「労働意欲」を燃やす、(B)「産業心理」構造の持主の存在を、その前提としていた。このような人間タイプは、スターリン時代とくに、1931年以來の「選別的」報償政策によって、一部の^{エリート}選良——フルシチョフ自身を、その代表選手ないし優等生とみなすことも可能である——間に、かなり成功裡に形成されていた。したがって、フルシチョフ構想の新味は、この既にスターリンによって開始された賃金格差をベースとする物質的刺戟政策を大衆化した点に求められる。つまり、フルシチョフは、かつては一部のエリート層のみを対象とし又対象とせざるをえなかった物的リターンならびに物質的刺戟原則の両方を、大衆一般のレベルにまで拡大しようとしたのである。このフルシチョフ主義は、一方において、^{エリート}選良間ならびに選良と大衆間の賃金格差を縮小するという意味で、スターリン主義の修正・断絶であるが、他方、かつては主として^{エリート}選良に適用されていた物質的刺激を広く大衆にも及ぼそうとしたという意味においては、まさしくスターリン主義の拡大・継続と解釈されうる。いずれにせよ、この政策転換が、フルシチョフ個人の^{キャリア}経歴と人生哲学、そして彼がその前任者（スターリン）から受け継いだ時代の特殊性の双方を反映していることは、まちがいない。

ところで、問題は、フルシチョフ期ソ連の一般大衆が、上の三条件 ((a), (b), (B)) を充足する人間類型であったか否か、また、そのような人間類型たることを志向したかどうかである。この問に対する解答が「イエス」であれば、フルシチョフ構想は国民の顕在的潜在的願望にマッチした巧妙な政策として、大いなる成功を収めたであろう。しかし、逆に、もし「ノー」であれば、同構想は、たんにフルシチョフ個人の wishful thinking の政策化に過ぎず、その前提における誤算ゆえに当初からその成功が危ぶまれて然るべきだったと言わざるをえないであろう。では、実態はどうであったのか？ 結論を予め述べることに許されたとしたら、筆者は、ソ連の実態が「われ（フルシチョフ）笛吹けども、汝ら（国民大衆）踊らず」、すなわち、後者の解答に近い状況であったのではないかと考える者である。以下、そのように判断する根拠をしめすために、この相互に密接に絡み合っている三項目を、理論操作上の便宜のためやや強引に分離し、(b), (a), (B) の順序で検討を加えてゆくことにしたい。

第一節 労働倫理

一 “労働にたいする新しい態度” —— ソビエト側の主張 ——

① 人間と労働 〈労働〉と〈人間〉との関係、つまり労働が人間生活全体のなかでいかなる意味をもち、またもつべきであるかというこの一見なにげない問題に関し、後述するように、一義的な見解が必ずしも存在しているわけではないのである。しかるに、マルクス主義者間では、「労働は、人間生活全体の第一の基本条件であって、しかも、ある意味では、労働が人間そのものをつくりだした」と説いたエンゲルス（『猿が人間になるについての労働の役割』¹⁾の言葉を改めて引用するまでもなく、〈労働〉を、人間を〈人間〉たらしめている最重要の活動として把握することに、異論を唱える者はいない。このように〈労働〉即〈人間〉と捉える思考様式からして、彼らは、いわば必然的に、“新しい〈人間〉”の基本的メルクマールとして“新しい〈労働〉”を最重要視する。たとえば、マルクスは、〈労働〉が共産主義的（すなわち、各人にとって「生命の第一欲求」）となった時点を以って、“共産主義的〈人間〉”の生成と看し²⁾、スターリン期の教科書『社会科学』（1942）も、「新しい人間、すなわち、共産主義社会のメンバーの基本的特徴は、労働にたいする新しい態度、労働にたいする共産主義態度である」³⁾（強調点—原文どおり）と述べた。また、フルシチョフによって作られた『共産党綱領』（1961）の「共産主義建設者の倫理規範」の全項目中、「社会の福祉をめざす自発的な労働」⁴⁾がその中核をなす要件とみなされたことは、H. マルクーゼも説くところである⁵⁾。

② “共産主義的労働” 概念の変遷 それでは、マルクス主義の立場にたつ者により、このように“新しい人間”形成の成否を握るキー・ポイントとみなされた“新しい労働態度”が、果してフルシチョフ期ソ連において、成功裡に形成されたであろうか？ この問題を検討するまえに一その必要不可欠な準備作業としても—、マルクス主義者たちののべる“共産主義的労働”あるいは“労働にたいする新しい態度”とは一体何を意味するのか、が明らかにされねばならない。なぜならば、“新しい人間”概念に見られたように、（既述90～95 ページ）、同一タームを用いつつも、彼らが実際意味するところは、それぞれ少しずつ異なることが往々にしてあり、このいわゆる“共産主義的労働”も、決してその例外をなすものでないからである。

そもそも、マルクスが未来の共産主義社会における〈労働〉というとき、何度も繰り返すように、彼は、「生命の第一欲求」にもとづいておこなう労働を念頭においていた。革命の理論家としてのマルクスのこのような理想主義的イメージないし定義は、革命の実践家や行政の担当者によって、次第に骨抜きにされてゆく。まず、やや長文にわたるがレーニンの有名な“共産主義的労働”（коммунистический труд）を、全文、つぎに掲げよう。

- 1) Marx・Engels, *Werke*, band 20, S. 444; 大月書店編集部訳『猿が人間になるについての労働の役割他』（東京：大月書店、1947）、p. 7.
- 2) Marx・Engels, *Werke*, band 19, S. 21.
- 3) 英訳 B. P. Yesipov and N. K. Goncharov, *I Want to be Like Stalin*, translated by George S. Counts and Nucia P. Lodge (New York: The John Day Company, 1947), p. 34. 原題の『教育学』にこのような英訳名を与えることの是非について、see B. Wolf, *op. cit.*, pp. 113-114.
- 4) *Программа КПСС*, стр. 120.
- 5) Marcuse, *op. cit.*, p. 218; 邦訳, p. 183.

「狭義の、厳密な意味では、共産主義的労働とは、社会のための無償労働であり、ある特定の義務をはたすためにではなく、ある特定の生産物にたいする権利を得るためにではなく、またあらかじめ規定された法定の作業基準量によることなしにおこなわれる労働、自発的な労働、作業基準量なしの労働、報酬をめあてにしない、報酬についての条件のない労働、公共の利益のために働くという習慣と、公共の利益のために働かなければならないことを自覚した（そして習慣となった）態度にもとづく労働のことであり、健康な身体の欲求としての労働のことである。」¹⁾

この定義においてレーニンが、既にマルクス主義の祖師による、人間の自然な意志に発するものとして労働概念から、歴代のソビエト指導者たちによる、公共社会のために行うよう仕向けられた労働概念への、変形過程の第一歩を踏みだしていることは、誰の眼にも覆いがたく明らかであろう。すなわち、レーニンは、一方において、たしかに、彼の考える“共産主義的労働”が「健康な身体の欲求としての」、「自発的な労働」であると述べ、マルクスの定義を継承する姿勢（リップ・サービス？）をしめしはしている。しかし、彼は、他方同時に、彼の考える“共産主義的労働”が、「公共の利益のために働かなければならないことを自覚した」、「社会のための無償労働」（強調点いずれも木村）であると述べているのである。つまり、マルクスにあっては、飽くまで未来の“共産主義的労働”における〈個人〉の立場が力説されていたのに比し、レーニンにあっては、労働が〈個人〉とならんで〈社会〉のものでもあるという視点が、併せ強調されるに至ったのである。しかも、“共産主義的労働”における、この〈個人〉と〈社会〉の両契機のうち、レーニンがどちらに重点をおくべきと考えたかは、彼が、上の定義にひきつづき、“共産主義的労働”の現実の形態について、補足説明しているところからも、明々白々といわねばならない。すなわち、「土曜労働、労働軍、労働義務——これこそ、さまざまな形態をとった社会主義的・共産主義的労働の実践的な実現である。」²⁾

つぎに、フルシチョフはどうであろうか？ フルシチョフが、さらにレーニンを修正することによって、マルクスからの離脱過程を促進したことは、ほぼ間違いない。そのフルシチョフ的修正作業の特徴は、レーニンの“共産主義的労働”の定義の一部分を大胆に拡大ないし変形し、しかもその作業を選りに選ってレーニンないしレーニン主義的原則の名において正当化した点にある。具体的にいって、フルシチョフは、まず、(i) レーニンの定義に萌芽的に存在していた労働を義務と捉える考え方を、何の遠慮もなく真正面から説いてみせた。たとえば、フルシチョフは、すでに1960年、「レーニンが、労働にたいする新しい態度、すなわち社会にたいする自己の義務(обязанность)にたいする新しい態度を大事にするように教えた」³⁾（強調点—木村）と述べたが、ここに見事に成立した「労働＝義務」の等式は、1961年のフルシチョフ『党綱領』中において、さらに明確に、「社会の福祉のための労働は、各人の神聖な義務(обязанность)である」⁴⁾と、公文書化されたので

1) Ленин, Полное собрание сочинений, т. 30, стр. 482; 大月書店版, 邦訳, 第30巻, p. 538.

2) Ленин, там же; 同上。

3) Н. С. Хрущев, О внешней политике советского союза: 1960 год (Москва: Госполитиздат, 1961), т. 1, стр. 598.

4) Программа КПСС, стр. 118. (強調点—木村)。

ある。つぎに、(ii) レーニンの定義で指摘された労働の社会的公共性の側面を、さらに強調した。つまり、レーニンは、“共産主義的労働”が「公共の利益のために (на общую пользу) なされねばならない」と、〈労働〉の「目的」の社会的公共性を指摘していたが、フルシチョフは、もちろんこの「社会の福祉のための (на благо общества) 労働」(フルシチョフ『党綱領』の「共産主義建設者の倫理規範」)を強調したのみならず、さらに一歩進んで〈労働〉の「仕方」も社会的、すなわち“共産主義的労働”が各個人のテンデンバラバラの労働の寄せ集めでなく集团的に組織された労働でなければならないと説いたのである。すなわち、フルシチョフ『党綱領』は、「社会成員の、共同の、計画的に組織化された (совместный, планомерно организованный) 労働が、……集団主義、労働愛、人道主義の精神への人間意識の改造を導く」⁵⁾と明言し、フルシチョフ期の一学者 Д. И. Чесноковも、「労働すること、なにかんづく組織的に (организованно) 労働すること——ここに、共産主義社会の勤労者の最も重要な要請が存するであろう」⁶⁾(強調点、共に木村)ことを、強調した。最後に、(iii) レーニンは“共産主義的労働”が「無償労働」たることを強調、その典型例としての土曜労働を“共産主義的労働”の萌芽と讃美したが(既述106ページ参照)、フルシチョフ的〈労働〉観の根底には、「立派な仕事にたいして、労働の高い生産性にたいしては、それにふさわしい賃金、物質的報償がなければならない」⁷⁾、すなわち「労働＝有償」という考え方が、貫かれていた。何度も引用するフルシチョフ『党綱領』中の「共産主義建設者の倫理規範」は、要請する。「社会の福祉のための労働。すなわち、働かざる者は食うべからず」⁸⁾、と。

“共産主義的労働”の実際の中身が、遂にこのようなところにまで変形されてくると、^{オリジナル}当初の概念が予想だにできなかった批判にも身を曝さねばならぬことになる。すなわち、体制を超えた類似性の指摘である。R. J. ミッチェル教授(米ニュー・オリンズ大)は、「現ソビエト指導部が、古いドイツ人に特徴的な“勤労狂”(arbeitswut)に驚ろくべきほど似かよった勤労倫理を教え込もうと試みている」⁹⁾と評する。また、とくに、資本主義の勃興に資したプロテスタンティズムの労働エートス¹⁰⁾との類似性というコメントがなされる。たとえば、H. マルクーゼは、スターリンやフルシチョフがソビエト勤労者に内心期待している労働倫理が、個人の快楽や幸福を禁じひたすら神聖なる労働義務に一身を捧げるよう厳しく要求したカルヴァンの教義といちぢるしく似かよっていると評した¹¹⁾。しかも、彼は、この類似が、「たんなる偶然でなく」¹²⁾、両ドクトリンを要請している社会的経済的

5) *Программа*, стр. 117.

6) Д. И. Чесноков, *От государственности к общественному самоуправлению* (Москва: Госполитиздат, 1960), стр. 10.

7) *Пленум ЦК КПСС (10-18 января 1961 г.)*, (Москва: Госполитиздат, 1961), стр. 580.

8) *Программа КПСС*, стр. 120.

9) R. Judson Mitchell, "Continuity and Change in Soviet Ideology," *Current History* (Oct., 1975), p. 32.

10) 米国の労働心理学者 F. ヘルツバークは、「ソビエトの(労働)社会学者が、われわれにプロテスタンティズムの倫理を説く!」と、述べる。Frederick Herzberg, "Job Attitudes in the Soviet Union," *Personnel Psychology* (No. 18, Fall 1965), p. 251.

11) Marcuse, *op. cit.*, p. 223; 邦訳, p. 186.

12) *Ibid.*; 同上。

背景（工業化）の類似性に由来するとさえ説くにいたったのである¹³⁾。少々荒っぽいアナロジーとはいえ、鋭い洞察といえよう。ただここまではマルクーゼの指摘が仮に妥当するとしても、筆者は、二つの思想ならびに社会にかんする類似性の承認をそれ以上に及ぼすわけにはいかない。というのは、筆者は、ソビエト・イデオロギーが、プロテストンティズムとは異なり、社会的に要請された機能を実際に十分はたしたとは、考えぬからである。かくして、つぎに、理論から実践のレベルへ目を転ずる必要がでてくる。

③新しい労働倫理誕生の必然性 では、現実のソ連邦において、どの種の“共産主義的労働”が、どのていど実現を見ているのだろうか？ 一時お預けにした現実の問題に再び立ち戻らねばならない。この問にたいする解答は、先に論じた“新しい人間”の現実における形成如何の解答と、とうぜん関連する。ソビエト公式説明から先にみてゆこう。

まず、① マルクスの“共産主義労働”。ソビエト公式説明といえども、この“新しい人間”の構成要件のなかでもっとも重要かつ形成困難な「生命の第一欲求」としての労働が、ソ連のすべての勤労者の習性になっているとは、主張していない。そのような労働は、『共産党綱領』によって「ソ連において共産主義社会が基本的に建設される」時点とされた1980年の「枠をさらに超えて発生する」¹⁴⁾ (Л. ステパニャン) と予測されている。つぎに、② レーニンの“共産主義労働”。この種の労働も「すぐには起らず、一定の段階を経て、客観的条件の発展とともに進行する」¹⁵⁾ (Л. П. Бугаев) ことが確認されている。では、最後に、③ フルシチョフ的“共産主義労働”は、どうか？ この種の労働は、フルシチョフ自ら、1961年の第22回党大会の席上、フルシチョフ治下のソ連人の多くの習性となっていると主張した。いわく、「労働は、今日すでに多くのソ連人にとって、たんなる収入の手段ではなく、社会的な使命、倫理的義務となっている。」¹⁶⁾

ソビエト側が、すでにソ連邦において、少なくとも筆者の名付ける「フルシチョフ的共産主義労働」が存在しており、それが同じく「マルクスの共産主義労働」へと順調に成長しつつあると主張する主な根拠は、つぎの二点である：

第一は、そのような新しい労働が発生せざるをえない社会・経済的構造の変化である。彼らは、「労働の性格、労働にたいする社会の態度、人間を労働へと促す刺激は、不変のものではなく、生産手段が誰の手中にあるかに対応して、変化するものである」¹⁷⁾ (Е. М. Бабазов) という基本的立場から、社会主義革命の結果として人民による社会的所有が確立したソ連における全く新しいタイプの労働の誕生を説くのである。このような変革に伴い、まず、労働の性格が、根本的に変化する。レーニンの言葉を借りると、かつての「他人のための労働、搾取者のための強制労働ののち、いまやはじめて、自分のための労働」¹⁸⁾、搾取から解放された労働の可能性がたちあらわれた。フルシチョフ期の専門家によれば、

13) *Ibid.* ; 同上。

1) Степанян, “Формирование …,” стр. 19.

2) Л. П. Бугаев, *Формирование индивидуального сознания в процессе перехода к коммунизму* (Москва: Издательство московского университета, 1965), стр. 29.

3) *XXII съезд КПСС*, т. 1, стр. 94.

4) Е. М. Бабосов, “Становление коммунистического отношения к труду,” *От социализма к коммунизму*, стр. 206-7.

5) Ленин, *Полное собрание сочинений*, т. 35, стр. 196; 邦訳, 26 卷, p. 416. (強調点一原文)。

「労働は、直接に社会的な、それと同時に人間的な性格を獲得した。」⁶⁾ (所謂「労働の新しい社会的性格」новый характер общественного труда⁷⁾の発生)。このような労働の性格の変化は、つぎに、とうぜん人民の労働にたいする態度にも影響を及ぼさずにはおかない。すなわち、人民は、「社会にたいする自己の義務を理解し」、「生産にかんしていっそう積極的となる。」⁸⁾ (所謂「労働にたいする新しい態度」новое отношение к труду の形成)。かように、「労働の王国であり、労働する人民の王国である」⁹⁾ソ連邦においては、労働は、資本主義体制下のそれとは「質的に異なった性格を獲得し、労働にたいする原理的に新しい共産主義的な態度が作り上げられる」¹⁰⁾客観的必然性が存在するのである；

第二は、新しいタイプの労働形成のプロセスを速めるためにソビエト体制が傾注している人為的な努力の有効性である。彼らは、「共産主義的労働」の形成が、「共産主義建設の発展期に客観的に (объективно) 特有の過程であり」¹¹⁾、かつ社会の各成員にとり、その性質からいって、「労働の外的な必然性の内的なそれへの転換」(превращение необходимости труда из внешней во внутреннюю)¹²⁾ プロセスとして、「漸進的に」¹³⁾進行するものであることを承認する一方、決してその過程が「自然発生的、無方針におこなわれるのではなく (не стихийно, не самотеком)、共産党による巨大な組織的-教育的作業の結果として」¹⁴⁾ (強調点—いずれも木村)、意識的、積極的に、この過程を促進することができるし、亦そうしなければならないという立場にたつ。この人工的な営為において、一党独裁制をとるソビエト・システムは、「政治的社会化」機能にたいするその独占的支配権を十二分に発動するという、ちよっと他の体制にはみられない「強味」(strength) (F. C. バグホーン)¹⁵⁾を発揮する。改めていうまでもなく「政治的社会化」機能の主たる担い手たる教育の全体系は、この目標に奉仕・貢献させられる。すなわち、フルシチョフは、「党が、すべての人間の労働教育、すなわち労働にたいする意識的な共産主義的態度の展開を、教育活動の中心においている」¹⁶⁾ (1959) と宣明し、A. M. アルセーニエフも、「勤労活動への準備、勤労のトレーニング、生命の第一欲求としての勤労への愛——これらが、共産主義的教育の全体系の本質、核心をなす」¹⁷⁾ (1962) と明言するのである。たんに教育機

6) Н. В. Марков, *Превращение труда в первую жизненную потребность* (Москва: Издательство «высшая школа», 1964), стр. 28.

7) *Основы ...*, стр. 614; 邦訳, p. 135.

8) *Там же*, стр. 615; 邦訳, 同上。

9) ソ連邦科学院経済学研究所著/経済学教科書刊行会訳『経済学教科書—改定増補第4版—』(東京: 合同出版株式会社, 1963), 第3分冊, p. 657.

10) Бабосов, *там же*, стр. 207.

11) *Там же*, стр. 225.

12) Г. С. Батищев, Р. И. Косолапов, “Коммунизм и труд.” *Вестник московского университета* (экономика, философия) (№. 2, 1962), стр. 40.

13) *Там же*.

14) Бабосов, *там же*, стр. 225.

15) Barghoon, “Soviet Russia,” p. 500.

16) *Внеочередной XXI съезд КПСС*, т. 1, стр. 57-58; 邦訳, p. 75.

17) А. М. Арсеньев, *Строительство коммунизма и школа* (Москва: “знание”, 1962), стр. 9. Болдуйレフも、「児童を労働へとトレーニングすることは、青年世代の共産主義的教育の学校のすべての仕事の中枢をなす」と明言する。Болдырев, *там же*, стр. 16.

関ばかりではない、体制にとり望ましい労働倫理を造り出すために、ソビエト体制は、その他すべての社会的組織の教宣活動をフルに動員する。1963年6月開催の共産党中央委員会決議も、このことを確認していわく：「党、ソビエト、労働組合、コムソモールのイデオロギー的任務の中核は、各ソ連人に、社会的に有益な労働への愛と尊敬を教えこむことにセットされねばならない」¹⁸⁾（強調点—原文）。さらに、この労働倫理の形成プロセスを人工的に促進させようとする体制の営為は、とくにフルシチョフ後半期（1959-64）に最も熱心に推進された「共産主義的労働をめざす集団—突撃労働者のキャンペーン」¹⁹⁾において、その頂点に達する²⁰⁾。

二 “オブローモフシチナ”の重み ——国民性と労働倫理——

以上一は、ソビエト側の見解の紹介であった。ところが、本稿の筆者は、ソ連人、とくに一部少数エリートではなく大衆一般が、ソビエト指導者が望む“労働にたいする新しい態度”を順調に形成しつつあるとは、考えないのである。その事由を、以下の本節二、三で述べることにする。

①倫理「内面化」のむづかしさ まず、上述のソビエト側が説くところに、理論的に疑問なしとしない。つまり、ソビエト公式説明が、ソビエト体制下に“労働にたいする新しい態度”が生まれざるをえないと述べる事由ならびにその展望に、単純かつ楽観的すぎるものを感じるのである。第一に、ソビエトの説明は、労働倫理の変更あるいは形成要因としての社会・経済的契機を過大評価している嫌いがある。そもそも一国民の労働観ないし勤労のエートスは、すぐ後に詳述するように、地理的、歴史的、民族的、宗教的、社会的、経済的……等々、諸々の多元的契機の複雑な絡み合いの総決算としてたち現れ、たどろきに重要なものであるにせよ、その中の一、二の要件（例——生産手段の所有関係）の変更によって、短期間に全面的な変更を蒙るものではない。この点を軽視する点が、ソビエト指導者の足をすくう結果を導いているように思われる。第二に、“新しい人間”形成のところ（97ページ）で既述した、「政治的社会化」の限界¹⁾ということをも、とくに労働倫理の形成にかんして再強調せねばならない。一般的に、いかに強烈な「政治的社会化」キャンペーンといえども、なかなか「公式イデオロギーの信条・価値体系の内面化 (internalization of the belief and value systems of the formal ideology) を保障しない」²⁾ように、「生徒を、労働へ準備することが、そのすべての仕事の本質であり中核である」³⁾学校教育、

18) *Пленум центрального комитета коммунистической партии советского союза (18-21 июня 1963 г.)* (стенографический отчет), (Москва: Политиздат, 1964), стр. 307.

19) *Бабосов, там же*, стр. 225.

20) フルシチョフ期の文献は、断言する。「共産主義的労働の突撃隊こそが、労働にたいする共産主義的態度の模範を示す」と。*Бабосов, там же*, стр. 214.

1) Barghoon, “Soviet Russia,” pp. 496-500; Rita Mae Kelly and Frederic J. Fleron, Jr., “Motivation, Methodology, and Communist Ideology,” Roger E. Kanet (ed.), *The Behavioral Revolution and Communist Studies* (New York: The Free Press, 1971), pp. 62-63. L. W. パイは、一般に「移行期にある社会」においては、彼のいうところの「(政治的)社会化の諸段階」がスムーズに進まないことを、発見した。Lucian W. Pye, *Politics, Personality, and Nation Building: Burma's Search for Identity* (New Haven: Yale University Press, 1962), pp. 46-47.

2) Kelly and Fleron, *op. cit.*, pp. 62-63.

3) フルシチョフは、「新しい道徳的要求が、すべてのソ連人の内的な要求 (внутренняя потребность) となるようにするのが、われわれの課題である」と述べていたが …, *XXII съезд КПСС*, т. 1,

ならびにその他すべての社会的組織による「共産主義的労働をめざすキャンペーン」⁴⁾によっても「労働への愛と尊敬」(フルシチョフ)⁵⁾を形成することはむづかしいのである。

では次に、ボリシェヴィキによる社会経済的変革ならびに教育啓蒙キャンペーンという人為的努力に抗して、革命後のソ連において“労働にたいする新しい態度”形成を今日まで阻んでいる現実的要因は、何なのか？ それは、古い〈ロシア〉から引継いだ要素と新しい〈ソビエト〉システムが生みだした要素の二つに、大別される。まず、前者、すなわち、ロシア人が長年培ってきたイーギー・ゴーイングな国民的性格ならびに生活様式(= オブローモフシチナ)という自然発生的な壁の厚さを、紹介する必要がある。

②労働の民族的価値づけ やや迂遠なところから始めれば、「労働をどう考えるか」——これには、百人百様の見解がありうる。「休息」こそを人生の至上目的と考え、「労働」を「休息」の対立物、すなわち「休息」を妨げる最悪の奴隷的拘束状態とみなす立場から、逆に「休息」を軽蔑し「労働」こそ人間性そのものの表現として賛美する見方まで、千差万別である。それは、究極的には、各個人の人生観の相違に連らなっている。このような労働観の多様性や個人的性格を百も承知したうえで、強いて一般化を試みれば、歴史的時期や国民性にしたがって、つぎのように大ざっぱな類型化が可能となろう。つまり、古代において労働(ponein)は、災いなし難儀(ponos)、あるいは中世において、神の教えに背いた原罪にたいする懲罰として、蔑視された。しかし、近代に入ると、労働は、逆に、プロテスタンティズムにより神への奉仕として、J. ロック、A. スミス、K. マルクス等の近代思想家によりすべての財産や価値の源泉として、積極的に評価されるようになった。かくして、地理的にいえば、西欧世界の一部(英、そして独・米の主としてプロテスタント諸国)において、労働は、すべての生産性の源泉として高く評価されるにいたったが、他方プロテスタンティズムの影響にとり残された西欧世界の一部(仏、伊、スペイン、等の主としてカトリック諸国)では、精神的世界における充実と安定を善とし、富に執着、思い煩い「勤労し奔走する」⁶⁾ことを蔑視する考え方がいぜん支配的といえる。そして、主としてギリシヤ正教が支配的であるロシアにおける労働観は、決してプロテスタンティズムの洗礼を受けた諸国のそれではなく、むしろカトリック教徒の多い南欧諸国のそれを「奇妙なことにおもいださせるのである」⁷⁾。つまり、ロシア人は、労働を蔑視し、できうるならばこれを回避し、その他の人間活動を選ぼうとする趨勢がつよい。

стр. 220.

4) Болдырев, там же, стр. 16.

5) XXII съезд КПСС, т. 1, стр. 123.

1) David Yankelovich, "The Meaning of Work", in *The Worker and the Job: Coping with Change*, ed. by Jerome M. Rosow (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, 1974), pp. 20-22; Hannah Arendt, *The Human Condition* (Chicago: The University of Chicago Press, 1958), pp. 79-135; 志水速雄訳『人間の条件』(東京:中央公論社, 1973), pp. 95-155.

2) 中世の未発行された『デ・イミタチオネ・クリスチ』(De imitatione christi)は、説く:「ああ主よ、私たちのこの有様はなんとしたことでしょう。ごらん下さい、この世の損失は非常に嘆き悲しみ、わずかばかりの利益を得るには、勤労し奔走するくせに、靈魂の損失は忘れてしまつて、思い出すこともほとんどありません。』『キリストに倣いて』(札幌:光明社, 1948), p. 342. もちろんイエズスは、将来への予備と働きを禁ずるのではない。ただ、摂理への信頼を裏切らせるほどの思いわずらいを禁ずるのである。『新約聖書』(東京:ドン・ボスコ社, 1957), p. 25.

3) Message From Moscow, p. 103; 邦訳, p. 125; H. Smith, *op. cit.*, p. 112 も参照。

このようなロシア人の労働倫理は、ロシア社会の価値観の鏡とみなされるロシア文学の多くの作品中に如実に反映しているが⁴⁾、その典型として И. А. Гончаров 作『オブローモフ』(1859)の右にでるものはあるまい。

周知のごとく、この長編小説の主人公オブローモフは、終日ベッドや長椅子に寝そべって飽くことを知らず、僅か一本の書簡を認める労働すら厭う懶惰の権化である。勤労の尊さを説いて焉まないドイツ系の親友シュトルツの忠告にたいしても、オブローモフは、反駁する：「アンドレイ（＝シュトルツ）ときたら、年じゅう『働け、働け、馬のように働け』って、そればかり考えているんだ。何のために働けというんだろう。」⁵⁾

ここで重要なことは、オブローモフのかような労働観が、当時のロシア社会にあって、決してすぐれて個性的な例外でなかったことである。まず、それは、必ずしもオブローモフの属する特権的な経済身分（「旦那」）に由来する勤労観なのではなかった。なぜなら、——作者によれば——、当時オブローモフを育んだ領地オブローモフカ村では、オブローモフのみではなく、すべての住民が、「労働」を、病氣や争いごとと同様、「安静と無為の理想たる生活を、ときどき破壊する不愉快な出来事のひとつ」⁶⁾とみなす慣習の持主だったからである。すなわち、

「彼らは、労働というものを、すでに遠い祖先の時代から、われわれに課せられた刑罰であるとして、堪え忍びはしたが、これを受することはできなかった。そして、機会さえあれば、これを免れようとした。しかも、そうすることが、可能であり、義務であると考えていたのである。」⁷⁾

さらに、このように労働を人生の本来の目的から逸脱したものと看なし、これをできうるかぎり回避しようとする、オブローモフカ村住民たちの人生観は、一田園地方における特殊な事象でなく、むしろ広くロシア人一般に通ずる生活態度だったと考えうるのである。「オブローモフの社会的意味の発見者」⁸⁾ Н. А. Добролюбов は『オブローモフ気質とは何か』(1859)のなかで、「オブローモフカ村は、われわれの直接のふるさとであり、…われわれすべてのなかには、多分にオブローモフ的な要素がひそんでいる」⁹⁾と述べ、オ

4) たとえば、文豪ツルゲーネフは、戯曲『田舎における一ヶ月』(1855)のなかで、作中人物の一人に、つぎのように語らせている：「不思議なことである。ロシアの農民は、知的で、物事をすばやく充分に理解するが、これが何の役にもたっていないのだ。……なんといったらよいか、彼らには、仕事にたいする愛情が存在しないのだ (Этой любви к работе нету ... именно любви нет)」(強調点—木村)。И. С. Тургенев, Полное собрание сочинений и писем (в двадцати восьми томах) (Москва-Ленинград: Издательство академии наук СССР, 1962), т. 3, стр. 59-60.

5) И. А. Гончаров, Собрание сочинений (Москва: Государственное издательство художественной литературы, 1953), т. 4, стр. 274; 井上満訳『オブローモフ』(世界文学体系 30) (東京: 筑摩書房, 1959), p. 189.

6) Там же, стр. 126; 同訳, p. 85.

7) Там же; 同上。

8) Leon Stilman, "Obломovka Revisited," The American Slavic and East European Review (Vol. 7, No. 1, 1948), p. 49; Н. А. Добролюбов, Собрание сочинений (Москва-Ленинград: Государственное издательство художественной литературы, 1962), т. 4, стр. 314; 金子幸彦訳『オブローモフ主義とは何か?』(東京: 岩波書店, 1959), p. 18.

9) Добролюбов, там же, стр. 338; 同訳, p. 71.

ブローモフを「われわれの、根源的な、民族的タイプ」(коренный, народный наш тип)¹⁰⁾とさえみなした¹¹⁾。

さて、つぎに作者ゴンチャロフが、このような「オブローモフ気質」(обломовщина)¹²⁾が、西欧人とくにドイツ人の人生観や生活態度ときわだった対照をなすロシアの民族的特質であることを、強調したかったことは、明瞭といえる。このことは、ゴンチャロフが自己の小説中に、オブローモフとまったく対照的な労働観の持主、即ちドイツ系の父親をもつシュトルツを、オブローモフの無二の親友として配するという対抗図式を採用している(——文学的見地からは、余りにも人為的な対置の方法で、感心しないが——)ことから、疑問の余地はないであろう。オブローモフの「(君は) 何のために一生苦しむんだい」¹³⁾との間に、シュトルツは、後年フルシチョフが聞いたら小踊りするような¹⁴⁾模範的回答を与える:「労働そのもののためだ、そのほかの何のためでもありゃしないよ。労働は生活の形態であり、内容であり、根元であり、目的であるんだ。少なくとも僕の生活ではそうなんだ」¹⁵⁾。

ゴンチャロフは、かような安寧と休息志向の《ロシア》の権化オブローモフ vs. 「進歩と業績志向の《西欧》」¹⁶⁾の象徴シュトルツの対比において、将来のロシアにおいては、後者のタイプが生れ育つことを期待していたと解釈される¹⁷⁾。すなわち、彼は、シュトルツの口を借りて、「さようなら、オブローモフカ村よ！ おまえの時代はもうすぎてしまったのだ！」¹⁸⁾という「オブローモフ主義を葬る弔辞をのべ」(Добролюбов)¹⁹⁾、つぎのように書いた:

「ロシア式の名をもったどれだけ多くのシュトルツが出現しなければならないことか？」²⁰⁾

だが、批評家 Добролюбов は、恐らく原作者以上にこの「^{ポジティブ}肯定的な」(L. スティルマン)²¹⁾人間類型を切望しつつも、「いまのところ、彼ら (=シュトルツ——木村) の現れる

10) Там же, стр. 314; 同訳, p. 19.

11) D. ベルは、「文学中の人物が、これほど明瞭な国民的典型となっているような国は、ロシア以外にはほとんどない」として、ドストエーフスキーのラスコーリニコフ、カラマゾフ家の諸人物、ツルゲーネフのルージン、ゴーゴリのチーチョフ等と並んで、ゴンチャロフのオブローモフを挙げている。Daniel Bell, *The End of Ideology* (New York: The Free Press, 1962), p. 331; 岡田直之訳『イデオロギーの終焉——1950年代における政治思想の凋落について——』(東京: 創元社, 1969), p. 139.

12) Гончаров, там же, стр. 187; 邦訳, p. 126.

13) Там же, стр. 189; 邦訳, p. 128. また、シュトルツは、明言する:「生活の目的は、生活そのものと労働である。」Там же, стр. 404; 邦訳, p. 278.

14) フルシチョフは、1962年4月19日、第14回コムソモール大会にて、「生きることは、労働することであり、労働することは、生きることである！」と叫んだ。Правда (21 апреля 1962 г.).

15) Гончаров, там же, стр. 189; 邦訳, p. 128.

16) Milton Ehre, *Oblomov and his Creator: The Life and Art of Ivan Goncharov* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1973), p. 196.

17) L. スティルマンによれば、「ゴンチャロフは、社会的移行の分析家ではまったくなく」、「彼の作品は、歴史的見通しを欠いていることが、顕著である」という。Stilman, *op. cit.*, p. 49.

18) Гончаров, там же, стр. 498; 邦訳, p. 342.

19) Добролюбов, там же, стр. 338; 邦訳, p. 70.

20) Гончаров, там же, стр. 171; 邦訳, p. 115.

21) Stilman, *op. cit.*, p. 59.

ための素地はない」²²⁾、「われわれは未だあい変わらずオブローモフなのである」²³⁾から「生きている者にかかる（オブローモフ主義を葬る——木村）弔辞をのべてはいけない」²⁴⁾とのペシミステックな見解を、当時、述べたのである。とはいっても、やがては、《大きな嵐が到来して、ロシア人もまた働かねばならないようになる》ことが予期されたのである。あの社会的変化の人間性に与える力にかんしきわめて控え目かつ懐疑的であった A. チェーホフですら、世紀の変り目に、『三人姉妹』（1900）の中の一人の登場人物（トゥーゼンバフ）に、つぎのように語らしめているのである：

「僕は生れてこの方、一度だって働いたことがない。……今や時代は移って、われわれ皆の上に、どれくらいねりが迫りつつあります。たくましい、はげしい嵐が盛りあがって、もうすぐそこまで来ている。まもなくそれは、われわれの社会から、怠慢や、無関心や、勤労への色めがねや、くされきった倦怠だのを、一掃してくれるでしょう。僕は働きますよ。あと 25 年か 30 年もしたら、人間はみんな働くようになりますよ。一人のこらずね。」²⁵⁾

三 労働意欲の少いソ連人

①諸報告 ところで、時代は移り、ドブロリュエボフやチェーエフのコメントから、ロシアにおいてはすでに 100～50 年、ソビエト「社会主義」革命の嵐から勘定しても 50 年以上の歳月が流れた。では、ドブロリュエボフによって「ロシア社会の——ただし当時の——宿痼」（L. スティルマン）と見なされた“オブローモフシチナ”は、その後の「別な生活条件のもとにおいて」（ドブロリュエボフ）²⁶⁾変貌を遂げたのであろうか？ チェーホフの予言は、的中したのであろうか？ 否、甚だ残念なことに、そのような彼らの期待を裏切るような報告が数多いのである。そのレポートを、レーニン、スターリン、フルシチョフ、ブレジネフの各時期について紹介しよう。

まず、レーニン期。レーニン自身は、その死の二年前、ソビエト革命によって「古いオブローモフ」が絶滅してしまったわけでないことを認めた。やや長文ではあるが、「ソビエト共和国の内外情勢について」（1922. 3. 6）中の一節をそのまま引用する。

「昔はロシア生活のこうした型、すなわちオブローモフがあった。彼は終日、寝台に寝そべて、計画を立てていた。あそこからは多くの時がたっている。ロシアは三つの革命をやりとげたが、しかし、オブローモフのような人間はまだのこっている。なぜなら、オブローモフは地主だったばかりでなく、農民でもあるし、農民であるだけではなく、インテリゲンツィアでもあるし、インテリゲンツィアであるだけではなく、労働者や共産主義者でもあるからである。われわれを一目見るだけで、われわれが会議をどうひらき、委員会でもう活動しているかを見るだけで、古いオブローモフがのこっている

22) Лобролюбов, там же, стр. 340; 邦訳, p. 76.

23) Там же, стр. 339; 邦訳, p. 73.

24) Там же, стр. 339; 邦訳, p. 73.

25) А. П. Чехов, *Собрание сочинений* (Москва: Государственное издательство художественной литературы, 1956), т. 9, стр. 338; 神西清訳『桜の園・三人姉妹』（東京：新潮社, 1967), pp. 110-111.

1) Stilman, *op. cit.*, p. 45.

2) Добролюбов, там же, стр. 328-329; 邦訳, p. 51.

たぞ、い・く・ら・か・役・に・た・つ・よ・う・に・す・る・に・は、彼・を・長・い・間・あ・ら・う・た・り、き・よ・め・た・り、ひ・っ・ば・
う・た・り、た・た・い・た・り・し・な・け・れ・ば・な・る・ま・い、と・言・い・た・く・な・る。これについてわれわれは、
すこしの幻想もまじえないで、自分の状態をながめなければならない。」(強調点——原文)¹⁾

つぎに、スターリン時代。まず1926年、スターリン自身、「ソ連邦の経済情勢と党の政策について」の中で、「怠情のおかげで、数万、数十万の労働日が、工業にとってうしなわれている。数十万、数百万ルーブリが、そのためになくなり、わが工業に損失をあたえている」²⁾ことを慨嘆、「われわれに必要なことは、各種工場で怠情を一掃し、労働生産性をたかめ、わが企業における労働規律を強化するために、キャンペーンをおこなうことである」³⁾と提案した。それから10年、事態は必ずしも好転しなかった。西側の観察者・A. ジイドは、後に『修正』の執筆を余儀なくされたくらいソビエト体制に好意的な惚れ込みをしたことで有名な『ソビエト旅行記』(1936)中においても、ことソビエト労働者の勤労意欲にかんしては、驚き呆れざるをえなかった：「ソビエトでは、労働者を少しでも放っておくと、その十中八、九まではみな怠け者になってしまう」⁴⁾；「かくて大衆の惰性と無気力(inertie)は、スターリンが解決せねばならぬ最も重大かつ切実な問題である」⁵⁾；「およそ労働者が働く国では不要のものであろう」⁶⁾。スタハーノフ運動や給料の不平等制度が再設定される「理由も、畢竟そこにある」⁷⁾、等々。

フルシチョフ期に下っては、英国人 W. ミラーの『国民としてのロシア人』(1961)が興味深い。ミラーは、本書で、とくに第二次大戦後に多くの西欧知識人が陥りがちであった、全人類の共通性、あるいは両政治経済体制の差異を過度に強調する弊害を鋭く衝いて、ロシア人を「われわれとは違った国民」⁸⁾として捉え直す視点を提唱したが、ロシア人が英国人とは異なる一つの特質として、つぎの点を明らかにしたのである。「一定の職場に落ちつかない習癖、無責任な就労態度、散漫な労働の習慣、等々」⁹⁾の存在そのものは、——彼に言わせると——なにもロシア人の専売特許ではない。なぜなら、それらは、19世紀初期の英国にも、均しく見られた現象なのだから。しかるに、これらの習癖が、英国はじめ他の諸国では次第しだいに克服されていったのに比し、ロシアでは何時までも克服されずに存続しつづけている事実——正にこの点に、ロシア的特殊性が見出されるべきである¹⁰⁾。

1) Ленин, Полное собрание сочинений, т. 45, стр. 13; 邦訳『レーニン全集』(東京:大月書店, 1959), 33巻, p. 223.

2) И. Сталин, Сочинения (Москва: Госполитиздат, 1952), т. 8, стр. 137; スターリン全集刊行会訳『スターリン全集』(東京:大月書店, 1952), 8巻, pp. 165-166.

3) Там же; 同上。

4) André Gide, Retour de L' U. R. S. S. (Paris: Librairie Gallimard, 1936), p. 43; 小松清訳(東京:新潮社, 1955), p. 34.

5) Ibid., p. 45; 邦訳, p. 35.

6) Ibid., p. 43; 邦訳, p. 34.

7) Ibid., p. 45; 邦訳, p. 35.

8) Wright Miller, Russians as People (New York: E. P. Dutton and Co., Inc., 1961), p. 10.

9) Ibid., p. 103.

10) Ibid.

最後に、ブレジネフ期の1968年に出版された『モスクワからの伝言』。「いつの日か私は、どうしてロシア人がこうも働かないかということについて論文を書こうと思っている」¹¹⁾という書き出しの後、同書は、ロシア人の勤労態度について、つぎのように辛辣な観察を記している：

「私はかつて仕事にたいする、このような消極的な態度、あるいはこのように不承不承の仕事ぶりをみたことがない。私の知っている誰一人として、良心的に仕事をやりとげようとする衝動に駆られておらず、気分が向かないときは、仕事をしようなどとは思ひもしない。(……)仕事のペースは、私が以前見たどんなものよりものろく……仕事に対する熱意などをとやかく言うのは、まったくもってお門違いである。最小限働くことが目的である。」¹²⁾

同書は、結論として、ソビエト時代になってからの「20世紀の宣伝、西欧的な勤勉の習慣、生産方法を教えこもうとする共産主義者の努力」¹³⁾にもかかわらず、「19世紀のロシアの小説家がその解明に重要な鍵を与える」¹⁴⁾ロシア人の性格、すなわち「伝統的な遅鈍と愚図」¹⁵⁾が、いぜん現代ソ連人の勤労観を形成している、と記した。本稿筆者の1973-75年のソ連生活における見聞も、この『オブザーバー』紙記者の観察とまったく同一のものであった。筆者が接触した大衆レベルの現ソ連人は、コト労働観に限り、「オブローモフ」的怠惰性を抜け切っておらず、日本はもとより、米国、オーストリー、中国の諸国民の勤勉ぶりとの余りに著しい対照に、驚ろかされること屢々であり、実はこの体験が本稿の起草を思いついたもっとも大きい背景なのである。

②新しい労働疎外 もし以上の諸報告がその大筋において事実に近いとするならば、つぎにその事由を検討することが課題となる。筆者は、すでに、(i) マルクス主義者たちの社会・経済的要因の過大評価、(ii) 外部からの教育啓蒙活動の限界、そして、(iii) オブローモフ的習性の根強い残存、という三つの要因を指摘した。これら三要素を総合し、要するに、ソビエト革命の遂行・担当者による人為的な努力が、コト労働倫理にかんするかぎり、自然発生的な力を打破・克服しえないでいる、と言い換えてよいであろう。しかし、これが、事のすべてではない。最後にもう一つの要因、即ち(iv) ソ連型「社会主義」自らが「労働にたいする愛と尊敬」の育成を阻害する状況を造りだしている事情がある。つまり、ソビエト革命は、古い体質を完全に削ぎ取らないうちに、問題ある新たな皮質を付加しているのだ。では、ソビエト指導者たち自身が生み落したが故に、それを意識的に黙過し、対応を怠る結果を導いている新しい人工的状况とは、一体何か？

まず、ソ連型「社会主義」の第一のメルクマールとされる〈全人民的^{フィクシオン}所有^{ミス}〉の概念が、完全に擬制(ないし神話)となり、人民大衆が相変らず「搾取」の対象に止まっている事実を指摘せねばならない。ソビエト革命が生産手段を資本家ブルジョワジーから収奪し、今後全人民的^{フィクシオン}所有に属するものと宣言したことは確かである。しかし、無学・無技術の労

11) *Message From Moscow*, p. 102; 邦訳, p. 124.

12) *Ibid.*, p. 99; 邦訳, p. 121.

13) *Ibid.*, p. 100; 邦訳, p. 122.

14) *Ibid.*

15) *Ibid.*

働者・農民たち、戦時共産主義という不運なタイミング、経営における「寡頭支配」の原則の貫徹、等々の事由によって労働者管理が惨めな挫折を遂げ、単独責任制(единоначалие)へ席を譲って以来、その全人民的と宣伝された生産手段を事実上支配しているのは、決して勤労者一般でなく、管理・経営能力に秀でた少数の職業的選良達である。つまり、T. クリフの表現を借りれば、「もし国家が生産手段の貯蔵所であっても、労働者がその国家を^{コントロール}管理してはいないとすれば、労働者は生産手段を所有しておらず、すなわち彼らは支配階級ではないのである」¹⁾。この紙の上の所有者たる人民大衆に代って、実質的支配をおこなっているのは、^{アペラチキ}党組織専従幹部、^{ノメンクラトゥーラ}専門職任命制による高級官僚や企業長(=G. オーウェルの「内部党」(Inner Party)²⁾、M. ジラスの「新しい階級」³⁾)である。この少数者集団は、本来は「人民の召使いなはずである」(W. G. バーチェット)⁴⁾が、実際は、「国家を占有し、国家そのものになり」、「生産手段の所有者であるかのようにふるまう」⁵⁾のみならず、実質的所有者そのものとなっている。(毛沢東)中国も、「企業における指導権を実際に誰が握っているか」(強調点——原文)の立場から、「フルシチョフ一味は、……社会主義の全人民的所有制と集団的所有制を、一步一步特権層の所有制にかえつつある」⁶⁾と、批判する。ともかく、かくして、生産手段の管理権をもたない労働大衆は、労働力を売却する以外、生活の資を得る途はなく、しかもマルクス主義的な意味での搾取に服さざるえない。なぜなら、「剰余労働でえられた剰余価値は、もちろん国家のものとなる」⁷⁾から、「労働にたいする新しい態度」の讃美、物質的関心のレーニン主義的原則の利用、等々の美名のもとに、実は、「国家資本主義に固有の連帯搾取」(P. ナヴィル)⁸⁾が遂行されるからである。このような労働者による管理・統制の労働者にたいする管理・統制への転化・変質に直面したロシア勤労者たちが、革命によって変更したのは、たんに経営者(主人)のみと絶望するに至るのも無理もない。A. サーハロフも、書いている:「ラジオは、毎日、一般ソ連市民に向けて、あなたこそ国の主人だと伝えているが、国の本当の主人は、朝な夕な人けのない、交通を遮断した街路を防弾装備の高級車で突っ走る人々であることを、市民はよく知っている」⁹⁾、と。

ソ連型「社会主義」の第二の特徴たる〈中央集権的計画機構〉も、マルクスの人間疎外を解消しえないどころか、さらに悪化させている事実を指摘せねばならない。

- 1) Tony Cliff, *State Capitalism in Russia* (London: Pluto Press, 1955), pp. 267-268; 対馬忠行訳『現代ソ連論—そのマルクス主義的分析—』(東京: 風媒社, 1970), p. 113.
- 2) Orwell, *op. cit.*, p. 115; 邦訳, p. 180.
- 3) Milovan Djilas, *The New Class: An Analysis of the Communist System* (New York: Frederick A. Praeger, 1957), pp. 37-69; 原子林二郎訳『新しい階級—共産主義制度の分析—』(東京: 時事通信社, 1957), pp. 49-91.
- 4) W. G. バーチェット著/内山敏訳『60年代のソ連—未来を約束する東方の国—』(東京: 岩波書店, 1962), 下巻, p. 30.
- 5) Gilles Martinet, *Les Cinq Communismes* (Paris: Editions du Seuil, 1971), p. 74; 熊田享訳『五つの共産主義』(東京: 岩波書店, 1972), 上巻, p. 113.
- 6) 前掲『国際共産主義運動の総路線についての論戦』, p. 330.
- 7) Martinet, *op. cit.*, p. 74; 熊田訳, 上巻, p. 113.
- 8) *Ibid.*, pp. 75-76; 熊田訳, 上巻, p. 114-116. から再引用.
- 9) Andrei D. Sakharov, *My Country and the World* (New York: Vintage Books, 1975), p. 29; 高橋正訳『わが祖国—世界へのアピール—』(東京: 徳間書店, 1975), pp. 56-57.

元来マルクスは、その初期の作品『経済学・哲学手稿』のなかで、人間疎外の二つの形態、すなわち④「生産行為にたいする労働の関係における疎外」⑤「労働生産物にたいする労働者の関係における疎外」を、明確に区別していたが¹⁰⁾、後期の著作中では、もっぱら⑤の疎外の分析に精力を傾けるようになった。青年マルクスの人道的な哲学的思索によるインスピレーションを受けることなく、主として後期マルクスの唯物的な経済学説の強い影響下に形成された、ソビエト指導者の公式理論は、④の労働過程における人間疎外の側面を消去してしまうと共に、⑤の労働者の労働生産物からの疎外を、後期マルクスの一面的解決法に依拠して、「事実上搾取論へ解消して」、「一たび生産手段の私的所有権を廃絶して公有化したところでは、もはや搾取のための物質的基礎は一切消失し、同時に人間疎外も本質的に終る」¹²⁾（強調点——木村）と主張するにいたった。そもそもマルクスの疎外理論そのものが「現代文明のあらゆる病患の根因を衝いているものとは思えない」（勝田吉太郎）¹³⁾ことを別にしても、ソビエト疎外理論は、かくして第一に人間疎外の一切の状況をマルクスの⑤の労働者の労働生産物からの疎外に還元してしまっている点において「あまりに単純化かつ狹隘」（同）¹⁴⁾との批判に甘んじねばならず、第二に⑤の疎外の側面が生産手段の所有権帰属の変更によって解消されるとする点であまりに楽天的との譏りを受けねばならない。

現代ソ連は、このような所有権万能主義のイデオロギー的呪縛が災いして、専門分化、自動機械化などの科学・技術革命の進行が、体制差の壁を超えて齎らす類の非人間的状況にたいし、他の諸国と比べ、醒めた認識と柔軟な対応措置を採ることが妨げられることになる。そればかりではない。さらに、経済の計画化により市場の盲目性を廃止することにより、人間疎外を克服する筈であった正に中央集権的機構そのものが、そのメカニズムとくにその官僚制システムによって、別の型の疎外（O. ランゲの「新たなる疎外」¹⁵⁾）を生み出しているのである。E. フロムも、弾劾する：

「彼ら（＝ロシアの共産主義者たち——木村）のシステムのなかでは、人間はあらゆる社会的取りきめの至高の目的であるというよりは、むしろ国家および生産の召使いである。人間的パーソナリティーの個性の発展というマルクスの目的は、ソビエト・システムのなかでは、現代の資本主義におけるよりもはるかに大きな程度にまで否認されている。」¹⁶⁾

10) 前掲、藤野渉訳、pp. 96-118.

11) この箇所は、勝田吉太郎教授のすぐれた研究に負っている。勝田吉太郎『革命とインテリゲンツィヤ』（東京：筑摩書房、1966）、pp. 121-125；なお、Daniel Bell, "Two Road from Marx: The Themes of Alienation and Exploitation and Workers' Control in Socialist Thought," in Bell, *The End of Ideology*, pp. 355-392 ならびに "A Critique of Alienation," in Michael Curtis (ed.), *Marxism* (New York: Atherton Press, 1970), pp. 131-143 も参照のこと。これらにたいする異論として、Erich Fromm, *Marx's Concept of Man* (New York: Frederick Unger Publishing Co., 1963), pp. 69-79；樺俊雄/石川康子訳『マルクスの人間観』（東京：合同出版、1970）、pp. 94-106 参照。

12) 勝田、同上、p. 123.

13) 勝田、同上、p. 125.

14) 勝田、同上、p. 124.

15) オスカー・ランゲ著/都留重人他訳『経済発展と社会の進歩』（東京：岩波書店、1970）、p. 19.

16) Fromm, *op. cit.*, p. 71；邦訳、p. 95.

このような新しい「社会主義」的疎外感は、ソビエト勤労者大衆間に、アパシー、懷疑主義¹⁷⁾、シニシズム¹⁸⁾、いわゆる「ニボニチョ (нибони́чо) 主義」¹⁹⁾、ニヒリズム²⁰⁾、「言葉の正確な意味での絶望」(G. マルチネ——強調点も)²¹⁾を導く²²⁾。しかも、彼らの「社会主義的ペシニズム」(L. S. フォイヤー)²³⁾は、資本主義下に見られるそれに比し、一層深刻であることが指摘されている。けだし、それは既に挫折し、もはや出口がないと観念された絶望だからである。G. マルチネは、問いかける：「資本主義の下で、労働者は、社会主義を夢みることができた。しかし、社会主義の下で、基本的現実はいくつと何の変化もないと知ったとき、なにを夢みることができようか？」²⁴⁾両体制下のシニシズムの深刻度の較量はともかく、かようなアパシーや無力感が、人民大衆レベルに積極的な労働意欲を育成しようとするソビエト為政者の意図に反対方向に作用することは、改めていうまでもないであろう。フルシチョフ²⁵⁾、シェレーピン²⁶⁾らが、機会ある毎に、ソビエト人民間に瀰漫した労働忌避の傾向、とくにカザフスタンをはじめとする中央アジアの処女地の開墾やシベリアならびに極東の極寒地におけるダムや橋梁作業を呼びかける挑戦的アピールや物質的にきわめて有利なオーファ²⁷⁾すらも斥け、いかなる形においてであれ可能な限り長く教育年限を延長し都会地にとどまろうとするソビエト青年層の趨勢を慨歎・叱責するとき、彼ら最高指導部は、問題の掘ってくる根の認識・矯正を、意識的、無意識的に怠っていたといわねばならない。

17) *The Soviet Review* (Vol. 11, No. 11, Nov., 1961), p. 14.

18) *Current Digest of the Soviet Press* (Vol. 9, No. 27, Aug. 14, 1957), p. 12.

19) 「神も悪魔も信じない (ни бога ни черта)」放げやりの若いソビエト世代の性向をさす。*Current Digest ...*, 同上; James H. Billington, *The Icon and the Axe: An Interpretative History of Russian Culture* (New York: Alfred A. Knopf, 1966), p. 565.

20) A. N. シェレーピンは、「若い男女、とくに学生間に、ソビエト国民の業績を過小評価し、わがソビエトの現実を歪曲するニヒリスチックな発言を行う者がいる」ことを指摘した。*Current Digest of the Soviet Press* (Vol. 10, No. 16, May 28, 1958), p. 5.

21) Martinet, *op. cit.*, p. 76; 熊田訳, 上巻, p. 117.

22) モスクワ大学の学生を6つのカテゴリーに分類した T. カラグハン (筆名) によると、「政治的アクチビスト」、「現状満足者」のほかに、「退屈している者」、「かなり不満を感じている者」、「大いに不満を感じている者」、「内的亡命をとげている者」がいる。Callaghan, *op. cit.*, pp. 12-19.

23) L. S. Feuer, *op. cit.*, p. 113 ff.

24) Martinet, *op. cit.*, p. 76; 熊田訳, 上巻, p. 117.

25) フルシチョフが嫌ったのは、とくに青年層に存在する「肉体労働を蔑視する、傲った、間違った態度」であった。*Правда* (21 сентября, 1958); Nikita S. Khrushchev, "Educating Active and Conscious Builders of a Communist Society," *School and Society* (Feb. 14, 1959), p. 66.

26) "Shelepin's Report to 13th Young Communist Congress," in *Current Digest of the Soviet Press* (Vol. 10, No. 16, May 28, 1958), pp. 3-9.

27) たとえば、極北地方の労働者にたいして拡大される一方の物質的刺戟政策は、1968年のソ連邦最高会議幹部会令によると、つぎのような特典を内容とする：「(1)月額賃金にたいする付加金は、当初6カ月の労働を経過した場合に10%、以後6カ月ごとに10%増。付加金が60%になった場合、以後1年ごとに10%増、(2)歴年で15年以上勤務した労働者および勤務員にたいして、老齢年金の始期は、男性55歳、女性50歳」。エヌ・エヌ・ネクラソフ著/鈴木啓介訳『シベリア開発構想』(東京：サイマル出版会、1975), p. 87.

28) モスクワ生れで、モスクワ大学に5年間(1951-56)学んだ D. バークは、「ソ連の大学生について」と題する論文の中で、今日のソ連青年の「反社会的」態度が「国外から輸入され、旧世代の一部の人々によって撒きちらされるブルジョア・イデオロギーの影響」によるものとフルシチョフが第21回党大会で非難するとき、フルシチョフは、「これがソビエト社会の内部から生ずるかも知れない

第二節 物質的関心

一 ソ連型「社会主義」の基本的態度とその変遷

ソビエト型「社会主義」は、「物質的関心」(материальная заинтересованность)を、次の二種に峻別し、根本的に異なる態度をとる。まず、「社会主義」は、生産手段の私有にもとづく体制下における、他人の労働の搾取の可能性を含み、プチ・ブル的利己心に発する、投機的、射倖的で、「私的な」(частная)物欲を否定する¹⁾。正にこのような欲望を廃絶せんがために、元来、暴力革命による体制変革を志したといつて過言でない。しかるに、他方、「社会主義」は、生産手段が全人民的所有となった体制下における、勤労者の健全な本能にもとづく「個人的な」(личная)物質的関心を承認し、これが度を越してプチ・ブル的な物質的追求に肥大しないかぎりにおいて、それを許容する。否、承認・許容するばかりではない。それは、共産主義建設の最重要要件としての物質的・技術的基盤をつくるために、どうしても(知識・科学・技術のほかに)人間労働の生産性向上を図らねばならず、そのためには、結局、勤労者の(無償の情熱のほかに)物質的関心にも頼らざるをえない、という基本認識から、積極的に物質的関心を奨励・助成しようとさえ試みるのである。

かくして、革命後のソビエト人が、「個人的な、物質的関心」(личная материальная заинтересованность)をもつことを、是認、助成している点において、ソビエト「社会主義」の歴代の指導者間に唯一人の例外もないといつてよい。ただし、厳密にいうならば、以上の一様な基本的認識にたちつつも、夫々の物質的関心重視の度合において、彼らの間にアクセントの強弱が存在することは、至極当然の事実である。そのニュアンスの差は、指導者の(カリスマ的魅力を含む)パーソナリティー、時代的環境(革命の段階)にもとづくほか、ことに次の事情に由来するものだったと考えられる。つまり、各指導者に、労働生産性の向上の挺子として、〈物質的刺激〉以外の手段(すなわち、〈精神的刺激〉、〈物理的強制^{アベイラブル}〉)が、どの程度利用可能であったか、という事情である。では、この事情に注目しながら、三代のソビエト指導者治下における物質的関心の重視の態度ならびにそのウェイトの変遷工合を一瞥しよう。

①レーニン期 レーニンは、1920年、「労働者とは、物質主義者(материалисты)である」²⁾と喝破し、1921年11月17日の「新経済政治教育の任務」の中で述べた：「農民の個人的関心にもとづいて(共産主義を一木村)建設することが必要である。……すべての専門家に関心をいだかせること、こうして彼らが生産の発展に関心をもつようにすることが必要である。……そこでわれわれは言う。国民経済のあらゆる部門を個人的関心にもとづいて建設することが必要である、と」(強調点いずれも、木村)³⁾。つづいて翌18日、レー

という可能性を一顧だにしていな」と述べる。David Burg, "Observations on Soviet University Students," in Richard Pipes (ed.), *The Russian Intelligentsia* (New York: Columbia University Press, 1961), p. 83; 気賀健三/和田敏雄訳『ロシア・インテリゲンツィア』(東京：時事通信社, 1962), p. 21.

1) С. Болдуйревは、ブルジョワジーの「食欲、金もうけ主義、吝嗇」などの「否定的特質」について語る。Болдырев, *там же*, стр. 17.

1) Ленин, *Полное собрание сочинений*, т. 42, стр. 212; 邦訳, 32 卷, p. 14.

2) *Там же*, т. 44, стр. 165; 邦訳, 33 卷, pp. 57-58.

ニンは、後年とくにフルシチョフ期になって最も多く引用されることになる有名な一句を吐いた：

「直接に熱狂によってではなく，大革命によって生み出された熱狂の助けをかりて，個人的利益に，個人的関心に，経済計算に立脚して，小農民的な国で国家資本主義を経ながら社会主義に通じる堅固な橋を，まずはじめに建設するよう努力したまえ。さもなければ，諸君は幾百万幾千万という人々を共産主義に導くことができないであろう」(強調点—木村)³⁾。

上の三つの引用を，レーニンが物質的関心を重視していた証左とみて差支えなかろう。しかし，ここで，注目し言及すべきことがある。まず，後年フルシチョフにとり自己の政策を正当化する錦の御旗となる以上のレーニン発言の時代的な背景ないし文脈である。つまり，右の引用句すべてが，新経済政策^{ネフツ}の初期，すなわち資本主義への止むをえない後退の戦術が採られた時期における発言である事実に，我々は拘泥せねばならない。なぜなら，西側の鋭利な観察者 M. タチュのように，レーニンが〈物質的刺激〉に依存することを考えたのは，「初期の段階すなわち農民経済から国家資本主義への移行期，そして恐らく次の社会主義へ至る段階」においてのみであって，決してフルシチョフが採用，主張したごとく「社会主義から共産主義に至る時期」ではなかった，と解釈することが十分可能だからである⁴⁾。もちろん，レーニンの真の意図を知るてだてはないが，ブレジネフ期の一文献が卒直に示唆しているように，このネツプ期におけるレーニンによる物質的関心の奨励が，「なにか前以って考えられた国家政策の結果ではなくて，現実生活^{ジーズニ}そのものの要請によって喚び起こされた」(A. И. シネンコ)⁵⁾，一時的，応急的措置なものであったことを念頭におくべきであろう。

このこととも関連してより重要なことは，レーニンには，物質的刺激以外にも，依存しうる他の手段が存したことである。ソルジェニーツィンの指摘を改めて待つ迄もなく⁶⁾，レーニンが革命を遂行，推進，強化するために〈物理的強制〉そしてその極限としての暴力のテロすらも決して否定しなかったことは改めていうまでもないが⁷⁾，レーニンには，〈精神的刺激〉という強力な味方がいた。今日にいたる半世紀余にわたるソ連史の中で，レーニンほど無償の情熱の鼓舞により多くの効果を収めえたリーダーは，他に例がない。その成功は，もちろんカリスマ的資質をもつレーニンの^{パーソナリティ}個性によることの他，革命の初期段階^{ステージ}という幸運なめぐり合わせにもよる。すなわち，上の最後の引用句そのものが「直接には熱狂によるのではなく，大革命によって生みだされた熱狂の助けをかりて」(強調点

3) Там же, т. 44, стр. 151; 邦訳, 33 巻, p. 45.

4) Michel Tatu, *Power in the Kremlin: From Khrushchev to Kosygin* (New York: The Viking Press, 1967), p. 454.

5) А. И. Синенко, *Личная материальная заинтересованность и формы проявления при социализме* (Киев: Цздателство "Наукова думка," 1974), стр. 28.

6) А. Солженицын, *Архипелаг ГУЛаг 1918–1956: опыт художественного исследования* (Paris: YMCA Press, 1973), I–II, стр. 39 以下; 木村浩訳『収容所列島』(東京: 新潮社, 1974), I, p. 39 以下.

7) Alexander Dallin and George W. Breslauer, *Political Terror in Communist Systems* (Stanford, California: Stanford University Press, 1970), p. 10 ff; G. H. Leggett, "Lenin, Terror, and the Political Police," *Survey* (Vol. 21, No. 4, Autumn 1975), pp. 157–187.

一木村)⁸⁾と述べているように、レーニン期には、まだ「革命によって生みだされた熱狂」が存続しており、それに点火して、爆発をも起こしうる状態にあった。したがって、算術計算的にいって、この「熱狂」(энтузиазм)という〈精神的刺激〉(具体的には、共産主義建設の夢とロマン、祖国ロシアへの愛国心とヒロイズム、革命的ピューリタニズムの^{モラル}道徳と規律、等々)に頼れる分だけ、レーニンには、〈物質的関心〉に依存する度合が少なくなくて済んだともいいうるのである。

②スターリン期 スターリンも亦、〈精神的刺激〉を十二分に利用しようとした。その利用法の特徴は、I. ドイツチャーの言う「二重の呼び掛け」¹⁾、すなわち国民の「社会主義的感情」ばかりでなく、「国家主義的感情」に公然と呼び掛けた点に存した。例えば、1931年2月の演説の中で、スターリンは、工業化のテンポを速めなければ、「母なるロシア」(матушка Русь)は、再び諸列強によって負かされる²⁾と警告を発し、祖国戦争中(1941-45)は、国民の支援を獲得するために「祖国」(родина)、^{ロシア}「ロシア」(Россия)など、防衛に役立つ全てのスローガンをグロテスクなまでに利用し尽した³⁾。(ミーニン、ボジャールスキー、スヴォーロフ、クトゥーゾフらロシア史上の将軍や英雄の復活⁴⁾、国歌の「インターナショナル」から中世キエフ国家の「ルーシ」(Русь)への変更⁵⁾、ギリシヤ正教会の復権⁶⁾、等々)。しかし、どちらかという、消極的な性格の防衛でなく、経済的な国造りという積極的な人間営為を継続ないし創始するためには、すでに熱狂という「革命の火は、燃えつくしており」⁷⁾、スターリンに残されていたのは、〈物質的な力〉(material power)ならびに〈強制的な力〉(coercive power)⁸⁾の二つであった。

スターリンによる〈物質的刺激〉の利用法の特徴は、その選別的適用、すなわち、それが(決して人民大衆一般に対してではなく)ごく一部少数者を対象に用いられた点にある。^{タイク・オーヴアー}権力奪取ならびに緒原的な経済建設の段階だったレーニン期と違い、^{タイク・オフ}権力の維持・強化ならびに本格的な工業化の離陸の段階たるスターリン期には、かつての無欲な「労働の兵士」(die Soldaten der Arbeit)ではなく、彼らから一頭地をぬいた「労働の士官」(der Offizier der Arbeit)の知識と技能が必要であった⁹⁾。彼ら^{エリート}選良たちが知識と技能を習熟す

8) 本文, p. 121, 上から3行目。

1) Isaac Deutscher, *Stalin: A Political Biography* (New York: Vintage Books, 1960), p. 327; 上原和夫訳『スターリン』(東京: みすず書房, 1964), II, p. 26.

2) И. В. Сталин, *Сочинения* (Москва: Госполитиздат, 1951), т. 13, стр. 38-39; 邦訳『スターリン全集』(東京: 大月書店, 1953), 13巻, pp. 59-60.

3) Александр И. Солженицын, *В круге первом* (New York and Evanston: Harper and Row, Publishers, 1968), стр. 104; 木村浩/松永緑弥訳『煉獄のなかで』(東京: タイム・ライフ・インターナショナル, 1969), I, p. 139.

4) И. В. Сталин, *Сочинения*, т. 2[XV], 1941-45, стр. 35.

5) *Ibid.*, p. 491; 邦訳, p. 156; Robert Payne, *The Rise and Fall of Stalin* (London: Pan Books Ltd., 1965), p. 600.

6) Deutscher, *Stalin*, p. 490; 邦訳, II, p. 155.

7) Mehnert, *op. cit.*, S. 75-76; 邦訳, p. 77.

8) Dallin and Breslauer, *op. cit.*, p. 2.

9) Mehnert, *op. cit.*, S. 76; 邦訳, p. 77. メーネルトは、述べる: たんなる初原的な建設の段階だったレーニン期には、ソビエト勤労者は、「基礎工業をし、足場を組み、コンクリートを混ぜ、煉瓦を積むだけでよく」、なにひとつ新しいことを学ぶよう促される必要はなかった。しかるに、今

るために支出する余分のエネルギーは物質的に補償されて然るべきである。これがスターリンをして、1931年6月23日、有名な演説「新しい状況——経済建設の新しい任務」を行なわせしめた背景であった。同演説は、説いた：「われわれに今必要な数十万、数百万の」「熟練労働者のカードルをつくりだすためには」、従来の賃金制を一擲し、「労働者の熟練度に対して、当然うけるべきものを報償するような賃金組織をつくり」、「昇進の見通しと刺激」、「物資供給と住宅条件の改善をおこなうことが必要である」¹⁰⁾。

「獲得しうる価値（社会的尊敬、所得、安全など）を最も多く獲得する人々が選良^{エリート}であり、残りは大衆である」¹¹⁾——総生産物の中から社会へ還元する物質的価値を最少限にとどめ、残り全てを拡大再生産への投資とせねばならなかったスターリン時代ほど、この H. D. ラスウェルの言葉がぴったり該当する例は珍しい。では、かように、工業化の離陸期たるスターリン時代に、物質的報償均霑の恩典からはじき出されたソビエト人民大衆は、いかにして労働へ駆りたてられたのか。この問にたいしては、スターリン時代そのものが主人公といわれる『第一圏にて』の中で皮肉に満ちた解答がある。：すなわち、ソルジェニーツィンによれば、一切の他の権利を剥奪された者にも、労働する権利は他人に比べより広範に保留されているのである¹²⁾。尤も、これは、「強制」労働収容所の世界でのことではあるが。要するに、スターリニズムとほぼ同義語となるまでに専売特許と化し伝家の宝刀となった〈物理的強制力〉の登場である。かくて、スターリン治下に、かつてレーニン時代に労働者の自発的な創意により無償労働¹³⁾として開始され、レーニン自身によって将来の「共産主義の萌芽」¹⁴⁾と讃美された共産主義的土曜労働すら、他律的な強制労働と転ずる形容矛盾的状况が現出したのである¹⁵⁾。

③フルシチョフ期 第三代目のソビエト指導者たるフルシチョフが政権を引き継いだ時、ソビエト国民大衆は、革命後40年間にわたって、彼らの社会主義的、国家主義的感情に訴える抽象大文字のスローガンの氾濫、矯正労働収容所をはじめとする〈鞭〉ないし〈棍棒〉によって、さしたる物質的な反対給付を与えられることなく、極限まで働かされ、精

や、彼らは、「新設の自動車工場や熔鉱炉で働く」ために新しい知識や技能を獲得するよう刺戟される必要が生じた。Ibid.; 同上。

10) Сталин, сочинения, т. 13, стр. 58-59; 邦訳, 13 卷, pp. 78-79.

11) Harold D. Lasswell, *Politics: Who Gets What, When, How* (Illinois: The Free Press, 1951), p. 295. 久保田きぬ子訳『政治—動態分析—』(東京: 岩波書店, 1959), p. 1.

12) Солженицын, *В круге первом*, стр. 25; 邦訳, I, p. 36.

13) Ленин, *Полное собрание сочинений*, т. 29, стр. 379; 邦訳, 29 卷, p. 413.

14) Там же, стр. 383; 邦訳, p. 418.

15) ソルジェニーツィンは、特殊収容所におけるその実態をつぎのように書いている：「毎土曜、完全な自由意志による労働という有名な原則にあうよう、囚人たち全員が意向もたしかめられないまま日曜日に自由意志で働くことを希望しているとして登録されてしまい、刑務所当局に申請が出されるのだった。」Солженицын, *В первом круге*, стр. 149; 邦訳, I, p. 196. この土曜（ないし日曜）労働の強制化が、ブレジネフ期の今日まで続行していることについて、A. サーハロフは、次のように書いている：「毎年日曜か土曜が何度か労働日と宣言される。いわゆる“共産主義土曜労働”は公式には自由意志によるとされているが、働きに出ないでいようものならどうなるか。これらの労働の報酬は国家財政に組み入れられる。1975年5月4日の日曜日は労働日と指定された。つまり有給休暇が一日なくなったわけだ。しかし誰もあえて抗議をしなかった。二人の僧侶を除いては。一人はそのために逮捕された。」Sakharov, *op. cit.*, p. 19; 邦訳, p. 44.

神的、物理的に疲労困憊、憔悴の極にあった。このような状況において、フルシチョフに残された選択肢は、きわめて限定されていたといえよう。すなわち主として〈飴〉ないし〈人参〉にたよる他なかった。かくして、フルシチョフは、コトある毎に、労働者一般（例—1961年1月17日）¹⁾、ソフホーズ労働者（例—同年2月1日）²⁾、コルホーズ農民（例—同年2月23日）³⁾の「物質的関心を高める」必要を力説し、共産陣営の内外において、フルシチョフ主義は、「グラス共産主義」、経済主義^{エコノミズム}、修正主義、はては「資本主義の復活」、等々の呼称を招くまでにいたったのである。

フルシチョフによる物質的関心の重視は、先達の二人の指導者によるそれを、次のように変形、拡大している点に特徴がある。第一に、フルシチョフは、レーニンが特定の段階に適用したことを、共産主義の建設に至るまでのほとんど全ての段階に拡大した。既述のごとく（121ページ）、レーニンの物質的関心重視の発言は、すべてネップという特殊状況のもので、M. タチュの説くごとく、「農民経済から国家資本主義への移行期、そして恐らくは次の社会主義へ至る段階」を念頭に強調された概念であったにもかかわらず、フルシチョフは、まるでレーニンが「社会主義から共産主義への移行の段階」においても、この概念の有効性を説いていたかのごとく、拡大解釈したのである。すなわち、“フルシチョフ”『党綱領』によれば、「党は、共産主義の建設が、物質的関心の原則にたって進められるべきだという、レーニンの命題から出発している」⁴⁾。さらにフルシチョフ自身によれば、「物質的関心の原則は我々の生活における偶然的要素ではなく、共産主義の原則なのである」（強調点——すべて木村）⁵⁾!!

第二に、フルシチョフは、スターリンが一部少数の選良^{エリート}にのみ適用した物質的関心を、一般大衆のレベルに拡大した。これは、一般的に工業化が一定の段階に到達した時、為政者が採用すべき転換であり⁶⁾、ポスト・スターリン期の政治家たちも、直観的にこのような時代の要請に適切な反応をしめしたといえる。フルシチョフに先だって、スターリン批判の口火を切ったといわれる時代の秀れた水先案内人・A. ミコヤン（当時、第一副首相で、フルシチョフに次ぐ No. 2 の実力者）は、第20回大会（1956）において、

「我々が農民国において工業化を推進していた時期には、このような格差（＝高額所得者と低額所得者との賃金格差—木村）が、当然あった。なぜなら、正にその格差が、我が国に必要な欠くべからざる高級な資格をもつ幹部の速やかな形式を刺激したからである。

今や、我々が、……高級な資格をもち、文化的に高い水準の労働者階級を有している

1) Пленум центрального комитета коммунистической партии советского союза (10-18 января 1961 г.) (стенографический отчет), (Москва: Госполитиздат, 1961), стр. 580.

2) Н. С. Хрущев, *Строительство коммунизма в СССР*, т. 4, стр. 433-434.

3) Н. С. Хрущев, *Строительство коммунизма в СССР*, т. 5, стр. 86.

4) *Программа КПСС*, стр. 91.

5) *Правда* (18 октября 1961).

6) L. G. レイノルズと C. H. タフトは、「近代工業の成長につれて、賃金格差が拡大し」、「工業主義が成熟するにつれて、賃金格差が縮小する」傾向を指摘した。Lloyd G. Reynolds and Cynthia H. Taft, *The Evolution of Wage Structure* (New Haven: Yale University Press, 1956), p. 373.

とき、この格差は——たとえ、維持されねばならないにせよ——縮小されるであろう』⁷⁾と述べ、このことが、「我が国の発展の新しい水準に基づくものである」⁸⁾ことを、明らかにした。フルシチョフ自身、翌57年12月、このようなミコヤンの理解にたち、新しい賃金政策が、「初期の経済政策の利益を受けなかった人々」⁹⁾の福祉にたいする、ソビエト指導部の関心の表明である、と公言した。そして、フルシチョフは、スターリン期には一部少数者のみに重点的に配布していた国民総生産物の還元分を広く（一ただし、非常に薄くではあるが）配分すべく、最低賃金ならびに最低年金（とくに、工業化離陸期の主たる犠牲者たるコルホーズ農民の年金）の引き上げ、スターリンが無視した、所得均等化機能をもつ公共的消費フォンド・システム¹⁰⁾の充実、低額所得者からの税の減額ないし廃止、等々の実務的措置を打ち出した。しかし、ここで念の為付言すべきは、これらの諸措置が狙ったのは、決して〈物質的刺激〉政策の弱体化ないし放棄でなく、むしろその強化・貫徹だったことである。ミコヤンも明言しているごとく、あくまで「(賃金) 格差は維持されねばならない」のであり、フルシチョフ主義の新味は、たんに、時代の変化に応じて、不都合となった格差を一部是正することにより、これまで〈物的刺激〉政策においてネグレクトされがちであった大衆をも一挙に〈物的刺激〉政策の及ぶ圏内に引き込むという、主として戦対略象（エリートから大衆路線へ）の転換にあったのである。

二 ロシア的価値体系

ところで、以上のごときフルシチョフによる「物質的関心」の大衆レベルへの拡大政策は、その所期の成果を収めえたか？ 疑いなしとしないのである。その事由を以下二、三述べるに当たって、ここでもロシア的伝統の根づよい力を、まずその筆頭に挙げざるをえない。

ロシア人の「物質」欲も、「労働」欲と同様、西欧世界の或る部分における諸国民のそれとは多少趣を異にする民族的特殊性の色濃い刻印を捺されている。一言でいって、ごく一部少数者（とくに商人階級）でなく、帝制ロシア人口の圧倒的大多数を占める農民^{ムジーク}は、^{シトワイヤン}西欧近代諸国の市民と比べ、物質的価値の個人的所有を増大させることに、それほど熱意

7) *XX съезд коммунистической партии советского союза* (стенографический отчет), (Москва: Госполитиздат, 1956), т. 1, стр. 45.

8) *Там же*.

9) *Правда* (25 декабря, 1957).

10) スターリンは、その最後の著作『ソ連邦における社会主義の経済的諸問題』（1952）の中で、「共産主義への実際の移行を準備するためには」、「労働者や勤労者の実質賃金を最小限二倍にする」必要があり、それは、「貨幣賃金を直接に高める方法を通じ」、そして「大衆消費物資の価格をさらに組織的にひき下げる方法を通じ」なされるべきと説いた。И. В. Сталин, *Сочинения* (Stanford, California: The Hoover Institution of War, Revolution, and Peace, 1967), т. 3 [XVI], 1946-1953, стр. 269-272; 飯田貫一訳、『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』（東京：国民文庫社, 1953), pp. 79-82. しかし、この立場は、賃金を唯一の分配形式とみて、もう一つの形式である公共消費フォンドを無視するものとして、スターリン没後、フルシチョフやミコヤンによって、厳しく一ただし、スターリニストのモロトフをスケープゴートとして一弾劾された。*XXII съезд КПСС*, т. 1, стр. 88, 451.

1) たとえば、1917年の時点において、ロシア帝国の人口の約5分の4が、必ずしも農業に従事しているとはいえないにしろ、農民と公式に分類される人間であった。Richard Pipes, *Russia Under the Old Regime* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1974), p. 141.

を示さない習性をもつ。簡単に説明しよう。

第一に、彼らが長らくおかれていた非人間的状況は、とうていそのような欲望を喚起させるような代物でなかった。ツァーリズム治下に、農民は、「土地に付属し、土地とともに売買される品物」(A. ゲルツェン)²⁾ないし牛馬のごとき存在であった。彼らには、一人前の人間としての個人的な物的欲求をもつ権利も自由も認められていず、また物的生活条件の改善を通じて個我の独立のための経済的礎としたいという考えをもつ余裕は、全くなかった。ロシア生れの K. メーネルトも、ロシア農民間におけるこのような「利欲の欠如」(der Mangel am Gewinnstreben)³⁾について、書いている：

「ロシア民族は、そのわずかな数のをぞいては、農民としての分に甘んじた生活を送っていた。……彼らは、地主の身に比べて彼のような生活をしたなどという気さえおこさなかった。運命に対するこの従順さは、ツァーリズムの他の身分にも共通する特徴であった。全生活様式が、より多く所有したい (mehr zu haben), より良き生活がしたい (besser zu leben) という欲望によって規定されてはいなかった。」⁴⁾

第二に、彼らが属していた農村共同体の特殊性がある。農村共同体においては、法律的には、(土地の)耕作や使用(用益)の権利は、各構成メンバー個人に属するものの、帰属や所有の権利は、あくまで全体としての共同体のものであり、経済的には、「(土地の)再分割(переделы земельные)」が定期的に行なわれた結果、農民の労働意欲は減退せしめられたのみならず、土地に対する個人的な愛着心や所有権意識の確立が阻碍された⁵⁾。農村共同体におけるこのような慣行によって、ロシア人の間には、西欧の諸国民とは異なる意識が生れた。(i) まず、彼らの間には、自己の物質的欲求を、集团的・共同的に充足することに何ら格別の不自然さを感じないメンタリティーが形成された。このような意識は、周知のように、一部のそそっかしい思想家達によって、遅れたロシアが進んだ西欧に先駆けて共産主義へ移行することを可能にする特殊ロシア的利点と早合点されたが、それはともかく、自己の物質的(消費)欲求の殆んどすべてを個人的方法によって充足せねば気の済まない、西欧近代社会のブルジョア市民意識と、きわだった対照をなす。メーネルトと同じくロシア生れの W. ヴァイドレ(パリ大学)は、このような彼我の意識の差を、

2) ゲルツェン著/金子幸彦訳『ロシアにおける革命思想の発達について』(東京：岩波書店、1975), pp. 211-212.

3) Mehnert, *op. cit.*, S. 70; 邦訳, pp. 74-75.

4) *Ibid.*, S. 73; 邦訳, p. 74.

5) Jerome Blum, *Lord and Peasant in Russia: From the Ninth to the Nineteenth Century* (New York: Alheneum 1965), pp. 328-329; Francis M. Watters, "The Peasant and the Village Commune," in Wayne S. Vucinich (ed.), *The Peasant in Nineteenth-Century Russia* (Stanford, California: Stanford University Press, 1968), pp. 134-135; Pipes, *op. cit.*, p. 158, p. 166; D. Mackenzie Wallace, *Russia* (London: Cassell Petter and Galpin, 1877), pp. 182-184. ロシア農村共同体に見聞して、ミールの実態にかんする平易で具体的かつ最もすぐれた報告を書いた D. マッケンジー＝ウォーラスによれば、ロシアにあつては、共同の土地を分ち有していることは、しばしば「特権でなく、負担であつた」という。Wallace, *op. cit.*, p. 190. ただし、コンフィノは、土地の均等割替がロシア農民の生産意欲を失わせるのか、それとも自らの労働にたいする報酬を願わないでおたがいが他人のために尽すというムジークの生得的ともいえる平等観念が生き続けたのか、一義的には決しがたい、と述べているという。尾上八郎「フランコ・ベントウーリのナロードニキ研究」、名大『経済科学』(Vol. 23, No. 1, 1975), p. 64.

その著『ロシア——欠如しているものと存在しているもの——』(1961)⁶⁾のなかで、説明している。例えば、しばしば独, 仏からの訪問者によって非難の対象とされるロシア人の盗癖も、必ずしも彼らの貪欲の証左ではなく、むしろ自分のものを他人のものから厳密に区別する生活風習が欠如している事実を示すにすぎないのである⁷⁾。(ii) 次に、ロシア人には、財貨の事実上の使用ないし利用の享受自体が重要なのであって、その法律上の最終的帰属名義は第二義的なものという考え方が形成された。同じくヴァイッドレ教授によれば、ロシア人間では、物を「貸す」ことは事実上「与える」ことを意味するケースが多いという⁸⁾。改めていうまでもなく、このようなロシア人の意識や慣行は、物に対する事実上の支配たる「占有」(possessio)と純然たる法律上の支配たる「所有」(dominium)を峻別せしめるローマ法を忠実に継受したラテン文明圏の諸国民のそれら⁹⁾と極だった対照をなす¹⁰⁾。ともかく、かように、ロシア人には、「個人的な物的関心」ならびに「個人的所有権」が未発達な伝統が存したのである。

第三に、物質的財貨(「富」wealth)がロシア文化ないしロシア人の価値体系中に占める特殊地位がある。H. D. ラスウェルは、「各々の文化が、夫々異なった仕方で諸価値を格づけすると共に、一つの文化型におかれたあらゆる人格は同一の価値秩序を引き継ぐ傾向がある」¹¹⁾ことを指摘したが、ロシア文化ないしロシア人には、「富」よりも、寧ろ他の諸価値、たとえば「開明」(enlightenment)、「徳義」(rectitude)、「愛情」(affection)を上位におく趨勢がみられるのである。物質的満足よりも精神的内面的世界の充実こそが人間の正しい生き方である——このロシア的通念は、たとえば、19世紀の文豪の作品中に度々登場するテーマであり、トルストイ、ドストエーフスキー、ゴンチャロフを紐解く者は誰しも作者の暖い眼が「物質的利得を求めない人々に寄せられている」(K. メーネルト)¹²⁾ことを知るのである。現代ソ連が生み落した最大の異端作家ソルジェニーツィンですら、このようなロシア文学の伝統の例外をなす者でない。彼は、『第一圏にて』の作中人物の一人をして、次のように語らしめるのである：

「突然、ムーザが言った。『ロシア文学の主人公を西欧の小説の主人公から際立たせているものはなんだと思う？ 西欧文学の主人公達は、いつも経歴とか名声とか金を追い求めているわ。ところが、ロシア人は、食物と飲み物なしにやっていけるのよ。——ロシア人が追い求めているのは、正義と善なのよ。そうじゃない？』¹³⁾

6) Wladimir Weidlé, *La russie absente et présente* (Paris: Gallimard, 1949); 英訳, *Russia: Absent and Present* (New York: Vintage Books, 1961); 山本俊郎, 他訳『ロシア文化の運命』(東京: 冬樹社, 1972).

7) *Ibid.*, p. 211; 英訳, p. 154; 邦訳, p. 224.

8) *Ibid.* p. 212; 英訳, p. 154; 邦訳, p. 225.

9) 末川博『物権法』(東京: 日本評論新社, 1956), p. 180.

10) Weidlé, *op. cit.*, p. 212; 英訳, p. 154; 邦訳, p. 224. 「わが国では、所有権は、頑強に擁護される」——と、ゲルツェンは、別の見地から書いている——「しかし、権利としてではなく、獲物としてである。」したがって、「かかる権利の有効性正当性に対する確信をうえつけることは困難で」、「はっきりと定められた法律的概念の欠如そのもの、もろもろの権利の不明確性が一層所有権思想の確立を妨げ、それが一定の形をとることを許さなかったのである。」金子訳, pp. 212-213.

11) Harold D. Lasswell, *Power and Personality*, p. 33; 永井陽之助訳『権力と人間』, p. 41.

12) Mehnert, *op. cit.*, S. 73; 邦訳, p. 74.

13) Солженицын, *В круге первом*, стр. 249; 邦訳, I, p. 326. 但し、一部欠落している邦訳を

三 依然無欲なソビエト現代人

当然、ここで、以上のごとき主として農村共同体に由来する、ロシア人の民族的特殊性、すなわち物質的生活条件の改善にさして意欲を示さない習性は、ソビエト「社会主義」革命後の全く新しい状況下に一変したのではないか、という問が発せられて然るべきであろう。すなわち、マルクス・レーニン主義思想を奉ずるソビエト政権は、農民、そしてかつて「鉄鎖以外喪うべき何ものももたない」無産階級としてのプロレタリアートに、新しい国造りの主体的な担い手の地位を賦与したのではなかったか。また、レーニン以来ブレジネフ治下の今日にいたるまで、消費財に対する「個人的所有権」(личная собственность)ならびにその相続権は、ただの一度たりとも否定されず、憲法によって手厚く保護されているのではないか。特に、フルシチョフは、論敵中国によって「修正主義」と攻撃されるまでに、「意識は高い」が「低生活水準と禁欲に甘んじた初期キリスト教の共同体精神中の平等の教え」²⁾を敢然と斥け、物質的価値の重要性を機会ある毎に積極的に肯定したのではなかったか……。

しかし、このような歴代のソビエト指導者、特にフルシチョフの意向やキャンペーンにもかかわらず、古いロシアの農民の物質観は、今日にいたるも、大した変容をみせることなく続行しているようである。(「われら笛吹けども、汝ら踊らず」!!) レーニンは1921年の演説中で「農民の個人的関心にもとづいて(共産主義を——木村)建設することが必要である」と述べた後、炯眼にも、「困難は個人的関心をもたせることにある」という一句を付け加えることを、決して忘れなかったが、まさにこの一句のもつ重みが感じられるのである。では、そう判断されるレポートとその理由を検討してみよう。

①諸報告 まず、物質的利得の追求(者)を蔑み、精神的なものの探求(者)をその上位におくというロシア的価値序列の伝統は、唯物史観を国是とするソ連邦の時代になってからも、決して消滅してしまわなかった。

たとえば、ドウヂーンツェフの『パンのみによるにあらず』(1956)。この小説は、それぞれ精神と物質の価値を体現化した二人の男性を主人公としている。——ロパートキン vs. ドロズドフのあまり人工的な対抗図式は、既述のゴンチャロフのオブローモフ vs. シュトルツの対立と同じく、文学的見地からは、感心しないが、我々政治学徒にとっては、実に好都合である。ともかく、著者にとり、「現在、主要な価値は、できるだけ多くの必要な物質を創造すること」¹⁾にあると断言して憚らない「物質的価値の生産者」²⁾たるドロズドフは、明らかに、否定的シンボルの担い手である。他方、連日じゃがいもで飢えを

補った。

- 1) ソビエト社会主義共和国連邦憲法第10条は、「市民の労働による所得と貯蓄、住宅と副業的家庭経営、家財ならびに世帯道具、個人の消費と便益にあてる物にたいする個人的所有権、ならびに市民の個人的所有物の相続権は、法律によって保護される」と規定する。*Конституция (основной закон) российской советской федеративной социалистической республики* (Москва: «Юридическая литература», 1971), стр. 4.
- 2) Н. С. Хрущев, *Строительство коммунизма в СССР и развитие сельского хозяйства* (Москва: Госполитиздат, 1963), т. 6, стр. 336.
- 1) В. Дудинцев, «Не хлебом единым», *Новый мир* (XXXII, №. 8, август 1952 г.), стр. 40; 山村房次/久野公訳『パンのみによるにあらず』(東京: 講談社, 1952), p. 25.
- 2) *Там же*; 同上。

しのぎ清貧にあえぎながらも仕事に没頭するロパートキン³⁾は、著者にとり、ソビエト勤労インテリの理想像とされる。物質的欲望を下にみるロパートキン（ないし著者ドウヂーンツェフ）の人生哲学が端的にあらわされている、次の台詞をみよ。

「ぼくは今でも工場に就職して、二千ルーブル稼いでラードの山を買うことができますよ。……貯金通帳にお金もためるでしょう！……ですが、ぼくはまったく別種の人間です！ぼくには別の欲望があるから、そういうものは一つも欲しくありません。映画でみるような、やれ食べることだの、やれ住居だ、寝室だ、レースの編物だというような幸福は欲しくありません。……ぼくは、むろん、こぼみません。しかし、それだけをもってたって、ぼくは幸福にはなれませんよ。ですが、仕事を最後までやりとおせば、寝室なんかなくなっても、それでもぼくは幸福ですよ！」⁴⁾

著者が、二つの価値の夫々の擬人化である二人の男性のどちらを肯定しているかは、ドロズドフの妻ナーヂャのロパートキンへの感情傾斜からも、また新約聖書から採られた小説の題名そのものからも、言わずもがなである。

一般論として、たとえ文学作品が社会の価値観のもっとも良き投影とにいえるにせよ、果してこの『パンのみによるにあらず』の著者の価値のヒエラルキーがそっくりそのままフルシチョフ期のソビエト市民全体のその反映であるという保証は、確かにどこにもない。時代の子であると同時に時代から超越しもする作家が、一般市民間に蔓延している物質至上主義に反撥して、かくあるべしという自己の理想を吐露したということも十分考えるではないか。しかしながら、仮にそうだとすると、特質主義を真正面から標榜したまさにフルシチョフ時代における最も有名な小説が物質的価値万能の思想に疑問をさしはさみ、精神的価値の優位性を高らかに謳いあげる内容のものだった事実（皮肉!?）は、依然として残るであろう。また、もしそのテーマがソビエト市民間に存在する基本的な価値観の趨勢の一部を掬い上げたものでなかったなら、なぜこの小説が「発表に同時に、戦後ソビエト文学にあってはまったく異常なほどの大きな反響を呼び起した」⁴⁾のか、全く理解し難いことになる。

それでは、フルシチョフ時代の一般市民の実態はどうであったのか、とさらに問われねばならないであろう。卒直に言って、筆者は必ずしもこの間に答えるに十分な資料の蒐集に成功していない。しかし、ソビエト市民がその物質的欲求水準を急速に高めつつあるという報告には皆目接していないのに対し、その反対の事実を裏づけるリポートには実に屢々遭遇するのである。たとえば、M. ミハイロフの『モスクワの夏、1964年』。フルシチョフ期にソ連を訪問、帰国後歯に衣きせぬ印象記を出版して裁判沙汰となったユーゴスラヴィアの大学講師は、書いている：

「（フルシチョフは、生活水準の向上によってアッピールしようとしたが）、ふつうのロシア人は、その生活水準が依然として非常に低い（——ユーゴと比べて、約40%がた低い——）にもかかわらず、物質的貧困を、最大の不幸とは思えないのが、本当のところ

3) Д. Дудинцев, “Не хлебом единым (продолжение),” *Новый мир* (XXXII, №. 9, сентябрь 1956 г.), стр. 47; 前掲, 山村/久野訳, p. 182.

4) 邦訳『パンのみによるにあらず』, p. 443 の訳者あとがき。

ろだ。』⁵⁾

このようなフルシチョフ期の傾向は、ブレジネフ期に関する実態報告によっても、逆算推定しうるだろう。たとえば、1968年のチェコ事件当時のソビエト市民の嗜好や動向にかんするルポルタージュ・『モスクワからの伝言』(1968)を書いた前出の『オブザーバー』紙の匿名記者は、ソビエト市民が、「依然としてロシア的農民の心的構想の持主であり」(強調点——原文どおり)⁶⁾、彼らにとって、「世俗的成功とか富という観念は、ナッソー諸島における休暇と同じくらい余りにも出来すぎて不自然なことである」⁷⁾という。同記者は、「あなたは、自分の生活レベルに満足していますか?」という質問に対するソビエト勤労者の平均的回答が、次のように慎ましやかなものであることに驚き、彼らが「物質生活の面で、多くを欲しないのは真実だ」⁸⁾と、結論するに至っている:

「満足しているかって? もちろんさ。妻もあれば、自分の部屋もあり、TV セット、テーブルも椅子もベッドもある。テーブルがいったいいくつ欲しいっていうんだ? 息子は学校に行っており、娘は私よりよい職についている。時たま、半リットルのウォトカを飲みさえすれば、他にそれ以上何も必要じゃない。物があまり多ければ、邪魔になるだけさ。』⁹⁾

筆者個人も、1973~75年という時点における計2年間のモスクワ生活中において、現代ソ連人の物的欲求水準がさほど高くないことを痛感させる事例に度々遭遇したものである。たとえば、住居。マイホームが庶民の夢でありかつ最大の物的インセンティブたることは洋の東西(体制)の差を問わない事実であるが、ソ連市民の住いに関する欲求水準は、意外と慎ましい。在ソ連日本大使館勤務の一ソ連タイピスト女史の希望は、両親との同居を止めて1DKないし2DKに入居することであり、3DKないし4DKは、家賃も無駄、掃除も面倒である上に、元来そんな広い(!)空間は夫婦二人に不用なので希望しないという。彼女の希望サイズが一般にモスクワで最も人気があり申込の多い住居であることは、『住宅交換通報』¹⁰⁾誌や『夕刊モスクワ』紙水曜版の住宅交換広告欄によって、容易に確められた。家賃の差は僅少と思えるのに、家族数に比して広すぎる空間は不要な贅沢とみなす、我々には信じがたいロシア人の慎ましやかさが、そこに見出されるのである。

②新しい阻害要因 ソビエト大衆間にフルシチョフの意図した物質的関心育成策が充分実を結ばなかったと判断する場合、その第一の障害が、既述二のロシア的国民性にあることは、まず間違いなからう。しかし、筆者には、フルシチョフ構想の実現を阻む障害の根が「古きロシア」だけにあったのではなくて、次のような「新しいソビエト」の中にも存在したと考えるのである。(a) ソビエト・システムそのもののの中に先在的にビルト・インされた拘束要因; (b) フルシチョフの具体的政策の中の片手落ちが、それである。それぞれについて説明しよう。

5) Mihajlo Mihajlov, *Moscow Summer* (New York: The Noonday Press, 1965), pp. 160-161.

6) *Message From Moscow*, p. 103; 邦訳, p. 125.

7) *Ibid.*; 同上。

8) *Ibid.*, p. 102; 邦訳, p. 124.

9) *Ibid.*; 邦訳, p. 125.

10) *Бюллетень по обмену жилой площади* (Москва: Издательство «Реклама»).

(a) そもそもフルシチョフを含む歴代ソビエト指導者達が奨励（一より正確には、利用一）しようとしているのは、「社会主義」イデオロギーと矛盾・衝突しない類の物的関心でしかない。換言すれば、それは、利己的、資本主義的な物的関心、すなわち、他人労働の搾取によって満足されるタイプの物的欲望はいうまでもなく、自己目的と化した利得心、「所有主の欲求の正当な (reasonable) 充足」(P. O. ハルフィナ)¹⁾を超えると思なされる消費欲（たとえば、同居の夫婦およびその未成年の子に対し二戸以上の住宅の所有²⁾を、決して認容しないのである。フルシチョフ自身、物的インセンティブの一層の強化によって共産主義の物質的・技術的基盤を造出するという自己の路線を強調した第21回共産党大会（1959）の席上において、彼が奨励するのは、あくまでも「社会主義的な」物的関心であり、「資本主義的な」それでないことを明確にしている：

「個人主義、個人的な貪欲、利潤欲……といった気質——これは、ブルジョア社会の道徳の本質である。……社会主義は、べつの道徳……を主張している。……

大多数のソビエト人の感情は、社会にとって有益な人となり、社会のためにあらゆる新しい物質的・文化的な富を創造するという、高い理想によって動かされている。資本主義のもとでのような、金もうけへの情熱ではなくて、まさしくこれが、ソビエト人の活動の根本的な動機なのである。アメリカの作家ジャック・ロンドン³⁾は、金を求めて世界の果てへ、たとえ這ってでも行こうとする“ゴールド・ラッシュ”にとり憑かれたブルジョア世界の人々の性格を、生き生きと描いた。先進的なソビエト人は、“金の仔牛”（原訳注—旧約聖書に出てくる偶像。人生最高の目標としての富のことをいう。ネップ時代の山師をあつかったイリフ・ペトロフの小説の題名ともなっている）のためでなく、個人的な富裕化のためでなく、社会全体のために、……遠くはなれた地方に出かけてゆくのだ。」³⁾

しかし、「社会主義的な」物的関心と「資本主義的な」それとの間に、果して明確な一線を劃しうるものであろうか。また、一体なにを基準として、所有主の欲求の「正当な」^{リーズナブル}充足と判定するのか、という疑問が生ずるのであろう。筆者が別稿「ソ連邦における個人的所有権とその将来性」⁴⁾において明らかにしたように、ソビエト法学者間においてすら、将来ソビエト市民の個人的所有に委ねられる消費物資の種類と範囲について、一義的な見解の存しない実状なのである⁵⁾。また、ソビエト体制は、現在までのところ、一種の文化的

1) R. O. Khalina, *Personal Property in the USSR* (Moscow: Progress Publishers, 1966). p. 49.

2) たとえば、新ロシア共和国民法典第107条は、以下のごとく規定する：「法律により認められる事由により、一戸をこえる住宅が市民または同居している夫婦およびその未成年の子の個人的所有にある場合には、所有者は自己の選択によりそれらの住宅のうちいずれか任意のものを留保する権利を有する。他の住宅（数戸の住宅）は、一年以内に、所有者により売却、贈与または他の方法により譲渡されなければならない。」*Гражданский кодекс РСФСР* (Москва: “Юридическая литература”, 1972), стр. 33; 五十嵐清/佐保雅子訳「ロシア共和国民法典 邦訳(2)」、『北大法学論集』(Vol. 17, No. 1, 1966), p. 76.

3) *XXI съезд коммунистической партии советского союза*, т. I. стр. 57; 日本共産党中央委員会宣伝教育部訳編『ソ連邦共産党第21回大会』(東京: 合同出版社, 1959), (第一分冊), p. 74.

4) 木村汎「ソ連邦における個人的所有権とその将来性—公共フォンドとの関連において—」、『法学論叢』(Vol. 84, No. 6, 1969年3月), pp. 44-83; 露訳『スラヴ研究』(No. 20, 1975), pp. 115-142.

5) 同上, pp. 70-73; 露訳, pp. 131-134.

「鎖国」政策を採用し、ソビエト消費者たちから世界の流行やモードをほぼ完全に絶縁することに成功しているものの、将来彼らの圧力に妥協してそのシャッターを徐々に引き上げてゆかねばならないであろう度合に応じて、今日の奢侈品（例——自動車）が明日の生活必需品へと変る可能性が、十分存在するといえよう。このことは、ブレジネフ期の今日（1975）、ソビエトの学者自身の気付くところとなっている。たとえば、B. B. ラキツキーによれば、近年のソ連邦においては、勤労者が自己の所得中、消費財やサービスに振り当てる金額部分が増大し、それに呼応して、必然的に「新しいもの」（новые）、「最近の流行品やプレスティジを高めるもの」（последние модные, престижные）——たとえば、かつては黒海沿岸への休暇がそうであったように、現在ではある種の、食料品以外の日用品、書籍・雑誌、そして幾分かには既に自動車——⁶⁾を、いち早く所有したいという強い希求が、多くの人々の間で、生れつつある、という。

このような疑問や可能性が一方において存在するにもかかわらず——また、それだからこそ一層厳重に——、ソビエト・システムの最高責任者としてのフルシチョフには、自己に課されたイデオロギーの十字架を忠実に遵守し、自分の遂行する物的インセンティブ政策が行き過ぎないように絶えず自己規制の厳しい眼を光らせ続ける義務が存した。たとえば、自動車に対する彼の態度がその一例である。フルシチョフは、頑強に自家用車をソビエト勤労者に無縁な贅沢物とみなす個人的見解を変えず、機会ある毎に、それを「資本主義的な私的所有の方向で利用する」⁷⁾ことを否定、その代りに「社会主義的なやり方」⁸⁾、すなわち「我々各人が自家用車を確保しようとするよりも10倍ないし15倍すら少ない自動車で済む」⁹⁾公共的“自動車賃貸ガレージ網”（сеть прокатных гаражей）、を提唱した¹⁰⁾。かように一方において物的関心を刺激しながら、他方では、それが絶えず一定の限度を超えないようチェックを怠らないという勝手に虫のよい政策下に、物的関心の順調な育成を

6) Б. В. Ракитский, Социальные задачи политики социалистического государства в области распределения, “Известия академии наук СССР (серия экономическая), (№. 2, 1975), стр. 64.

7) *Правда* (1 апреля, 1960).

8) *Там же*.

9) *Там же*.

10) *Правда* (8 октября, 1950). ほとんど同趣旨を繰り返したフルシチョフ演説として、*См. Правда* (2 апреля, 1960). ソビエト体制の忠実な代弁者・W. G. パーチェットは、以下のように書いて、フルシチョフ見解を支持した：「ロシア人の多くも自分自身のものをもちたがる——品不足でなければ自家用車をもちたいと思うものは、何千人もいるだろう。しかし、自動車を買えば買えるものでも、多くは購入申込書に名前を書かない。というのは、ロシアの冬につきものの維持の問題に悩まされるよりも、自動車旅行シーズンにハイヤーを雇う方を好むからである。面倒な維持の問題は特定の集団にまかせ、自動車が必要な場合には、最優先の順番でハイヤーをたのんだ方がよい、というわけだ。これが今日のソ連における自動車旅行の傾向である。世界でもっとも能率的で安い公共運輸制度があるのに、モスクワで職場に行くのに、自家用車をだれが運転したいと思うだろう？ほんのひとにぎりの人間だけだ。週末のためには、労働組合が『自分でドライブする』自動車システムを通じて、車を借りることができる。ソ連における自動車生産はまだ非常に少ないが、自分でドライブするハイヤー・システムの拡張は、運転免許証の発行とほぼ歩調を合わせている。自動車生産のたえず大きくなる割合が、ハイヤー・サービスの社会的消費フォンドに繰入れられることは確実である。」前掲、内山訳、上巻、pp. 148-149. ただし、本書の内容が、その後のソ連の進展にそぐわないことが多い理由によるものか、現在本書は、岩波新書のリストから外され絶版となっていることに注意。

期待する方が、土台無理な話である。つぎの発言はブレジネフ期のものであるが、ソビエト社会主義政権による限界付インセンティブ政策一般がさしてソ連大衆の労働意欲向上にアピールしない訳を、簡潔ながら最もよく答えてくれているように思える：「もうちょっと多く働けば給料は少し上がるかもしれないが、それでいったい何ができるというのだ。大した差はありやしない。僅かばかりの貯金をしてもらいたい何になる。投資することも出来ないし、行きたいところに行けるわけでもない。従ってみんな出来るだけ少なく働き、稼いだものを全部使ってしまう。もし何かのインセンティブがあれば、この態度は一夜のうちに変わってしまうであろうが。」¹¹⁾

(6) 次に、フルシチョフが、ソビエト体制に伝統的な「生産至上主義」(productionism; production socialism: Aufbauideologie)¹²⁾を十分払拭しえなかったために、その物的関心奨励策が、消費財の生産やサービスを伴わない、跛行的なものに終わったことがある。フルシチョフは確かに、〈鋼鉄もしくは大砲〉路線から〈食肉・牛乳・バター〉路線への転換¹³⁾を口約し、とくにスターリン工業化の特色である農業や消費財(B部門)を犠牲にし生産財(A部門)を優先する政策を一部修正しようとした。しかし、彼の認識の不十分さ、クレムリン内における「重工業優先のドグマ」¹⁴⁾を信奉するグループの根強い勢力、そしてこのグループの主張に力を貸した国際情勢の展開¹⁵⁾等の事由によって、フルシチョフは、消費財を十分ソビエト大衆に供しえぬままに、権力の座から滑り落ちたといえる。(B部門の成長率がA部門のそれを上まわったのは、漸くブレジネフ政権下、しかも僅かに1968, 69, 70, 71年の4年間にすぎない。)¹⁶⁾

かくして、フルシチョフによる物質的報償の大衆レベルへの拡大化政策は、金銭的形式(賃金、その他)の増という形では確かに実現されたものの(ソビエト市民の賃金は、1955~62年の間に、約60~80%上昇したと推定される)¹⁷⁾、その増大した所得でもって購入すべき(ないし購入意欲を唆るに充分に良質な)肝心の消費物資の提供という形では、結実をみなかったのである¹⁸⁾。フルシチョフ政権下におけるこの所得と消費の間の不均衡的発

11) *Message From Moscow*, p. 101; 邦訳, p. 123.

12) Arvid Brodersen, *The Soviet Worker: Labor and Government in Soviet Society* (New York: Random House, 1966), p. 133; 岡部実夫訳『ソビエトの労働事情』(東京: 日刊労働通信社, 1968), p. 145.

13) Carl A. Linden, *Khrushchev and the Soviet Leadership: 1957-1964* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1966), p. 49, 67, 211.

14) たとえば、米国との威信をかけた軍拡、宇宙競争、後進国援助、中国との国際共産主義運動の覇権をかけての東欧や第三世界の国々への支援, etc.

15) Tatu, *op. cit.*, p. 166.

16) *Народное хозяйство СССР в 1973 г.* (Москва: Издательство "Статистика," 1974), стр. 56.

17) Marshall I. Goldman, "The Reluctant Consumer and Economic Fluctuation in the Soviet Union," *The Journal of Political Economy* (Vol. LXXIII, No. 4, Aug. 1965), pp. 367-368.

18) 党中央委員会機関誌『コムニスト』(1960年4号)も、つぎのように警告することはしていたのだが：「計画の達成のためたかっているとき、われわれはその背後に抽象的な人間ではなくて、同時代に生きている人々、その増大する要求、変化する関心と趣味を見なければならぬ。……計画を遂行し超過遂行し、多量の物資を生産し、しかもお客が相変らず正当な不満をもつということもありうる。なぜなら、お客は統計上の項目ではなく、生きた人間であり、その期待しているものは『総生産』ではなく、自分の必要、希望、趣味に合致した商品やサービスだからである。もし生産

展を物語る例として、工場倉庫の場所ふさぎや小売店の棚ざらしとしての在庫品の増大ならびに国営銀行における預金額の増加という二事実を、指摘すべきである。つまり米国の経済学者 M. ゴールドマンによると、〈在庫〉ストックは、フルシチョフ期の1955～63年間の間、57年、60年を除く毎年、小売〈販売〉^{セールズ}の伸びよりも大きく、たとえば54年を基準年にとると、63年、小売〈販売〉^{セールズ}高はわずか90%の伸びに対し、〈在庫〉高は176%も増大した¹⁹⁾。その結果として、ソビエト誌『貨幣と信用』(63年12月号)によると、63年半ばに、ソ連全体で過剰〈在庫〉が、39億ルーブルにも達した²⁰⁾。ソビエト勤労者の〈貯蓄〉高も、同じくゴールドマンがソビエト公式統計集から合成した右表がしめすように、1940年(基準年)からスターリンの死(53年)までの約13年間の約5倍の増加に比べ、その後期間にして半分も経過してないフルシチョフの絶頂期(58年)までの約6年には約12倍増加した²¹⁾。

かくしてゴールドマンの大ざっぱな要約によると、ほぼフルシチョフ期とみなしてよい1954-64年間に、商品の〈販売〉高が約2倍と伸び悩んだのに比べ、〈在庫〉高が約3倍、〈貯蓄〉高にいたっては約4倍も増大したことになるが、これらの数字の差が意味するところは、恐らく次のような消費性向レベルであろう：ソビエト大衆がこの時期に (i) 「最低生活レベル」(a subsistence level)²²⁾を超えた、即ち最小限度の衣食住を賄い、さらに一通りの耐久消費品(例えば、時計、ラジオ、ミシン、自転車、など)を所持したこと²³⁾；(ii) 将来における耐久贅沢品(例えば、自動車、住宅)の購入のために自発的に計画貯蓄する金銭的余裕をもつにいたったこと；同時に亦 (iii) M. ゴールドマンの他の論文「ソ連における気乗りのしない消費者と経済変動」が説くように、現時点においてそれ以上購買意欲をそそるに足る品質の消費物資を店頭に見出しえないがために、止むなく買い控え、「強制的

年	全 預 金 額 (単位：10億新ルーブル)
1940	0.725
1945	—
1946	—
1948	—
1950	1.647
1951	1.900
1952	2.281
1953	3.280
1954	4.062
1955	4.559
1956	5.216
1957	6.412
1958	6.880
1959	7.853
1960	8.728
1961	9.181
1962	9.801
1963	10.569

出典：Goldman, "Reluctant Consumer and Economic Fluctuations in the Soviet Union," *The Journal of Political Economy* (Vol. LXXIII, No. 4, Aug. 1965), p. 369.

物が工場の倉庫や商品の棚の場所ふさぎとして、生産を計画し、だれも望まぬ物資を生産した官僚の貧弱な管理にたいする無言の非難として、また、形式主義者の無神経の生きた証拠として、つんでおかれるだけなら、だれが何貨車分の生産物を必要とするだろうか?……」"Социалистическая забота о человеке," *Коммунист* (Vol. 36, No. 4, март 1960), стр. 13.

19) Marshall I. Goldman, "Trade and the Consumer," *Survey* (No. 64, July 1967), p. 133.

20) M. Goldman, "The Reluctant Consumer ...," p. 366.

21) しかも、この表には、ソビエト公式統計によるゴスパンク(国営銀行)における預金額のみがあらわされているにすぎず、ソビエト当局によって把握ないし発表されない私的な貯え(たとえば、へそくり、「たんす貯金」、等)を加えると、ソビエト市民の貯金額は、以上をさらに上まわる大きさのものであると推定せねばならない。

22) *Ibid.*, から再引用。

23) *Ibid.*, p. 373.

貯金」(involuntary saving)²⁴⁾を余儀なくされていたこと。——これら全ては、要するに、ソビエト大衆が商品を選択し、自己の嗜好に合わない不良品を拒否するという〈売手市場から買い手市場へ〉²⁵⁾の時期が到来したことを示している。

しかるに、フルシチョフには、自己の統治下の1950年代末に訪れた、ソビエト史を劃する、この時代の転換（——「量」から「質」への時代の転換、と換言してもよい——）をシャープに認識し、適切に対応することに失敗した疑いがある。またここでも、自家用車生産に対するフルシチョフの消極的態度の固執が、良い例となる。フルシチョフは在職中、「我々は、多くの車を生産する。ただし、現在ではない」²⁶⁾と主張しつつけたが、これは、TV、洗濯機、自転車などが一通り普及した後、ソビエト大衆が次に欲求しているものが間違いなくマイ・ホームとマイ・カーであることを、意識的・無意識的に見誤った感覚といいえよう。（フルシチョフを失脚に追いやった後、コスイギン首相は、西欧〔仏、伊〕資本を導入してまで、国民の自家用車熱に応える姿勢を示した！²⁷⁾）

最後に、フルシチョフ政権による、消費物資の増産努力が不十分であったばかりでなく、ソビエト消費者大衆が消費物資を入手するに至るメカニズム、すなわち商業流通機構の改善にも努力を傾けなかった片手落ちについても、一言せねばならぬ。歴代ソビエト政権は、商品のたんなる所有権の移転を業務とし付加価値を生まない商業活動を軽視するマルクス主義イデオロギーに災いされ、中間流通部門の経費を可能なかぎり節減し、その負担を一般消費者に肩代りさせてきた。ソビエトの一社会学者の報告によれば、ソビエト消費者は、平均して、その余暇時間の70%をもショッピング等の生活上の用事の為に費し²⁸⁾、而もショッピング時間の内訳は、交通—23%、行列—51%、商品選択—26%!!²⁹⁾、という。

かくして、フルシチョフによるソビエト大衆の物的刺激政策は、同時並行的に品質の高い消費物資の増産のみならず、消費流通機構の改良を伴わない点において、早晚頭打ちになる運命に^{さだめ}あったと結論することができる。

24) Philip Hanson, *The Consumer in the Soviet Economy* (Evanston: Northwestern University Press, 1968), pp. 174-175.

25) M. Goldman, "The Reluctant Consumer ...," p. 366; Marshall I. Goldman, *Soviet Marketing: Distribution in a Controlled Economy* (London: The Free Press of Glencoe, 1963), pp. 188-200.

26) *Правда* (8 октября, 1959 и 2 апреля, 1960),

27) Alec Nove, "Economic Policy and Economic Trends," Alexander Dallin and Thomas B. Larson (ed.), *Soviet Politics Since Khrushchev* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1968), p. 95. ブレジネフも、第23回党大会(1966. 3. 29)の席上、「乗用自動車の生産が不十分である」と明言した。*XXIII съезд КПСС (стенографический отчет)*, (Москва: Госполитиздат, 1965), т. 1, стр. 59. ソ連における最近の乗用車生産状況については、さしあたって William P. Baxter, "The Soviet Passenger Car Industry," *Survey* (Vol. 19, No. 3, Summer 1973), pp. 218-243 参照。

28) *Правда* (23 января, 1966). 『イズヴェスチヤ』(1961. 6. 21)は、ソビエト婦人が、労働日の短縮によって「余った時間を、買いものために浪費すべきではない」と戒めていたが、(*Известия*, 21 июня, 1960), 依然としてブレジネフ期においても、勤労女性が食料品購入のための順番を待つ行列の苦勞を、Н. Баранскаяは、その大反響を呼んだ小説『一週間は、一週間として』の中で、生き生きと描いている。Наталья Баранская, "Неделя как неделя," *Новый мир* (№. 11, ноября 1969), стр. 36; 高橋昌美訳(東京: 白馬書房, 1923), pp. 70-71.

29) Goldman, "Trade and Consumer," p. 140 から再引用。

第三節 産業心理

——経済人 (homo economicus) の未発展——

以上延々と論じきたことは、要するに、ロシア人が、西欧世界のある種の国民とは異なり、①「労働」意欲も（第一節）、②「物質」的関心も（第二節）、さして大きくない民族的特質の持主であり、このロシア的伝統が、「社会主義」革命後も容易に克服されず、新しい「社会主義」的要因と相まって、フルシチョフの物質的刺戟政策にも暗い翳りを与えてきたということであった。①と②からいわば論理必然的に導きだされる自明の系として、ロシア人が、③ この二つの欲求の結合、すなわち、「物質」的衝動にもとづいて、「労働」意欲を燃えたたせる習性をも持ち合わせぬ国民であり、それが、フルシチョフ構想の成否に影響を与えたことにかんし、改めて説くまでもないことかも知れない。にもかかわらず、この③についてここで独立の節を設けて一言確認・強調すべきと考える、つぎのごとき特別の事由が存在するのである。つまり、西欧の多くの資本主義諸国の住民たちは、「物質」欲と「労働」欲の二つの契機をためらうことなくストレイトに連関させる習性をもつ。しかるに、ロシア人は、「物質」欲と「労働」欲とを個別的に有しはしても、必ずしもこの二つを結びつけようとする発想や行動を採らない。——むしろ、(①と②のそれぞれにみられるロシア的特殊性もさることながら)、この二つのモメントの関連づけの仕方そのものという第三の点にこそ、最大のロシアの特徴があり、結局のところ、それが、フルシチョフをつまずかせたポイントではなかったのか、と筆者には思えてならないのである。けだし、フルシチョフが欲したのは、たんなる物質的関心でなく、「労働にたいする物質的関心」(материальная заинтересованность в труде)¹⁾、すなわち「労働」と結合された「物質的関心」であったのだが、この結合はソビエト大衆にとって我々に想像されるほど必然的なものでない処に、問題が存するのである。以下、この第三の点を二つの側面に分けて検討することにする。

一 「企業家精神」の欠如

①物質欲の充足手段の側面 第二章で、ロシア人の価値体系のなかで、富は、必ずしも、真・善・美ほど高い地位を占めないと述べた。しかし、こういう一般的傾向を述べたからといって、ロシア人が物質的価値に全く淡泊であると主張していると誤解されてはならない。ロシア人として物欲をもつ。否、ロシア人のある者の比類なき守銭奴ぶりや骨肉あい食み身をも滅ぼしかねない旺盛な物欲は、たとえば19世紀ロシア小説を通じて、世界に喧伝されている通りといってよい。(一例として、『死せる魂』のサバーケヴィッチ、プリューシキン、『カラマゾフの兄弟』のドミートリイを想起せよ)。したがって、ロシア人一般の物質的執着心を相対的に稀薄とみなす筆者の判定に異論を唱える者があっても、止むを得ない。だがそのような者といえども、ロシア人の物的充足の仕方、とくに労働との特別な関連づけに見られるつぎのごとき特殊性にかんしては、筆者に同意するのではなからうか。——つまり、ロシア人は、仮に西欧人と変らぬ旺盛な「物欲」をもつにせよ、彼は

1) Синенко, там же, したがって、「労働への物質的刺戟」とは、「自己に必要な生存・手段を獲得する源泉としての労働活動にたいする、個人の自覚し、物質的関心によって補強された態度」ということになる。Там же, стр. 140.

それを「勤労」という西欧人にとっては最もノーマルな手段で処理、解決しようとはしない特性の持主なのである。

ロシア人が「物欲の存在」→「勤労による充足」という手段に訴えないのは、主として西欧とは異なり、そのような解決処理法を是とする倫理ならびにそのような慣行を一般化する時間（歴史）を欠如したからと考えられる。既述のごとく、西欧世界の一部では、16世紀以来、勤労を奨励する教義（＝プロテスタンティズム、とくにカルヴィニズム）の人民大衆間における普及が、財貨の貯蓄ならびに生産力の発達を促進するのみならず、彼らに営利欲（Erwerbsgier）を芽生え成長せしめた。つまり、プロテスタンティズムの倫理は、勤労が結局は自己の物質的状态の改善につながることを説くことによって、資本主義的な営利活動（Erwerbstätigkeit）展開の正当化事由（「資本主義の精神」^{ガイスト}）を提供し、その興隆に資したのである¹⁾。しかるに、他方、19世紀末までのロシアには、このように M. ウェーバーが見事に論証してみせたような事態の展開は、全く見られなかったのである。つまり、そこでは、禁欲や勤労を教えるような倫理は導入されず、人間性来の衝動的欲求としての貪欲は、他のなにものにも昇華・変形されることなく、いわば「それ自体」^{アン・ジツヒ}のままにとどまっていた。そこでは、むしろ「肖越しの金をもたない」浪費ないし淡泊ぶりが美德とされ、現在よりもより多くの物的価値を所有せんとする動機ないし行為（貯蓄や投資）は、不純視された。ましてや、利潤の追求を主たる目的とする活動が蔑視されたのは、言うまでもない。地主貴族、インテリゲンツィア、農民は、「プチブル的商人根性」（мещанство）のみならず、「企業家精神」（entrepreneurship）を嫌悪し、その担い手たる商人を軽蔑した。当時の知識人の中で営利活動にたいして最も偏見の少いとみられる B. Г. ベリンスキーですら、商人を、「富の神、そして富の神のみに仕える、卑しい、見下げ果てた、低級な動物」²⁾と呼んだくらいであるから、他は推して知るべし。富は、営々たる努力と結びついた目的的行為の成果とは観念されずに、たまたまの偶然の僥倖に左右された結果と理解された。19世紀末の商人階層を登場させた例外的な³⁾文豪チェーホフの『3年』（1895）の中の主人公ラープチェフの態度は、この典型例といえる。ラープチェフは、そこからの収入で暮しているにもかかわらず、実家の商業を継いでいる弟フォードルに向って、つぎのようにうそぶくのだ：

「大したことはないじゃないか、何百万の事業なんてさ。特別な才覚も能力もない人間が、何かのはずみで（случайно）小商人となり、それから金持になって、何のシステムも目的もなく（без цели）、金銭にたいする執着すら持たずに、毎日毎日商売にはげみ、機械的に商いをつづけているうちに、金の方がひとりでに（сами）転がりこんできただけの話で、別にみずから金をめざして動いたわけじゃないんだからな。」（強調点—

- 1) マックス・ウェーバー著/梶山力・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（東京：岩波書店、1962）、下、とくに pp. 165-252.
- 2) Alexander Gerschenkron, *Economic Backwardness in Historical Perspective* (New York: Frederick A. Praeger, Publishers, 1965), pp. 60 から再引用.
- 3) R. ヒングリーも、「ロシア本国以外でよく知られている文学作品のなかでは、ロシアの商人は主役になっていない」と書いている。R. ヒングリー著/川端香男里訳『19世紀ロシアの作家と社会』（東京：平凡社、1971）、p. 218.

すべて木村)⁴⁾

勃興しつつあった商人階層の側も、強力に自己主張し自らの活動の存在理由を正当化する自信を欠いていた。この点が、「西ヨーロッパの、己れの力の自覚のうえにたった『勝ち誇れる』ブルジョアジーとの極立った対照をなす、ロシア社会構造の〈精神状態〉」(R. ポルタル)⁵⁾にみられる特異性であった。

ロシア、アメリカ、ヨーロッパ諸国、日本、……の近代化の中に、「工業化の段階」として共通項が存在することを指摘した W. W. ロストフによれば、ロシアの近代化は、ウィットに始まり、スターリンによって完成されたという。しかし、そのロストフですら、ロシアの工業化の離陸の先行条件が、右に述べた如き「自由に活動する商業中産階級の欠如、近代的な生産的経済活動を当初はあまり奨励しようとはしなかった文化等」⁷⁾によって、アメリカのそれと全く異った点を強調せざるをえなかった。したがって、とうぜん、ロシア工業化離陸を企図したウィットの前途にたちはだかった課題は、たんにロシアの社会経済構造の変革、すなわち「弱小で不評判だった実業界を、土地貴族の上位におく」⁹⁾ことを目指す社会の上層部の再編成や「農民大衆の間にも個人的企業心を導入する」⁹⁾ための農村共同体の解体のみではなかった。それは、ロシア人の精神的・心理的構造を根本的に変更して“経済人”(homo economicus)を創造するという重大事業であった。ロシアの近代化にかんしユニークな見地を展開した T. H. フォン・ラウエも、ウィットの課題がなによりも先ず精神革命にあった点を、次のように書いている。

「ウィットは、彼の前途にもっと重要なものがあると感じていた。それは、人間に日常の仕事遂行させていく、目には見えない動機と価値観であった。彼は、農業的ではほとんど中世的ともいうべき生活様式に由来する遅鈍で陰鬱な保守的気質を、機敏な都会的理性や、マックス・ウェーバー以来プロテスタンティズムの倫理と呼ばれてきた困難な仕事に対する固有の内的動因に転換させていかなければならなかった。多くの高級官僚(皇族はいうまでもなく)の不注意とだらしなさは、祖先伝来のドイツ的な自己修養を身につけていたウィットにとって、絶望的なものであった。しかし、同じようなきまぐれと無頓着は、社会のすべての層の間にも広がっていた。人間の行動の動機づけとなるこれらの精神的な要因を、いかにすれば近代化しうるであろうか。」¹⁰⁾

- 4) A. П. Чехов, *Собрание сочинений* (Москва: Государственное издательство художественной литературы, 1956), т. 7, стр. 489; 原卓也訳『チェーホフ全集』(東京: 中央公論社, 1969), 第10巻, p. 158.
- 5) ロジェ・ポルタル著/外川継男訳「18世紀末より20世紀はじめのロシア社会」, 『スラヴ研究』(No. 15, 1971), p. 166.
- 6) W. W. Rostow, *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto* (Second Edition), (Cambridge: The Cambridge University Press, 1971) p. 66; 木村健康/久保まち子/村上泰亮訳『経済成長の諸段階』(東京: ダイヤモンド社, 1969), p. 90.
- 7) *Ibid.*, p. 98; 同上, p. 132.
- 8) Theodore H. Von Laue, *Why Lenin? Why Stalin?: A Reappraisal of the Russian Revolution, 1900-1930* (New York: J. B. Lippincott Company, 1964), pp. 57-58; 倉持俊一訳『ロシア革命論』(東京: 紀伊国屋書店, 1969), p. 52.
- 9) *Ibid.*, p. 58; 同上.
- 10) *Ibid.*; 邦訳, pp. 52-53.

欧米ではながい期間にわたって自然発生的に醸成された、このような精神の近代化が、急速に、しかも上から行なわれなければならないところに、ロシアの特殊性（と悲劇？）が存在した。ウィッテの政治的失脚によってこの難事業が解決されぬままに（また、それが一因となって）、ロシアでは無産「プロレタリアート」革命が勃発し、甚だ遅まきながら萌芽的に育ちかけた産業人階層（例——チェーホフ『桜の園』〔1903〕のロパーヒン）とその価値尺度を潰滅し押し流してしまったのである。

ニ “社会主義的産業人” ——そのイメージと創造の困難性——

では、ソビエト「社会主義」革命は、このように営利行動を賤しむロシアの伝統と、どう関わり合ったのか？ 「19世紀末に漸く勃興しつつあった商業ブルジョア階級を革命は一撃の下に壊滅させた」と述べたが、もちろんソビエト革命が、そのような単純な関わり合いでコトを済ましてよいはずはない。ソビエト政権も、純粹カリスマ的支配でなく、いやしくも永続的支配を志向するものとして、とうてい“経済”の要因を無視しえないからである。だとすれば、異なる体制下の全く別箇の形であるとはいえ、なんらかの経済的行為とその担い手、そしてそれを促進する触媒すらをも必要とするであろう。このようにソビエト「社会主義」の産業・営利行動への関わり方を考えてみると、そこに明らかに異なる二つの態度が存在するといえる：すなわち、一方においては、資本主義的な物的関心を否定したソビエト「社会主義」革命としては、とうぜんそのような関心の現実化としての資本主義的な企業活動ならびにその担い手としての資本主義的な産業人を拒否する。まさに他人労働の成果を篡奪する私的企業の仕組、そしてその受益者たる地主、資本家、企業主、投機師、金貸しの打倒、廃絶——これこそ、暴力革命への決起の動機かつ目的なのだった。したがって、革命成就後、ソビエト政権が、生産手段の没収、国有・公有化の作業を通じて、かような目標を完遂・確保する制度的枠組を設定し、今日に至ったことは当然であり、改めて述べるまでのことはない；しかし、他方、ソビエト体制は、経済ないし生産活動そのものを否定した訳ではまったくない。新しい「社会主義的」経済の仕組内における「社会主義的」生産——これを、大いに奨励・興隆させる以外に、「社会主義」の自立の途はありえないことも亦確かなのである。

したがって、ソビエト体制にとり、このような経済ないし生産活動の担い手としての“社会主義的産業人”，ならびにそれを動かす主要なメカニズムとして物的インセンティブ制度をもつことが不可欠となってくる。

まず、「社会主義」ソ連が、先進資本主義国以上に、「物質的関心」を「労働」に結びつけるメカニズムとしての物質的刺戟制度を必要とする理由がある¹⁾。第一に、工業化社会としての歴史が浅いために、西側の先進資本主義諸国では永年にわたって自然発生的に形成されてきた、技術にたいする誇り、責任感、自己規律といったいわば職業 (Beluf) が当然各労働者に要求する精神的特性の形成が不十分であること。第二に、「社会主義」経済の完全雇用システム下に労働者が失職の危険に怯え煩うことが少いことと裏腹に、各労働

1) Leonard Joel Kirsch, *Soviet Wages: Changes in Structure and Administration Since 1956* (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1972), pp. 42-43. K. メーネルトも述べている：「ソビエト経済が、賞与制をとり除くことは、“資本主義経済”が私的利益を排除することよりも困難だ、とさえ私は思っている」、と。Mehnert, *op. cit.*, S. 79; 邦訳, p. 81.

者が自己の潜在能力をたえずバーゲニング・ポジションにおいて仕事する緊張感に乏しいこと (A. Г. アガンベギアンと B. Ф. マイエル)³⁾。第三に、機械化や自動化といった科学技術的進歩が西欧に比べてより低い段階にあるために、どうしてもその分だけ労働生産性向上の挺子として、物的インセンティブに依存する割合が多くならざるをえないこと、等々である。

また、ソビエト体制は、「社会主義」的経済のトレーガーとして、いわば“社会主義的産業人”(социалистический экономист; socialist industrial man)とでも名付けるべき人間類型を想定、その積極的育成に努める³⁾。この“社会主義的産業人”とは、健全で「適度に嚮導された(物質的)利己心(a properly guided self-interest)」⁴⁾をもち、しかもそれを充足するために「労働」に精出す必要があると考える思考様式の持ち主、即ち物質的刺戟に正しく応える人間である。したがって、彼は、(i)フルシチョフ的“新しい人間”像の経済的側面を充足する者と言い換えてよい。これに、「ソビエト体制に思想・イデオロギー的に忠実」という政治的側面を加えると、フルシチョフ版“共産主義的人間”にぴったり合致するからである(既述94ページ参照)。しかし、そのさい、その比重において、その経営実務的側面が、政治思想的側面に劣らないどころか、暗黙裡により重要な前提とされていることに、注意する必要がある。『プラウダ』論説(1961年7月2日)も、述べる:「適当な資格をもったすぐれた実務家(практик)であるのみならず……大衆にわれわれ共通の任務の勝利にたいする信念を鼓吹するような政治家(политик)——これが、真の……、共産主義者の肖像である」(強調点—木村)⁵⁾。また、“社会主義的産業人”とは、その特性のほとんど全てが、(ii)正に革命までのロシア人に欠如していた資質という意味で、伝統的なロシア人の超克のうえに初めて造出される人間類型であり⁶⁾、(iii)正に農耕社会でなく機械時代の都市型産業社会に不可欠の属性である⁷⁾という意味で、「近代化」ないし「工業化」の旗手である、といってもよい。かくして、やや荒っぽいとの譏りはあろうが、“社会主義的産業人”=“新しいソビエト人”=反ロシア的人間=近代化(工業化)のトレーガーなる等式が成りたつ。つまり、19世紀後半にウィッテによって開始され挫折したタイプの人間造出の試みが、若干変形された形ではあるが、10月「社会主義」革命を経て、ソビエト、とくにスターリン、フルシチョフ期に継承されているのを見るのである。

しからば、このソビエト体制が必要とする人間像としての“社会主義的産業人”が、果してソ連邦に形成されえたか、と問われねばならない。

ソ連史初期(おおよそ戦時共産主義とネップ期)に、まだこのような人間タイプが形成

2) Kirsch, p. 42.

3) B. ユーラムは、指摘する:「マルクス主義の選別的機能は、革命ドクトリン主義の蔽いの下に、近代的産業国家を建設するために必要とされる、管理・行政上の本能を高度に所持している人間を、レーニン主義党の中に引き入れたも同然である」。Adam B. Ulam, *The Unfinished Revolution* (New York: Vintage Books, 1964), p. 199; 奈良和重訳『未完の革命—工業化とマルクス主義の動態—』(東京:慶応義塾大学法学研究会, 1968), p. 226.

4) Joseph S. Berliner, *Factory and Manager in the USSR* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1957), p. 49.

5) *Правда* (2 июня, 1961).

6) K. Mehnert, *op. cit.*, S. 40; 邦訳, p. 40.

7) Meyer, *op. cit.*, p. 81.

されていなかったことは、改めていうまでもない。ようやく見出されたのは、古参ボリシェヴィキのなかで、革命前になにがしかの経済活動に関与した経験の持ち主であった。ソビエト政権は、「社会主義」経済の実務を、止むなくこれらの古参ボリシェヴィキ（いわゆる「赤い企業長」⁸⁾約 5,000 名）に委ね、質量ともにその足らざる部分を、メンシェヴィキおよび旧ブルジョア出身の経営専門家（いわゆる「赤い経営者」ないし「赤い産業人」⁹⁾約 15,000 名¹⁰⁾）を雇用することによって補ったのである¹¹⁾。

ネップ後、工業化の離陸を決意したスターリンは、1931 年、「わが国は、労働者階級が、生産における自己の利益を支配階級のそれとして護る能力のある、自分自身の生産的-技術的インテリゲンツィア（производственно-техническая интеллигенция）を創りださなければならない発展段階に入った」¹²⁾、と宣言すると同時に、既述のごとく（123 ページ）、同演説中において、スターリンは物質的報酬の悪平等を弾劾し、「とうぜん受けるべきものを報酬するような賃金組織をつくる」ことによって、経営幹部への「昇進の刺激」という〈餌〉を約束することを、決して怠らなかった。このスターリンの政策転換によるエリート層の速成作業は、見事な成功を取めたといわざるをえない。そして、このことをもって、「（工業化の）新しい建設者の幹部」= “新しい人間” とするスターリン的定義¹³⁾からいって、“新しいソビエト的人間” の誕生とみなすことも可能である。スターリン期に、経営エリート集団は、約六倍（1926 年の 2 万人から、1957 年の 13 万 1 千人へ）増大し、その伸長はとくに工業化の take off がなされた第一次、第二次 5 カ年計画期（1928-38~39 年）に顕著であった¹⁴⁾。このような成長の過程を十分見届けたスターリンは、1936-38 年、「幹部の交代」のスローガン下に、消耗して最早や使いものにならない古参ボリシェヴィキ出身の「赤い企業長」の粛清を断行、代えるにソビエト新体制下に政治思想ならびに産業技術教育を受けた上記の専門家（いわゆる「赤い専門家」¹⁵⁾）達へ、経営実務を全面的に移行させる方針に踏み切ったのである。この経営エリート集団は、スターリン期の最後の約 10 年間（1943-53）に、コト企業経営にかんする限り党の干渉を最小限に喰いとめる

8) Azrael, *op. cit.*, pp. 65-102; 邦訳, 上巻, pp. 113-172.

9) E. H. Carr, *The Interregnum: 1923-1924* (London: Macmillan and Co. Ltd., 1960), p. 42.

10) 経営エリートにかんする、貴重な邦語文献として、西村文夫「ソ連の政治と経営エリート」、西村文夫/吉田靖彦編『現代ソ連の経済と産業』（東京：日本国際問題研究所、1976）、pp. 555-600 参照。

11) John P. Hardt and Theodore Frankel, “The Industrial Managers” in H. Gordon Skilling and Franklyn Griffiths (ed.), *Interst Groups in Soviet Politics* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1971), p. 177.

12) Сталин, *Сочинения*, т. 13, стр. 66; 『スターリン全集』, 13 巻, pp. 86-87.

13) スターリンは、1926 年 4 月 13 日の報告「ソ連邦の経済情勢と党の政策について」の中で、「どんな任務も、とくにわが国の工業化というような大きな任務は、生きた人間なしには、新しい人間（новые люди）なしには、新しい建設者の幹部（кадры новых строителей）なしには、実行しうるものではない」と述べた。Сталин, *Сочинения*, т. 8, стр. 138; スターリン全集刊行会訳, 8 巻, p. 166. このことから、スターリンも亦、「（工業化の）新しい建設者の幹部」= 「新しい人間」と、フルシチョフ同様、“新しいソビエト的人間” として、極めて実務的な工業化のトレーガーを想定していたことが分る。

14) Hardt and Frankel, *op. cit.*, p. 177.

15) Azrael, *op. cit.*, pp. 102-111; 邦訳, 下巻, pp. 5-11.

一方、党務へも人的進出を行ない¹⁶⁾、資本主義社会のブルジョワ経営層とさして異同のない¹⁷⁾有形無形の物質的特権をもつ¹⁸⁾、いわゆる「新しい階級」の支柱¹⁹⁾を形成したのである。ただ彼ら「国家ブルジョワジー」(J. アズラエル、K. メーネルト)²⁰⁾が資本主義社会のそれと決定的に異なる点は、彼らの人為的造出者(＝スターリン)を離れて独立の自己主張をなしえないどころか、彼にたいしつねに絶対的忠誠を誓わねばならないひよわな存在であったことである²¹⁾。

フルシチョフは、党第一書記のポストをマレンコフから挽ぎとることに成功すると直ちに経営幹部^{カドル}の入れ替え作業にとりかかった。「経営者革命」(J. R. アズラエル)²¹⁾とも呼ばれる、このフルシチョフによる経営人事の刷新は、政治的見地からは、新しく自己の権力基盤となった党専従幹部^{アブラチキ}の権限を相対的に強化するために、かつてスターリン自らのお声がかかりで急成長を遂げ、ひきつづいて政敵マレンコフの「主要な選挙区民」²³⁾となった経営幹部を一掃する狙いをもつものであった。と同時に、それは、工業化の新段階に移行したソ連経済の要請に応じて、今や時代遅れとなった「赤い専門家」に代えて、新しいテクノロジーの知識と訓練を受けた新鮮な人材を登用するという、表向きにも十分通用する事由にもとづくものだった。つまり、フルシチョフも、第21回党大会(1959)の席上において、説いた。「7カ年計画の実現にあたり、最も重要な役割を担う幹部として」²⁴⁾、「実生活からたち遅れた人々」²⁵⁾ではとうてい駄目であり、今やどうしても「新しいことがらにたいして鋭敏な感覚をもっている人々」²⁶⁾を抜擢せねばならない、と。このフルシチョフの「無血パージ」²⁷⁾によって新しい経営エリート^{カドル}のポストに登用されたのは、むしろ比較的年齢の若い人々であった。彼らは、「有能で、仕事に明るく」²⁸⁾、「実務を知り、イニシアティブを発揮し」²⁹⁾、就中「“合理的な”企業家的刺激」(“rational” entrepreneurial stimuli)³⁰⁾

16) *Ibid.*, p. 104; 邦訳, 下巻, p. 7.

17) J. パーリナーは、このようなソビエト経営者を、「形式においてはなるほど社会主義的ではあるが、内容においてはブルジョワ的な経済的人間(homo economicus)」(強調点—木村)と名づけている。Berliner, *op. cit.*, p. 49. 党中央委の政治・経済(隔週刊)雑誌『ポリシェヴィク』は、1937年の「幹部の選抜ならびに教育は、最も重要な政治的課題」と題する論説中において、理想的な赤色専門家とは、「アメリカ的、ビジネス・ライクな才幹(американская деловитость)とロシア的、革命的エネルギーを結合すること」を基本的特徴とする、としている。“Передовая — подбор и воспитание кадров — важнейшая политическая задача,” *Большевик* (№. 14, 15 июля, 1937), стр. 9.

18) Azrael, *op. cit.*, p. 113; 邦訳, 下巻, p. 20.

19) *Ibid.*, p. 116; 邦訳, 下巻, p. 26.

20) *Ibid.*, p. 112; 邦訳, 下巻, p. 20; Mehnert, *op. cit.*, S. 80; 邦訳, p. 81.

21) Azrael, *op. cit.*, pp. 106–107; 邦訳, 下巻, p. 11.

22) *Ibid.*, p. 137; 邦訳, 下巻, p. 59.

23) *Ibid.*, p. 126; 邦訳, 下巻, p. 42.

24) *XVI съезд КПСС*, т. 1, стр. 114; 邦訳, 第1分冊, p. 160.

25) *Там же*, стр. 115; 邦訳, p. 161.

26) *Там же*, стр. 114; 邦訳, p. 160.

27) Azrael, *op. cit.*, p. 141; 邦訳, 下巻, p. 66.

28) *XVI съезд КПСС*, т. 1, стр. 115; 邦訳, p. 161.

29) *Там же*, стр. 114; 邦訳, p. 160.

30) Azrael, *op. cit.*, p. 141; 邦訳, 下巻, p. 66.

に反応する世代であった³¹⁾。

フルシチョフは、かくして、スターリンが血でもって買った「エリート循環」(モスカ)ないし「経営幹部の刷新」のみならず、その基盤拡大にも成功した。すなわち中間・下層レベルの産業機構にも、多くの若い有能な専門家の血が導入され、「幹部の経済的構成の幅が拡大された」(1961年8月21日付『プラウダ』論説)³²⁾。だが、フルシチョフはこれだけに満足せず、改革の趣旨をさらに底辺大衆レベルまで伸長、徹底させることを志向していた。彼は、説いた:「計画、管理、生産の分野で、新しい進歩的なものが積極的かつ全面的な支持を獲得し、国民経済の発展において、迅速かつ経済的合目的性になつて、先進的な科学と技術の成果が利用されるためには、まず何よりも……大衆自身(самы массы)が、これらの新しいものの実現に参加する必要がある」(強調点——木村)³³⁾、と。ところが、スターリンと異なり、たんにエリートだけではなく人民大衆全体をも“社会主義的産業人”に近づけるというフルシチョフ構想は、その構想のスポンサー自身が政治的権力の座から滑り落ちるといふ事件(1964年10月)によって、あえなく頓挫した。フルシチョフ失脚の恐らく最大の理由は、彼が、その経済至上主義の立場から、共産党機構を生産部門(工業・農業)別に分割し、党幹部を経済活動の担当官に貶しめる改革(1962年12月)を敢行して党幹部の誇りと特権を傷け、彼らを反対側に廻したことに求められる。しかし、問題は、たとえ仮にフルシチョフ個人が失脚していなくとも、もっぱら昇進や賃金を餌にしてのフルシチョフ的“社会主義的産業人”育成法は、早晚頭打ちしていたであろうと考えられることである。ここでも、筆者には、その理由(の一端)をなすのが、つぎのごときロシア・ソビエト大衆の心理的傾向にみられる特殊性と思われるのである。

三 「仕事」内容の充実 ——倫理の内面化——

②労働の動機の側面 第一章で、ロシア人の価値観は、どちらかといえば、「労働」よりも「休息」、「享楽」、「安逸」を選ぶ、と述べた。しかし、こういう一般的趨勢を述べたからといって、ロシア人が全く労働しないと誤解してはならないのである。ロシア人として働く。いな、彼らが時として世界に比類なきほど猛烈に働くことが同時に遍く知られているのである。したがって、むしろロシア人がいかなる時に働き、いかなるばあいに働かないかと問題を設定し直した方がより正確というべきであろう。そして、今この新しい間にただちに解答を与えねばならないとするならば、ロシア人は、何か「特別の(special)大義ないし人物ないしアイディア」¹⁾につき動かされるばあいは、猛然と、「どの国の人間よりも少ない食べ物と休息しかとらずに、ずっと激しく長く働く」²⁾。反対に、彼らは、他か

31) 自由企業の存在しないソビエト・システムにおける経営者にたいする刺戟について、David Granick, *The Red Executive: A Study of the Organization Man in Russian Industry* (London: Macmillan and Co. Ltd., 1960), pp. 40-43; 菊地敏夫/藤井寿夫訳『ソ連の経営者』(東京:ベリカン社, 1969), pp. 46-50 参照。

32) *Правда* (21 августа, 1961).

33) *Пленум центрального комитета коммунистической партии советского союза* (19-23 ноября 1962 года). (стенографический отчет), (Москва: Госполитиздат, 1963), стр. 56.

1) *Message From Moscow*, p. 104; 邦訳, p. 127.

2) *Ibid.*; 同上。

ら強制されたり「継続的で着実な努力」³⁾を要求されるばあい、できうるかぎりそのルーチン・ワークを逃避しようとする⁴⁾と答えることができる。前述のロシア生れで後にフランスへ帰化した W. ヴァイドレ (パリ大) も、つぎのように述べている。

「たとえばそれがいかに単純な仕事のことであれ、ロシア人は、自分のハートをその中へ投入できるのでなければ、決して仕事を満足ゆくようには仕上げないのである。ロシア人は、いかなる性質の義務であれ、義務づけられるならば、決して仕事をなし遂げることはない」⁵⁾。

したがって、「個人的にのめり込む特別の感情」(some special sence of personal involvement)⁶⁾を喚起されるばあい、あの懶惰の化身たるオブローモフですら働いたであろうとさえ言いうるのだ。事実、H. A. ドブロリューボフは、そう信じて焉まなかった：

「われわれは、オブローモフが自分の思いのままに行動する能力を生まれつきまったく欠いている人間ではないという結論をえた。……彼は、もし自分にふさわしい任務(дело)を見つけたばあいには、働き(работать)はじめることさえあったかもしれない。」⁷⁾

ただし、ここで H. A. ドブロリューボフのいう「任務」とは、「彼らにとって生活上の必要物ともなり、心からの神聖なものともなり、宗教ともなるような任務、彼らの肉体と有機的にむすびついて成長し、それをとり去ることが彼らの生命をうばうことを意味するような任務」(同)⁸⁾といった、極めてハイ・レベルにおける自己同一化を可能にする類いの仕事を意味したのであった。

もちろん、社会の構成員すべて——とくに、大衆——が、かような崇高な「任務」に就くことを欲しているとは限らないし、亦たとえそうであろうとも何時いかなる体制下にお

3) Anatole Leroy-beaulieu, *The Empire of the Tsars and the Russians* (New York: AMS Press, Inc., 1969), Part 1 (The Country and Its Inhabitants), p. 143.

4) それでは、「社会主義」革命後のソ連史は、このようなロシア人のメンタリティーの側面にどのような関わり合ったかという点、筆者はおおよそつぎのようになっていると思う。

ロシア人が物質的打算よりも寧ろなにか特別なものにたいする共感によって働くという心理的土壌は、ソビエト体制にとって、プラス、マイナス両方の機能を演じてきている。つまり、一方において、ソビエト体制が国民の琴線に触れるイデオロギを提唱したり、国家危急存亡のアップルを行うとき、それらの理念や訴えに共鳴したソビエト大衆は、無償の情熱を捧げ、力尽きるまでの協力を惜まなかった。たとえば、マルクス主義の理想をストレイトに実現しようとした革命の初期（「戦時共産主義」期）、「ロシアが“第二のアメリカ”となる夢を抱いた世代へ熱烈に訴えた」工業化の初期（「第一次カ年計画」期）、累卵の危きに瀕した「母なるロシア」の防衛を訴えた大「祖国」戦争期、などがその例である。

しかし、その反面、ソビエト政権がいったんそのような理想を投げやりにしたり、たんなる日常的業務に従っているとき、国民大衆の心は体制から離脱し、アパシーの淵に身を沈め、積極的な協力を惜しむ。たとえば、「自分たちは、結局のところ欺された」と感じ「ポリシェヴィキ抜き」のソビエト」のスローガンを掲げて抵抗の姿勢をしめしたクロンシュタットの叛乱、農民に土地を与えるとの約束を違えたスターリンの強制的集団化にたいして家畜を撲殺し林野を焼き払った農民の抵抗、革命後半世紀の「社会主義」に幻滅したポスト・スターリン期のシニシズムと無気力、等がその例である。

5) Weidlé, *op. cit.*, p. 226; 英訳, p. 165; 邦訳, p. 240.

6) Message From Moscow, *op. cit.*, p. 104; 邦訳, p. 127.

7) H. A. Добролюбов, *там же*, стр. 321; 邦訳, p. 33.

8) *Там же*, стр. 335; 同上, pp. 65-66.

いても、そのようなことを可能にしうるわけではない。しかしながら、ソビエト大衆が、たとえこのような高尚な意味での「任務」でなくとも、せめて「労働」ではなく、「仕事」に携わりたいというロシア的嗜好性を、強く受け継いでいることは、まず間違いないことと考えてよいのである。ふつう「労働」(ponein; laborare; labor; travailler; arbeiten)と「仕事」(ergazesthai; facere; work; ouvrir; werken)の概念の区別⁹⁾は、手段化された作業と目的的活動の相違として理解されているが¹⁰⁾、筆者のここの文脈においては、前者を物質的報償を得るための手段的作業、後者を活動の内容それ自体に目的と心理的充足を見出しうるがために物質的報償が二義的となる活動と、さらに限定して用いてもよいであろう。

一般に学問分野としての「社会学」を承認するのに随分時間をかけたソ連において、労働生産性向上に資するという錦の御旗によって一躍フルシチョフ期に脚光を浴びて開始された「ソビエト政策志向、課題解決科学」(G. フィッシャー)¹¹⁾としての労働社会学の調査結果は、上記のごときソビエト大衆の嗜好性を裏付ける。これらのアンケートにおいて、モスクワ、レニングラードの青年勤労者や学生たちが、「人生の目標」、「幸福の条件」、「人生計画」などの回答欄で、きまって第一位に挙げるのは、「興味ある仕事」であり、

労働者の人生目標

	賛 成	反 対
富	0.9	17.9
名誉	0.0	12.9
他人にたいする権勢	0.0	22.9
興味ある作業	22.3	0.7
安穏な静かな生活	2.2	8.5
家族(あるいは個人)の幸福	17.6	1.8
魂の救い	0.2	7.1
欠陥にたいする非妥協的態度	5.1	0.2
清潔な良心	10.6	0.9
思想および行動の自由	5.9	0.7
思いやりと相互的尊重	8.6	1.4

出典: ヴェ・ベ・オリジャンスキー「人格と社会的価値」、オシーポフ編著/田中清助訳『ソヴェト社会学』(東京: 青木書店, 1968), 第3分冊 p. 651.

けっして「富」や「榮譽」、「権力」という項目でないのである¹²⁾。一例として、右表にあらわれた、モスクワの工場を対象とする労働者調査の結果をみよ。これら諸調査の中でも、職業選択の動機にかんして「ソ連邦でおこなわれた最初の実態調査」(F. ヘルツバーク)¹³⁾として「画期的な研究」(同)¹⁴⁾と目される、労働意識調査(レニングラード地域 25 企業に属する〔30 歳未満〕青年労働者・2,665 名を対象、1964 年成果発表)¹⁵⁾をおこなった、レニングラード社会学チーム(A. Г. ズドラヴォムイスロフ, B. A. ヤドフら)は、その結論として、つぎのように言う。すなわち、彼ら青年層の労働を決定する要因中において、労働賃金が「従属的、第二義的」(зависимый,

9) Arendt, *On Human Conditions*, p. 80; 邦訳, p. 138.

10) 都留重人「経済の転機」No. 21, 『朝日新聞』(1976. 1. 26).

11) George Fischer, *Science and Politics: the New Sociology in the Soviet Union* (New York: Cornell University Press, 1964), pp. 33-35.

12) 渡辺良智「ソヴェト青年と労働運動」, 『共産圏問題』(Vol. 17, No. 11, 1973), pp. 50-51.

13) Frederick Herzberg, "Job Attitudes in the Soviet Union," *Personnel Psychology* (Vol. 18, Fall 1965), p. 245.

14) *Ibid.*

15) A. Г. Здравомыслов, B. A. Ядов, "Опыт конкретного исследования отношения к труду," *Вопросы философии* (№. 4, 1964), стр. 72-84; Здравомыслов, B. П. Рожин, Ядов, *Человек и его работа: социологическое исследование* (Москва: Издательство «Мысль», 1967).

вторичны)¹⁶⁾であるのに対し、労働の「内容および性格」(содержание и характер)¹⁷⁾こそが「基本的」(основной)な地位を占める¹⁸⁾、と。

米国の心理学者 F. ヘルツバーグによると、上記のソビエト社会学者の結論は、彼が米国人(200名の中間経営人)を対象として職業動機を調査して得たつぎの理論を、支持するという¹⁹⁾。米国の労働社会学史上画期的な、F. ヘルツバーグの「動機 vs. 衛生」理論は、要するに、賃金は、職場の人間関係、物理的労働条件、企業の方針、職の安定性などの要因と同じく、労働の「衛生」(hygiene)、すなわち人間の自己防衛的欲求を充たすものであり、決して人間の自己達成的要求を充たす労働の「動機」(motivation)——それは、仕事の性格(charactor)、内容(content)、遂行(performance)である——と混同されてはならない²⁰⁾。ここでは、ヘルツバーグの理論そのものの当否を論ずる余裕もなく、またレニングラード調査結果の一端をやや性急に自己の持論に援用したヘルツバーグのやり方にも問題があると思われるが²¹⁾、勤労を刺戟する材料としての物質的報償の限界を普遍的なレベルで説明する試みとして、一応言及と記憶に値すると思われる。

ともかく、ソビエト指導者、とくにフルシチョフが、物質的報償——とくに、金銭的形態における——を上積みすることだけで事足りるとするのではなく、以上のごとき労働社会学の発見に素直に耳を傾けるべきであったと考えるのは、筆者一人だけであろうか。ことに、一国の最高の政策決定者としてくある点を超えると(beyond a certain point)物質的報償を増しても、労働の成果を改良しえない²²⁾という一般法則が、自国民にも該当する段階に到達していることに思いを致すべきであったとつくづく悔まれる(!)のである。

あ と が き

——大衆 vs. エリート——

何度も繰り返すが、フルシチョフ構想のポイントは、スターリン時代に主としてエリート層にのみ適用された物質的インセンティブを大衆レベルにまで拡大することを通じて、人間労働の生産性を高め、共産主義の物質的・技術的基礎を造ろうとするところにあ

16) Здравомыслов, Ядов, "Опыт...", стр. 78.

17) Там же.

18) Там же.

19) Herzberg, *op. cit.*, p. 248. このヘルツバーグの見解にたいして、ソビエトの学者は、相変らずの批判、すなわち、「工場が社会主義政府によって所有されている」体制と「私的投機家によって所有されている」体制下の労働者の職業動機とを同列に扱うことの「基本的な誤謬」を指摘している。

20) Fredrick Herzberg, Bernard Mausner, and Barbara Block Snyderman, *The Motivation to Work* (New York: John Wiley and Sons, Inc., 1959), pp. 113-117; F. Herzberg, *Work and the Nature of Man* (New York: Thomas Y. Crowell Company, 1966), pp. 71-91.

21) なぜなら、ズドラヴォムイシロフ、ヤドフらの調査研究をもとに、我が国の若手社会学者は、「給料がソビエト労働者の関心のまものである」(寺谷)、ソビエト労働者は「貨幣が大事だという現実主義的職業観」の持主へと変化してきている(渡辺)とも解釈しているからである。寺谷弘壬「ソ連における労働流動と労働観(モラル)」、『共産圏問題』(Vol. 9, No. 4, 1965, 4), p. 39; 渡辺, 前掲論文, pp. 51-52. 他方、米国の学者 R. J. オズボーンは、ほぼヘルツバーグ的理解を支持する。Robert J. Osborn, *The Evolution of Soviet Politics* (Homewood, Illinois: The Dorsey Press, 1974), p. 342; *Soviet Social Politics: Welfare, Equality, and Community* (Homewood, Illinois: The Dorsey Press, 1970), pp. 184-6.

22) Osborn, *The Evolution* ..., p. 342.

った。人民大衆をより広汎により能動的に経済活動のなかにとり組むことなしには、もはや国の工業化を一步も先へ進めえない状況を正しく踏まえていた点において、同構想は、恐らく当時望みえた唯一最良の選択肢だったであろう。しかしながら、このことを基本的には理解しつつも、筆者は尚、フルシチョフが犯した、大きくいって二つのミスを指摘せねばならない。

一は、人民大衆から積極的協力を引き出す方法上のミスである。フルシチョフは、伝統的なロシア（農民）^{ムジーク}的国民性を今尚色濃く継承しているソビエト大衆のメンタリティーにもっと注意を払い、品質とバリエーションに富む高級消費物資の増産により一層心がけ、「社会主義」体制の諸制約内においては容易に助長しがたい労働意欲の昂揚に今一層努めるべきであった。——ただし、このようなフルシチョフの政策遂行上の配慮の欠如や怠慢については、すでに本文中において十分検討したので、ここでは敢えて繰り返さない。

二は、フルシチョフが、経済至上主義的立場から、人民大衆にたいする関心と依存度を高めることにより、ややもすると寡頭支配という政治権力の鉄則を忘れエリートへの目配りをなおざりにし、その特権すら侵害する結果を伴いがちであったことである。当初から政策的側面にのみ焦点をあてることを目的とした本稿は、権力政治の側面を直接の主題としない。また、ここでソ連社会におけるエリートと大衆に関する本格的な議論を展開する余裕もない。ただ、最後に、あくまでこれまで論じてきたことの継続として、ロシア・ソ連におけるエリート vs. 大衆の問題の一端（心理的側面）に触れることによって、この予想をはるかに超える長文となった本稿を閉じることにはしたいと思う。

ロシア・ソビエト人は、その大衆とエリートとの間において、対照的な性格上の大きな差異をもつことが、第二次大戦終了前後米国で盛んにおこなわれた一連の国民性の研究¹⁾の結果、明らかとなった。ユニークな「おくるみ (swaddling) 心理学」を展開した G. ゴーラーと J. リックマン²⁾、ハーバード大学によるソ連亡命者研究プロジェクトに協力した英国の病理学者 H. V. ディックス³⁾、かつて M. ウェーバーがルター、カルヴァンらの著作から「内より導かれる (inner-directed) プロテスタンティズム」をひきだしたのと同様に、レーニンとスターリンらの著述を綿密に調べあげてポリシェヴィズムを導く^{オペレーション・コード}作戦典範を作製した N. ライツ⁴⁾などの結論がそうである。

まず、ゴーラーとリックマンは、ふだんは防寒と安全の必要上赤ん坊を固くくるんで、授乳や入浴の折のみ解くロシア人の育児法が自由の剝奪 ⇄ 充足という循環心理をつくる

- 1) さしあたって、Arvid Brodersen, "National Character: An Old Problem Re-examined," in James N. Rosenau (ed.), *International Politics and Foreign Policy: A Reader in Research and Theory* (New York: The Free Press of Glencoe, Inc., 1961), pp. 300-308 の要領のよいサマリーと末尾の参考文献参照。わが国の国民性についての研究の代表的なものが R. ベネディクト『菊と刀』であることは、改めていうまでもない。
- 2) Geoffrey Gorer and John Rickman, *The People of Great Russia: A Psychological Study* (London: The Cresset Press, 1949). 辻村明氏による優れた紹介・要約として、徳田教之/辻村明編『中ソ社会主義の政治動態』(東京: アジア経済研究所, 1974), pp. 272-277 参照。
- 3) Henry V. Dicks, "Observations on Contemporary Russian Behaviour," *Human Relations* (Vol. 5, No. 2, May, 1952), pp. 111-175.
- 4) Bell, *The End of Ideology*, p. 327; 邦訳, p. 134.
- 5) Nathan Leites, *A Study of Bolshevism* (Illinois: The Free Press, 1953).

原因であると、説明した。すなわち、服従と暴力的な爆発、アパシーとしっこくつきまとう不安、「口唇的」強欲と禁欲という両極の間の間を振子運動する大ロシア人の民族的性格は、この幼児経験にもとづくというのである⁶⁾。ディックスも、ロシア的性格の顕著な特徴を、^{アンビバレンス}反対感情共存性に求める⁷⁾。すなわち、彼の表現によると、ロシア人は、つぎの二つの極を往き来する：

「一方の極において、『なににでも手を出す』旺盛な欲望、ものごとに突進して『まるごと鵜のみにする』傾向、手っとり早く、しかも十分な満足感を味合おうとする要求、偏執狂的な全能感情、無制限の業績をなしうるという楽天的信仰、溢れんばかりのヴァイタリティー、自発性といっさいの義務・束縛を絶ち切ってしまいたいという無政府的な欲求。

他方の極において、憂うつ、アパシー、節儉、閉鎖性、猜疑心、服従性、道徳的マゾヒズム、強力な専制的権威をロシアの厳しい自然にたいする唯一の防壁と考えて、渋々ながらも理想化する傾向。」⁸⁾

このように極端な二つの感情間を気まぐれに走るロシア人は、実に捉えどころがなく当てにならない存在といわねばならない。正にこのロシア人大衆のなかに伝統的な特性を超克しようと意識的に努力した結果形成されたのが、ソビエト・エリートの心性である¹⁰⁾。したがってソビエト・エリートの第一の要件は、ピューリタニカルに自己の感情や「欲求を支配・コントロール」し「原則的な」立場を堅持するパーソナリティーである¹¹⁾。ライツも、つぎの B. ピルニャクの言葉をトロツキーが好んで引用したとして、同様の趣旨を述べる¹²⁾：

「われわれの大革命は、……わがロシア史の農民的な^ル根元に反抗し、その無定見、その無目的的性格に反抗し、トルストイ『戦争と平和』のカラターエフの愚かな哲学に反抗するところの、意識的で、合理的で、合目的で、ダイナミックな生活原則の名における、叛逆なのである。」¹³⁾

6) Gorer and Rickman, *op. cit.*, pp. 97-104.

7) Dicks, *op. cit.*, p. 168.

8) ロシアの透徹せる思想家ベルジャーエフも、『ロシアの魂』(1915)の中で、「ロシアの国民的性格における男性的原理と女性的原理との独特な相互関係」を指摘し、「ロシアの全世界を通じて流れている」「この二律背反こそ」、ロシアの歴史や政治上の多くの「謎を解く」「秘密」であると喝破した。田中西二郎/新谷敬三郎共訳『ベルジャーエフ著作集』(東京：白水社、1960)、7巻、pp. 260-274；「ロシア人の魂の二重性」ないし「ロシア人の行動様式における二分法」にかんし、H. Smith, *op.cit.*, pp. 104-105, pp. 112-113も参照のこと。

9) *Ibid.*, p. 169.

10) *Ibid.*, G. P. フェドトフも、つぎのように、ロシアのエリートと大衆のメンタリティーの差について、書いている：「自己の課題を、抑制した、しかし緊張した情熱をもって遂行する、不屈の産業心をもつような」ロシア人は、「クラーク（富農）、発明家、科学者、そして行政官」すなわちエリート層に見出されるのであり、「アモルフ（無形の）人民大衆は、容易にこの不屈のエリートの指導に服するのである。」「この無慈悲なまでに強い意志をもったタイプなしに、ロシア帝国、モスクワ公園の創設は、考ええないであろう」。G. P. Fedotov, "The Russian," *The Russian Review* (Vol. 13, No. 1, Jan., 1954), p. 7.

11) *Ibid.*

12) Leites, *op. cit.*, pp. 99-100.

13) Sir John Maynard, *Russia in Flux* (New York: The Macmillan Company, 1951), pp. 301-

自己の感情を制御して仕事に没頭する鉄の意志力をもつ人間に鍛えあげるというソビエト・エリートの使命をもっとも厳しく自己に課したのは、恐らくその頭領レーニンその人であったろう¹⁴⁾。彼が、愛好してやまないベートーベンの『アパッショナータ』に耳を傾けることすら禁欲したエピソードは¹⁵⁾、シベリヤ追放時代から熱中したチェスを「精力を使いすぎて仕事の邪魔になる」¹⁶⁾という理由で断念した挿話と同様、あまりにもよく知られている。レーニンの性格上の特徴が提起する心理学的・政治学的問題という興味あるテーマについて論じた¹⁷⁾、L. S. フォイヤーは、「全生涯を通じて、レーニンは、自己の性格を政治上の諸要求に合わせて形造るために……自分の手で自己の感情の外科手術をおこなった」¹⁸⁾、と述べている。B. ウルフは、さらに敷衍して、次のように書いている：

「これが（＝フォイヤーの上の引用句——木村）投げかける間は、他人のある種の特性、感情、見解にたいする彼（＝レーニン——木村）の……不寛容が、『自分自身との必死の闘いの一部』でなかったかという事である。自己改造の冷酷な青写真を作った後で、まずロシアの『オブローモフ』、ついでロシア国民、それから全人類の改造のための青写真をつくったのではないか。」¹⁹⁾

このような心理的次元の考察を背景として、ふつうレーニン主義の思想や組織論の特徴とされている次のことが、きわめて当然の帰結として、納得されてくるのである：つまり、レーニン主義が、「ロシアにおけるマルクス主義」（スターリン）たるために、自然発生性を排して、目的意識性を強調する²⁰⁾という「マルクス弁証法の逆立ち」²¹⁾（R. レーベントール）を行ったこと；レーニンが、ブハーリンらの大衆党の主張を排して、あくまで前衛党組織を固持して一步も譲らなかったこと。亦スターリンがこのエリート主義法則をその創始者にもまして厳格に遵奉したことは、例えば、彼の「幹部がすべてを決定する（*кадры решают все*）」²²⁾という有名なスローガン、そして彼が理論的には1930年半ばソ連邦にお

302 から再引用。

14) 1898年シベリア流刑中、レーニンは、「私は、ほとんど勉強していません。多くの時間を怠惰に過しています」と書いたことがあるが、これは、53年の生涯中僅か一度か二度吐いた珍らしい弱音だとされている。Robert Payne, *The Life and Death of Lenin* (New York: Simon and Schuster, 1964), p. 115; 高橋正訳『人間レーニン—革命家の生涯—』（東京：弘文堂、1967）、上巻、pp. 99.

15) ゴーリキイ著/湯浅芳子訳『追憶』、下巻、（東京：岩波書店、1969）、pp. 61-62.

16) David Shub, *Lenin: A Biography* (New York: Doubleday and Co., 1950); ダヴィット・シュープ著/現代政治思想研究会訳『レーニンの生涯』（東京：田園書房、1967）、p. 62.

17) 木村汎「レーニン—そのパーソナリティからのアプローチ」、『社会思想研究』（Vol. 21, No. 8, 1969）、pp. 36-42 も参照。

18) Bertram D. Wolfe, "Leninism," in Milorad M. Drachkovich, *Marxism in the Modern World* (Stanford, California: Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, 1965), p. 51; 木村汎訳『現代のマルクス主義—二十世紀に挑戦する思想家たち—』（東京：社会思想社、1967）、p. 77 から再引用。

19) *Ibid.*; 同上。

20) 猪木正道教授は、「自然発生性の面を排して、もっぱら目的意識性の面をおしすすめてゆくところに、レーニン主義のレーニン主義たるゆえんがある」（強調点—原文）と、力説しておられる。猪木正道『共産主義の系譜—マルクスから毛沢東まで—』（新增訂版）、（東京：角川書店、1970）、p. 185.

21) Richard Lowenthal, *World Communism: The Disintegration of a Secular Faith* (New York: Oxford University Press, 1964), p. 121; 高橋直訳『国際共産主義』（東京：朝日新聞社、1965）、p. 126.

22) И. В. Сталин, *Сочинения* (Stanford, California: The Hoover Institution on War, Revolution,

いて階級敵が消滅し、「社会主義」の建設を終了したと宣言したにもかかわらず、共産党独裁を一向に弛めなかったことから、十分うかがえるであろう。

ところが、わがフルシチョフはどうだろうか？ 一般に政治指導者とは優れて「環境の産物」²³⁾ないし「状況の函数」²⁴⁾であるからして、大衆化時代に入った時期のソ連の国政を預かる身となったフルシチョフが、人民大衆をもはや無視しえぬ存在と感じたのは無理もない。つまり、彼は、今や「ロシアという馬車を駆る」には、スターリンのごとき隔絶型の「御者」では駄目で²⁵⁾、人民大衆の利益を適確に触知・表出・集約する代表型リーダーでなくてはならぬこと（いわゆる「リーダーシップの質的転換」²⁶⁾を、本能的に悟ったのである。この基本的な認識にしたがい、具体的な政策をたてるにあたり、まずフルシチョフがなさねばならなかったことは、レーニンという御始祖様の光を借りて、自己の人民大衆路線を正当化することであった。たとえば、1962年11月の党を工業、農業部分に二分する重大決定をおこなった党中央委総会の席上、つぎのように述べた：

「ウラジーミル・イリーイチ・レーニンは、大衆を深く理解し、つねに労働者と共にいた。……彼がいかに密接に大衆と結びついていたか、みてみよ。彼のところには、いつも農民の訪問者、労働者、兵士の代表が、来ていた。彼は、電車の駅の開通記念に農村へ出かけた。彼は、人々、農民のところへ行き、彼らと会い、耳を傾けた。……レーニンは工場に赴き……労働者の精神を識り、感じとることを欲した。

しかるに、スターリンは、どこにいたか？ ……この後、彼は、工場にはいかなかった。……別荘とクレムリンの中だけであった。クレムリンは、訪問者には、閉ざされていた。……彼は人間を恐れた。^{ナロード}人民（народ）との接触のない人生なんて、何だろうか（嵐のごとき、長くつづく拍手）。

スターリンは、どうして、このように振まったのか？ 彼は、大衆との関係をもつ必要を経験したことがなかった——農民から隔絶し、労働者から隔絶していた。……彼（スターリン）は、自分がやがて死ぬであろう、と語っていた。

ところが、我々は、死なないで、生き、働くのだ！……

ここに、レーニンとスターリンとの差異がある。われわれは、レーニン主義の大義な

and Peace, 1967), т. 1 (XIV), 1934-1940, стр. 62.

23) Howard R. Swearer, *The Politics of Succession in the U. S. S. R.: Materials on Khrushchev's Rise to Leadership* (Boston: Little, Brown and Company, 1964), p. 7; H. Swearer, "Bolshevism and the individual leader," *Problems of Communism* (Vol. 12, No. 2, Mar.-Apr., 1963), p. 91.

24) 高島通敏「政治的リーダーシップ」, 篠原一/永井陽之助編『現代政治学入門』, (東京: 有斐閣, 1965), p. 71.

25) Mark Frankland, *Khrushchev* (New York: Stein and Day, 1967), p. 941.

26) 高島前掲論文, p. 81. G. フィッシャーも、フルシチョフが抬頭した1950年代半ばに「ソ連は、モダナイゼーション・モダニティ近代化と近代との境界線を越え、この転換が新しい型のリーダーシップを要請した」と述べている。George Fischer, *The Soviet System and Modern Society* (New York: Atherton Press, 1968), pp. 7-8. このように、政治的指導者を「社会的、政治的、経済的要因で説明し」彼の独自のパーソナリティー要因を無視する傾向にたいして常に警告を放っているのは、Robert C. Tuckerである。Robert Tucker, *The Soviet Political Mind: Studies in Stalinism and Post-Stalin Change* (New York: Frederick, A. Praeger, 1963); "The Dictator and Totalitarianism," *World Politics* (XVII, July 1965), pp. 573-574.

らびにレーニン主義的方法の理念を信ずる（嵐のごとく、長くつづく拍手）。」²⁷⁾

かくて、フルシチョフは、文字通りシベリアの奥地まで遍歴し、^{グラス・ループ}草の根の一般民衆と語り、握手して、彼らの感触と支持を捉もうと試みた²⁸⁾。彼の一世一代の大博打たる第20回党大会におけるスターリン批判も、彼が人民大衆の潜在的な欲求をいち早く察知して、それに表現を与えたものにすぎなかった。また、彼が労働生産性向上の挺子としての物質的報償を強調したのも、国民大衆がもはや説得や強制では動かぬことを本能的に触知したからであった。さらに、フルシチョフは、大衆政治家としての自己の権威を誇示するために、コトある毎に「人民」という装飾^{ナロード}²⁹⁾を纏いつかせるようになった：いわく、人民同志裁判所（товарищеские суды）、人民自警団（народные дружины）、全人民国家（общенародное государство）、全人民党（партия всего народа）……等々——ただし、これらが「裸の王様」の衣服ほどのアクセサリーに過ぎないことに気付かずに——。

すなわち、大衆の潜在的・顕在的な諸欲求を掬い上げてその代弁者としての機能を果たすこと——ここに大衆政治家としてのフルシチョフの面目躍如たるものがあり、かつ彼の成功の一端が存在したこともたしかであろう。しかし、フルシチョフは、自己と大衆との同一化の作業に熱中するのあまり、次第にエリートと大衆との懸隔性の実存（sein）と要請（sollen）という、何時いかなる時においても（——たとえ、大衆化時代においてすら——）忘れてはならない政治力学のABCを、つい疎かにするようになっていったのである。物質的インセンティブの有効性過信は、その典型例である：フルシチョフの物質的インセンティブ政策は、〈人間は、物質的報償をより多く与えれば、より多く働くものである〉ことを前提としている。これ即ち、フルシチョフその人の人間観の容易な投影以外の何物であろうか。極貧の炭坑夫の家に生れながらも、「真面目な骨折りは疲れるけれども、また報いもある」（『フルシチョフ回想録、第二部、最後の遺言』³⁰⁾）ことを信じて「歩けるようになると同時に働き出し」³¹⁾、ついに「大ソビエト国の首相」のみならず世界の一方の陣営を統括する旗頭の地位にまでのし上った男の人生哲学の反映に他ならない。ところが、フルシチョフの誤り（そして悲劇）は、ソビエト人民大衆が必ずしもフルシチョフと同じ考え方をしないということを理解しえず、而もこの誤解の上になって自己の政治構想を構築したところにあった。「仕事がないのを淋しく思い」、「社会のために働く能力を奪われていることが惨めで堪えがたく、精神的苦しみとなる」（同『最後の遺言』³²⁾）というが如きフルシチョフの勤労観——これは、正しくエリートの勤労倫理である。——が、——以上の本稿で延々と検討したように——必ずしも現代の平均的ソビエト大衆の勤労観を代表していないこと——このごく単純な事実を、フルシチョフは、自らが大衆出身であるにもかかわらず、あるいは自らが大衆出身であるが故に、看過したのであろう。

27) *Пленум ЦК КПСС (19-23 ноября 1962 г.)*, стр. 90-91.

28) Merle Fainsod, "Khrushchevism," in Drachkovitch, *Marxism* ..., p. 129; 邦訳, p. 167.

29) *Ibid.*; 同上。

30) *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, translated by Strobe Talbott (London: André Deutsch Ltd., 1974), p. 147; 佐藤亮一訳『フルシチョフ最後の遺言』（東京：河出書房新社，1975），上巻，p. 159.

31) *Правда* (22 сентября 1959).

32) *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, p. 147; 邦訳，上巻，pp. 159-160.

尤も、ソ連型の政治においては経済政策上のミスが、つねに権力喪失を導くとは限らない。フルシチョフの失脚は、彼の「人民主義的偏向 (populist bias)」(M. フェインソッド)³³⁾ そのものよりも——このことと一枚銅貨の裏表をなすとはいえ——より正確には、エリート層の等閑視とくにその特権の浸蝕という権力政治上の誤りに求められるべきであろう。フルシチョフは、1961年の党規約改正により、システムテックな党幹部の更新を制度化したが、続いて1962年12月、党機構を改革、工業、農業担当の二部門に分割した。これは確かに、高度工業社会における共産党の存在理由模索の試みにたいし彼なりに一つの解答を示したものであるうえに、経済活動にたいするコントロール権を共産党に与えることによって、党を弱化するのではなく逆に強化する³⁴⁾ことを狙う意図も秘めていた筈であった。しかしながら、これまで政治・イデオロギー担当のエリート中のエリートとして栄光をほしいままにしてきた党アバラチキにとり、たんなる「ソーセージ製造の監督者」に没落する³⁵⁾ことは、堪えがたき屈辱以外のなにものでもなかった。彼らは、自己の特権擁護のための防衛メカニズムを猛然と発動させた。——「やがて、変化は、つねに強力な圧力に遭遇する」——このモスカやミッヘルスの発見した〈慣性の法則〉(the law of inertia)³⁶⁾が「社会主義」ソ連社会においても有効に働くことが、証明された。つまり、フルシチョフによって「単なる伝導器」(J. アズラエル, M. タチュ)³⁷⁾化されかけた党アバラチキは、1964年10月の宮廷クーデタの蔭のスポンサーとして、彼らの頭ごしに大衆に訴えようとしたフルシチョフの足を見事すくうことに成功したのである。

すなわち、「経済主義」的政策においても十分成功せず、かつ政治権力の一般鉄則、つまり「政治は、一人、少数者、多数者の名において行われようとも、常に少数者による政治である」(H. ラスウェル—但し、強調点は木村)³⁸⁾ことの十全的認識を怠り、とくにソ連社会における政治優先の原則を踏みはずした現代の似而非人民主義者(?)を待っていたのは、「老齢と健康状態の悪化」³⁹⁾を名目⁴⁰⁾とする強制的年金生活への移行、すなわち(自然死よりも7年早い)政治的な死(unperson化)以外のなにものでもなかった。

〔附記〕 本稿は文部省科学研究費による研究成果の一部である。

33) Fainsod, "Khrushchevism," p. 129; 邦訳, p. 167.

34) Tatu, *op. cit.*, p. 249.

35) 現在までのところ最も優れたフルシチョフ伝を書いた M. フラン克蘭ドは、フルシチョフは「文字どおり自分自身のイメージにしたがって党を改組し」、「遂にレーニンとスターリンの党を、ソーセージづくりの党へ変えた」と述べる。Frankland, *op. cit.*, p. 153.

36) Gaetano Mosca, *The Ruling Class* (New York: McGraw-hill Book Company, Inc., 1939), pp. 66-68; Robert Michels, *Political Parties: A Sociological Study of the Oligarchical Tendencies of Modern Democracy* (translated by Eden and Cedar Paul) (New York: Hearst's International Library Co., 1915), p. 98; 森博/樋口晟子訳『現代民主主義における政党の社会学—集団活動の寡頭制的傾向についての研究—』(東京: 木鐸社, 1973), I, p. 94; Tatu, *op. cit.*, p. 432.

37) Azrael, *Managerial Power* ..., p. 145; 邦訳, 下巻, p. 73; Tatu, *op. cit.*, p. 432.

38) Lasswell, *Power* ..., p. 109; 永井訳, p. 134; J. Bryce, *Modern Democracies*, V. 2, pp. 542-551.

39) *Правда* (16 октября, 1964).

40) 1969年版『ソ連邦共産党史』では、この「名目」が削除されていることについて、木村汎「二つのブレジネフ党史」、『スラウ研究』(No. 17, 1973), p. 62 参照。

The Limit of Material Incentives —the Failure of Khrushchevism— Part (I)

Hiroshi KIMURA

An abundance of material goods has been a constant theme of all Soviet leaders from Lenin to Brezhnev: they emphasize this concept as one of the most important prerequisites for the construction of full communism. They sometimes tend to even equate it with an end of Communism itself. How, then, can material abundance be achieved? All Soviet leaders have clearly answered this: it is possible only with maximum labor productivity (as well as the full use of modern science and technology).

In order to increase labor productivity, Khrushchev had to resort to the utmost use of material incentives. It was the only reliable means available, since he could no longer resort to the spiritual stimuli (as Lenin did) nor the physical power (as Stalin did). True, Stalin also made use of material power, but only on a limited scale: scarce material rewards were used, then, to build up the urgently needed small number of *cadres* (competent administrators and skilled workers), who constituted the main pillar of the Stalinist dictatorship and industrialization drive. In contrast, Khrushchev found himself obliged to enlarge the scope of beneficiaries of material reward to the larger segment of the Soviet population, i.e. unskilled workers and kolkhoz peasants, who have resented their deprivation during the Stalin era.

Khrushchev's emphasis upon *more equality and rationality* in the use of the principle of material incentives could be viewed as the only available choice left for any successor of Stalin. Without the active collaboration of the long-neglected masses it would not be possible for industrialization to mature on a more modern footing. Nevertheless, the Khrushchev material incentive policy of rewarding the masses was by no means a great success. Why was this policy not so successful as expected?

There are basically four answers to this question: (1) Psychologically speaking, Khrushchev's understanding of the mentality of the Soviet masses was not sufficient. In sharp contrast to the elite class, which was successfully "educated" by Stalin, the Soviet masses were not so interested in material improvement at the cost of harder work; (2) Ideologically, even (!?) Khrushchev was unable to use his policy on a full scale basis at the cost of having capitalist tendencies. To do so would bring accusations of reviving capitalism in the U. S. S. R. It was required, for any Khrushchev policy, to work within the framework of "Socialist" ideology; (3) Demographically, the Khrushchev era showed a period of population slowdown. It even began to decline. Thus it was unwise to rely heavily on manpower, as evidenced by the post-Khrushchev era, under Brezhnev-Kosygin, of stressing scientific and technological achievements; (4) Economically, since the middle of the Khrushchev era the Soviet economy had shifted in stages "from quantity to quality." Responding to this shift Khrushchev

should have paid more attention not only to the increase of monetary income of the working people but also to the production of high-quality consumer goods which the Soviet general public demanded.

The paper contained herewith concerns only point one (1) psychology, i. e. the pre-revolutionary mental heritage, which obstructed Khrushchev's scheme. The three remaining points will continue in issues to follow.

In Chap. I, entitled "Traditional Russians vs. 'New Soviet Man'," the author aims to analyze the question of the creation of the "New Soviet Man." The Soviet ultimate goal is to create a new human being, the "New Soviet Man." This Soviet purpose leaves no doubt, but their success within a half-century of communism leaves much to be questioned. The Soviets, of course, claim they have already created their type of man: For (1) the new socio-economic environment after the "Socialist" Revolution could not but inevitably help to influence and transform the mental development of human nature; (2) the Soviet society has a monopolistic mechanism of political socialization. In contrast, most Western specialist on Soviet affairs hold strong doubts about this: (a) they do not easily believe in the plasticity of human nature; (b) the Sovietologists emphasize the limit of political socialization, no matter how intensive its process may be conducted by totalitarian power. In conclusion Western observers insist that contemporary Soviet citizens have still preserved a strong imprint of the traditional Russian character.

This author believes there is confusion of concepts of the "New Soviet Man" or the "Communist Man." It is essential to distinguish between the two types of "New Soviet Man": a *Marxist* type of ideal man, a resident-to-be of the future Communist society; he is well-balanced, has a fully-developed "Ideal-Ego" and works for "the first necessity of life"; and a (*Stalinist*-) *Khrushchevian* type of practical-minded man, who is both politically and ideologically very loyal to the regime. He is economically very useful; he works for benefit of society. Very few, including even Soviet ideologues, claim that the first type of "New Soviet Man" has been produced in the Soviet Union, which has not yet entered into the highest stage of Communism. Consequently the task left for the author of this paper is to examine whether or not the second type of "New Soviet Man" has been created in the Soviet Union. Although the (*Stalinist*-) *Khrushchevian* concept of the "New Soviet Man" has been frequently criticized as a "mere parody of the Marxist image of socialist man," it is this type of a man that the Soviet leadership must produce by all means, if it seriously intends to industrialize and modernize the recently-born Soviet state as rapidly and successively as possible.

In Chap. II, entitled "*Oblomov* vs. *homo economicus*," the author is concerned not with the "New Soviet Man" as a whole but with the *economic* aspect of the "New Soviet Man." The most relevant question to ask is whether or not the "New Soviet Man" in economic sense has been successfully created? For the purpose of theoretical analysis it is convenient to divide the problem into three following aspects, which are, of course, inseparably related to each other: 1) labor ethic; 2) material

interest ; 3) industrial morale.

(1) Labor Ethic. Communist theory considers "work" as the most important and valuable aspect of human life. Their attitude toward work and policy which envisages work, above all, as the source of all human wealth, sometimes gives the impression of preaching the Protestant Ethic! However, (A) to the great regret of the Soviet leaders, especially to Khrushchev, it has always been against the nature and tradition of the Russians to work hard for work's sake. The Russians tend to prefer other human activities, such as search for truth, beauty, friendship, and, above all, rest. This deeply-rooted trait in the Russian national character had been underestimated by Khrushchev, the man who began working when he "learned how to walk" and "felt miserable about being deprived of the opportunity to work." (B) Besides this heritage of "Oblomovism," the new framework of Soviet "Socialism" itself has created another obstacle in the way of encouragement for the Soviet general public to work harder. The two basic features of "Socialism," the myth of all-people's ownership and centralized fully-monopolized "State capitalism" (as it is so termed by the Chinese and others), breed among the Soviet people, especially the young generation, apathy, cynicism, "nibonicho," and an atmosphere discouraging working for the good of the Soviet society.

(2) Material Interest. All communist leaders (from Lenin to Brezhnev) have attached great importance to "material self-interest," which, they believe, can and must play a vital role in building a socialist and even communist society. They are eager to encourage the Soviet people to develop a healthy material interest. (A) Again, however, the Russian preference in the order of life's values provides a grave obstacle in the desire and scheme of encouragement of material interest by the Soviet leadership. The Russian peasants who used to belong to the village community, in which they all owned the land in common, had not cultivated a Western sense of personal ownership. Consequently, the Russians had not so much desire to improve their material being as do citizens in the Western world. (B) Furthermore, the Soviet type of "Socialism" has self-imposed restraints upon its material incentive policy. It must not encourage people to the extent where they become selfish moneymongering and acquire other petit bourgeois desires of material existence. (C) Khrushchev's material incentive policy could not be accompanied sufficiently by consideration, which should have been taken in parallel with the increase of wages. The policy of producing high-quality consumer goods, which the Soviet citizens had begun demanding at the end of the 1950's, was difficult to maintain. Without this policy, however, the material incentive policy could not work effectively enough. The Soviet working people, although getting the money, could not find the goods in the shops where they made their purchases.

(3) Lack of Entrepreneurism. As the Soviet idea of the "material interestedness in quantity and quality of the result of his own work" clearly demonstrates, what the Soviet leadership, Khrushchev in particular, really wanted to have is as follows: to guide the Soviet general public to combine two concepts, i. e. "work" and "material

interest”: namely, to let them think that they must “work” if they want to satisfy their “material interest.” This is the last thing, however, that any Soviet government can expect from their general public. Russians have never been directed to material benefits, nor they have been trained to do so. Russians work hard, maybe even harder than any other nation, if they are moved by “special cause, person, or ideal,” but not by his own material interest. They may have material need, but seldom do they think to satisfy it by working harder. In a word, they are not “industrial-minded.” In contrast with some West European countries, there had been very insufficient and delayed development of “entrepreneurship” in pre-Revolutionary Russia. Since the Revolution the Soviet governments have tried hard to create a “Socialist Industrial Man,” as the author of this paper so termed. This “Socialist Industrial Man” is an employed manager rather than an independent entrepreneur in the Soviet Union, where exist no private enterprises. The “Socialist Industrial Man” is an *economic* version of the “New Soviet Man,” who is a necessary creation for the purpose of rapid “Socialist” industrialization. Stalin created “successfully” this type of human being in a relatively short span of years. They constituted the elite class. However, Khrushchev’s scheme to transform the entire population into such a “Socialist Industrial Man” did not come off well. Mainly because the consumer goods turned out by Khrushchev were not good enough for people to place their complete trust in the system. On the other hand, however, concessions, which Khrushchev did make in order to obtain popularity among the Soviet masses, to the detriment of the elite class, were big enough to cause discontent and the resistance from the latter part of the society.

In the concluding Chapter, entitled “Mass vs. Elite,” the author attempts to view the Khrushchev policy of enlarging the scope of material reward even to the general public, against the background of “the minority rule,” which has always been governing in Russo-Soviet history. It has been widely observed that there is an outstanding contrast in Russian character between the sentimental, easy-going, unstable, formless masses, and the puritanical, strong-willed elite, who consciously tries to build up his character to overcome the weak traits of the masses. Being fully aware of these contrasting features, all Soviet leaders have employed policies to give extensive power to the elite (e. g., Lenin’s vanguard or Stalin’s cadre), leaving little to the masses. It seems, however, that only Khrushchev allowed himself to deviate a few steps from this track of the traditional Russo-Soviet rule. True, unlike Lenin or Stalin, he appeared in the “mass age,” when any political leader can not ignore the voice of the mass public any longer. But his “populist bias” held a danger to bear even a gravedigger of his own power. Especially when it tended to endanger the status quo or privileges of the elite class. What waited the man, whose “Economism” had not worked sufficiently well, and whose frequent organization reforms threatened privileged status of the party apparatchiki, was simply a “political death.”